



IEHE TOHOKU Report 68
Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

第24回東北大学高等教育フォーラム
新時代の大学教育を考える [13] 報告書

大学入試における共通試験の役割

ーセンター試験の評価と新制度の課題ー

平成28（2016）年11月

東北大学高度教養教育・学生支援機構

第 24 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [13]）

—— 大学入試における共通試験の役割
センター試験の評価と新制度の課題 ——

- ◇ 日 時 : 平成 28 年 5 月 23 日（月）13:00～17:00
◇ 会 場 : 東北大学百周年記念会館 川内萩ホール
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 40
◇ 主 催 : 東北大学高度教養教育・学生支援機構

プログラム

	司 会	東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授	宮本 友弘
13:00	開会の辞	東北大学 総長	里見 進
13:10	基調講演 1	「共通試験と個別試験に求められるもの—測定論の観点から—」 東京大学理事・副学長，大学院教育学研究科 教授 高大接続システム改革会議委員	南風原 朝和 氏
13:50	基調講演 2	「大学入試制度改革の論理に迫る ——センター試験『廃止』の理由——」 東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授	倉元 直樹 氏
14:40	現状報告 1	「センター試験運営の実際と課題」 大学入試センター 研究統括官（副所長）	大塚 雄作 氏
	現状報告 2	「センター試験を『受けとめて』 —高校の教員として 受験者の保護者として—」 静岡県立掛川西高等学校 教諭	駒形 一路 氏
15:40	討 議 司 会	—パネルディスカッション— 東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授 東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師	石井 光夫 田中 光晴
17:00	閉会の辞	東北大学 理事	花輪 公雄

第 24 回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [13]）

大学入試における共通試験の役割 —— センター試験の評価と新制度の課題 ——

目 次

第 24 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨	1
開会の辞	3
第 1 部 基調講演	
基調講演者紹介	5
基調講演 1 : 「共通試験と個別試験に求められるもの一測定論の観点から」 東京大学理事・副学長，大学院教育学研究科 高大接続システム改革会議委員 南風原 朝和 教授	7
資料	18
基調講演 2 : 「大学入試制度改革の論理に迫る ―センター試験『廃止』の理由―」 東北大学高度教養教育・学生支援機構 倉元 直樹 教授	25
資料	37
第 2 部 現状報告	
現状報告者紹介	43
現状報告 1 : 「センター試験運営の実際と課題」 大学入試センター 大塚 雄作 研究統括官	47
資料	55
現状報告 2 : 「センター試験を『受けとめて』 ―高校の教員として 受験者の保護者として―」 静岡県立掛川西高等学校 駒形 一路 教諭	57
資料	64

第3部	討 議	ーパネルディスカッションー	73
-----	-----	---------------	----

閉会の辞	85
------	----

講 評

講評1：	第24回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	東桜学館高等学校	延沢 恵理子	教諭	87

講評2：	第24回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	秋田高等学校	金岡 直人	教諭	93

講評3：	第24回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	黒沢尻北高等学校	佐藤 禎信	教諭	96

講評4：	第24回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	安積黎明高等学校	大河内 孝志	教諭	99

講評5：	第24回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	石巻高等学校	友永 能久	教諭	102

講評6：	第24回東北大学高等学校教育フォーラムに参加して			
	青森高等学校	齋藤 郁子	教諭	105

アンケート・参加者統計

アンケート集計結果	109
アンケート自由記述	110
参加者統計	125

第24回東北大学高等教育フォーラム企画主旨



大学入試センター試験に代わる新テストが迷走している。一昨年末の中央教育審議会答申では大学入試センター試験の廃止と、高等学校基礎学力テスト（仮称）（以後、「基礎学力テスト」と略記）、大学入学希望者学力評価テスト（仮称）（以後、「学力評価テスト」と略記）という二つの共通試験を軸とした新制度の構想が発表された。基礎学力テストは2019（平成31）年度、学力評価テストは2020（平成32）年度から導入が計画されている。同時に、大学独自で行う個別試験にも大きな変化が予想されている。すでに新制度の導入時期は迫り、高校、大学、受験生、保護者等、関係者が準備を加速すべき時期となっている。

ところが、いまだに新テストの具体像が見えない。例えば、学力評価テストに導入予定の記述式テストについても、問題内容、時期、手続き等、あらゆる面に異論が噴出している。基礎

学力テストの位置づけも曖昧である。センター試験の総括なしに新制度を導入することへの懸念も根強い。

現時点で新テストについて具体的に論じることが難しい中、本フォーラムでは来るべき課題を予期し、現場で可能な対応を模索すべく、原点に立ち返って改めて現実的制約の下での共通試験への期待と役割について考えることとした。

基調講演は、高大接続システム改革会議において、専門のテスト学の視点からクリティカルな問題提起を行ってきた南風原朝和と東京大学理事・副学長（教育学研究科教授）をお招きするとともに、東北大学のAO入試を中心に現場に密着した観点で大学入試を研究してきた倉元直樹東北大学高度教養教育・学生支援機構教授が担当する。南風原教授には大学入試における共通試験と個別試験の役割についてテスト

に関わる学術的観点からのお話をお願いした。倉元教授はセンター試験が廃止に直面した経緯について、大学入試制度改革に内在する論理からひも解くことを試みる。加えて、大学入試センター試験の実状について、センター試験運営の立場から大学入試センターの大塚雄作研究統括官と高等学校の立場から静岡県立掛川西高等学校の駒形一路教諭に紹介してもらうことにした。以上の講演と報告を受け、フロアからの意見を交えて討論を行い、そこから新制度への期待と課題を浮き彫りにすることを試みたい。

高等学校および大学の先生方、関係する方々の多くの参加と忌憚なき活発な議論を期待したい。

本報告書は、フォーラムの録音記録に修正を加えた原稿、「招待参加者」としてフォーラムに参加し、フロアの立場からフォーラムに対してお寄せいただいた講評、およびアンケート・参加者統計から成る。招待参加者は、東北地方6県の高等学校進路指導研究会進学指導部会等を通じ、各県1名ずつ選ばれた方々である。

本報告書は、録音テープから起こした原稿に対し、フロアからの発言を除き、発言者が校正を加え、最終的に編集責任者が表現・体裁の統一・修正を加えたものである。招待参加者の原稿の編集についても、体裁統一と誤字脱字の修正のみにとどめ、極力臨場感のある会場の雰囲気やそこに参加された方々が感じられたことを重視することにした。

尚、編集過程で生じた不具合に関しては、全て編集者の責任である。

本フォーラムの開催・運営にあたっては大変多くの方にご協力をいただいた。心より御礼を申し上げたい。

(編集担当：
東北大学高度教養教育・学生支援機構
高等教育開発部門入試開発室
教授 石井光夫・教授 倉元直樹・
准教授 宮本 友弘・講師 田中光晴)

開 会 の 辞

東北大学総長

里見 進

宮本友弘准教授(司会)：

皆さんこんにちは。予定の時刻となりましたので、本日のフォーラム『大学入試における共通試験の役割－センター試験の評価と新制度の課題－』を始めさせていただきます。私、本日の全体進行を担当いたします東北大学入試センターの宮本と申します。よろしくお願いいたします。開会にあたりまして、主催者を代表し東北大学総長里見進よりごあいさつを申し上げます。

里見進総長

ご紹介いただきました、東北大学総長の里見であります。本日は大変お忙しいところ「東北大学高等教育フォーラム」にご参加いただきまして誠にありがとうございます。開会にあたりまして、主催者を代表し一言ご挨拶を申し上げます。

このフォーラムは年に2回、春と秋の季節に開催いたして、今回で24回目の開催となります。春は高大接続や大学入試をテーマとし、そして、秋はIDE 大学協会東北支部との共催で大学教育全般にかかる時々の重要な課題をテーマとし、開催して参りました。

昨年春に開催しましたフォーラムでは「大学入試改革にどう向き合うか」をテーマとして、一昨年末に公表されました中教審答申、いわゆる高大接続答申の狙いや、その方向性について議論をしてきたところでございます。今回のフォーラムでは、入試改革における大きな課題のひとつであります共通テストの改革を取り上げまして、大学入試における共通試験の役割、センター試験の評価と新制度の課題としてご議論をいただくことになっております。ご承知のように今回の入試改革では、大学入試センター試験の廃止と高等学校基礎学力テスト及び大学入学希望者学力評価テスト、いずれも仮



称の2つの共通試験を軸とした新テスト構想が発表されましたが、この構想は大学や高校、さらには受験生やその保護者にとりましても、大きな関心事であると同時に、大きな不安を抱かせる部分だと思います。新テストにつきましては既に記述式を始めとした問題の内容や実施時期、採点の公平性等に対して様々な方面から意見が寄せられています。我々個別の大学でも改革が進められておりますが、国立大学協会としては、これまで続けてきた改革の努力を継続、発展させていく方針を確認しております。事例を申し上げますと、東京大学では前回の入試から推薦入試を導入されましたし、私どもの東北大学におきましても各方面から高い評価を受けております学力重視のAO入試をさらに拡充していくという方針で、学内での体制整備を行っているところです。新テストを含む新しい入試制度については、先の高大接続システム改革会議の報告で一定の方向が示されましたが、まだ具体的には詰めるべき課題が多く残されていることも事実です。本日のフォーラムでは、この新テストを巡って一度原点に立ち返り、大学入試における共通試験の役割について、改めて検討していきたいというように考えております。基調講演といたしましては、最初にご登壇いただく東京大学理事・副学長の南風原朝和先生は、高大接続システム改革会議において、ご専門のテスト学の視点からクリティカル

な問題提起を行ってこられた先生です。南風原先生には大学入試における共通試験と個別試験の役割についてテストに関わる学術的な観点からのお話をお願いしております。二人目は本学の高度教養教育・学生支援機構の倉元直樹教授です。倉元先生には長年の大学入試研究の経験を基に、センター試験が廃止に直面した経緯について、大学入試制度改革に内在する論理という視点から分析を行っていただきます。続いて大学入試センター試験を運営される立場からセンター試験の実状について大学入試センターの試験・研究統括官である大塚雄作先生、センター試験を受け止める高等学校の立場から静岡県立掛川西高等学校の駒形一路先生に報告をお願いしております。本日は先生方の基調講演と現状報告を手がかりに、現行のセンター試験を検証し、来るべき課題を予測し、現場で可能な対応を模索する良い機会にしたというふうに考えております。最後になりますけれども、東北大学の創立 100 周年を記念して改修整備を行った川内萩ホールに例年を大きく上回る 400 名を超える高校、大学の先生方をお迎えすることができましたことを大変嬉しく思っております。これから長時間に渡りますけれども、活発な議論を通じ、実りある会合となることを願い、開会の挨拶に代えさせていただきます。本日は本当に多くの皆様方にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

(拍手)

宮本友弘准教授(司会)：

本日の進行につきましてご説明いたします。配布資料に同封されておりますプログラムをご覧ください。本日は 3 部構成となっております。第 1 部が基調講演で南風原先生、倉元先生

からそれぞれ 40 分ずつお話をいただきます。その後 10 分程度の短い休憩を予定しております。第 2 部の現状報告で、大塚先生、駒形先生からそれぞれ 20 分ずつお話をいただきます。この第 2 部が終わりましたところで 20 分程度の長めの休憩を予定しております。第 3 部では基調講演、現状報告を踏まえての討議を行います。終了は 17 時頃を予定しております。尚、基調講演、現状報告でお話いただきます先生方の詳しいプロフィールにつきましては、配布資料に同封しておりますので、そちらをご覧くださいできればと思います。それから、配布資料の中には質問票が同封されています。その質問票に、基調講演、現状報告に対する質問や意見をお書きください。第 2 部の後の長めの休憩の際、スタッフが会場をまわりますのでご提示していただければと思います。第 3 部の討議に反映させていただきます。また、配布資料の中には、アンケート用紙も同封されております。受付のところに回収箱を設置しておりますので、お帰りの際、ご提出していただければ幸いです。尚、本日は大変気温が高いのですが、空調の切り替え時期のため、本日は空調が使用できません。お不便をおかけいたしますが、ご了承ください。よろしくお願い申し上げます。



第 1 部 基調講演

基調講演者紹介

南風原 朝和（はえばら ともかず）氏

1953 年沖縄県生まれ

〔教員歴〕

新潟大学教育学部講師（1 年間）

新潟大学教育学部助教授（10 年間）

東京大学教育学部助教授（8 年間）

東京大学大学院教育学研究科教授（13 年間）

この間、東京大学教育学部附属中等教育学校長（2 年間）

東京大学大学院教育学研究科長・教育学部長（2 年間）

東京大学理事・副学長（現職）（2 年目）

〔主な研究歴〕

専門は心理統計学（統計法・テスト理論の研究）

〔主な著書，研究業績〕

心理統計学の基礎—統合的理解のために（有斐閣，2002 年）

臨床心理学をまなぶ 7 量的研究法（東京大学出版会，2011 年）

続・心理統計学の基礎—統合的理解を広げ深める（有斐閣，2014 年）

〔学会活動等〕

日本教育心理学会理事長（4 年目）

日本テスト学会副理事長（2 年目）

日本心理学会理事（1 年目）

日本行動計量学会理事（5 年目）

〔その他の特記事項〕

文部科学省・高大接続システム改革会議委員（2015 年 3 月～2016 年 3 月）

基調講演者紹介

倉元 直樹（くらもと なおき）氏

1961 年北海道生まれ

〔教員歴〕

大学入試センター研究開発部 助手	(1990 年 12 月 ～ 1999 年 3 月)
東北大学アドミッションセンター 助教授	(1999 年 4 月 ～ 2004 年 3 月)
東北大学高等教育開発推進センター 准教授	(2004 年 4 月 ～ 2014 年 3 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授	(2014 年 4 月 ～ 2015 年 9 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授	(2015 年 10 月 ～ 現在に至る)

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（教育測定論，大学入試）

〔主な著書，研究業績〕

倉元直樹 (2014). 大学入試制度の変更は何をもたらしたのか？——昭和 62 年度改革の事例——，大学入試研究ジャーナル，No.24，81-89.

東北大学高等教育開発推進センター編 (2011). 高大接続関係のパラダイム転換と再構築，東北大学高等教育開発推進センター叢書「高等教育ライブラリ」，No.2，東北大学出版会

倉元直樹 (2011). 教育政策と学力測定の技術，日本児童研究所編 児童心理学の進歩，50，2011 年版，金子書房，199-230.

倉元直樹・大津起夫 (2011). 追跡調査に基づく東北大学 AO 入試の評価，大学入試研究ジャーナル，No.21，39-48.

日本テスト学会編 (2007). テスト・スタンダード——日本のテストの将来に向けて——，金子書房（共同執筆）

〔学会活動等〕

日本テスト学会，日本教育心理学会等
日本テスト学会理事（2005 年より）

〔その他の特記事項〕

全国大学入学者選抜研究連絡協議会企画委員会委員（2010 年 5 月より [継続中]）
日本行動計量学会 林知己夫賞（優秀賞）受賞（第 27 号）（2007 年）
日本教育心理学会 城戸奨励賞受賞（第 37 号）（1995 年）

基調講演 1：共通試験と個別試験に求められるもの

——測定論の観点から——

東京大学理事・副学長，大学院教育学研究科教授
(高大接続システム改革会議委員)

南風原 朝和 氏

[講師紹介]

宮本友弘准教授(司会)：

それでは早速第 1 部の基調講演に移りたいと思います。「基調講演 1 共通試験と個別試験に求められるもの—測定論の観点から—」南風原先生，よろしくお願いいたします。

(拍手)

南風原朝和教授：

皆さん，こんにちは。東京大学で現在，入試担当の理事・副学長を務めております，南風原と申します。

本題に入る前に，共通試験と個別試験という本日のテーマとの関係について，自己紹介を兼ねて少しお話ししたいと思います。私は専門が心理統計学で，その中にテスト理論という領域が含まれています。それで，テスト理論の専門という立場で，昨年 3 月から文部科学省の高大接続システム改革会議に参加してまいりました。そこでは主に共通試験のほうの議論が行われました。一方，その会議が始まった翌月に，東京大学の入試担当となり，そこでは個別試験，これは新たに導入された推薦入試を含めてですが，その担当を務めることとなりました。ということで，共通試験と個別試験のそれぞれに直接関係する仕事を，この 1 年ほどしてきたこととなります。

高大接続システム改革会議のほうは，今年 3 月に最終報告が出てお役御免となりました。最終報告の後，残された課題について，さ



らに実証的・専門的な検討を行うこととされていいますが，私自身の直接の関わりはなくなりましたので，本日のような機会をいただいたときに，思うこと，考えることについて発言をしているところです。

共通試験の意義

最初に，共通試験の意義ということについてですが，第一に，限られた人的資源を共通試験に集中的に投入することによって，個々の大学の人的負担を減らして効率化しつつ，高品質の評価を実現することにあると思います。個々の大学がそれぞれでやるよりも効率的で，かつ，より高い品質が得られるということです。

第二に，これは副次的なものとも言えますが，幅広い受験者にそのテストを受けてもらうこととなりますので，そうした広範な層に共通に適用される評価の軸，私たちはこういうことを大事にしているのだ，こういう軸での個人差を評価したいのだというメッセージを伝えることで，良い教育効果，波及効果をもたらすことが挙げられます。

システムとしての入学者選抜

共通試験と個別試験を考えると、たとえば共通試験だからといって共通試験のことばかり考えるわけにはいかないですね。共通試験に加えて個別試験があって、その2つが相互に関連した全体としてのシステムを構成する、それが入学者選抜です。したがって、共通試験についてはそれをどのような個別試験と組み合わせるのか、どのように組み合わせて選抜を行うのかによって、共通試験に求められるものが規定されてきます。だから一般的に共通試験に求められるものはこれっていうふうには言えないですね。どんな個別試験が待っているのか、それとどのように組み合わせるのか、それならば共通試験にはこういうものが求められるという話になってくるわけです。

たとえば、共通試験を第一段階選抜だけに使い、その後はその成績はもう使わない、第一段階選抜をクリアしたら後は個別試験だけで合否判定をするという使い方が考えられます。あるいは受験者全体に共通の基準点というものを入れて、これをパスすれば入学の資格があるというような、共通の資格試験とする使い方、さらには、よく見られるような共通試験と個別試験の総合点で判定するという使い方もあります。また、どんな個別試験が待っているのかについては、個別試験で一層本格的な学力評価をするという場合、あるいは逆に、個別試験では学力以外を重点的に評価するという場合もあります。それぞれに応じて、ならば共通試験では何が求められるかが変わってきます。

一方、共通試験がどのようなものになるか、また共通試験をどのように使うか、使うかどうかも含めてですけれども、それによって個別試験に求められるものが違ってきます。たとえば、共通試験がいまの入試改革の議論で言われているように思考力・判断力・表現力の評価を中心に、となった場合、教科の知識、理解が十分に評価されない可能性があります。だとしたら、これまで以上に個別試験で知識、理解を十分に

評価していかななくてはならないということになってきます。

それから受験者も多様で、大学も多様です。で、共通というときにどこまで共通なのか、日本中の全部の大学に共通なのか、その一部なのか、という「共通にする集合」をどう想定するかによって、共通試験に求められるものは変わってきます。一方、共通試験がどのような内容の、どのような難易度のものになるかによって、共通試験を使う大学の集合が今度は逆に規定されるということもあります。

このことに関連して、先日別のシンポジウムで、いまのように数年後の共通試験の内容が不明確で予測のつかない状態だと、私立大学が参加を敬遠するのではないかという発言がありました。受験業界に詳しい方からです。またその結果、受験者も共通試験を敬遠して、共通試験の受験を条件とする国立大学から受験者が逃げていくのではないかと、いうことでした。新しい共通試験に変えることによって、国立大学に学生が集まらなくなるとしたら、困ったことです。本日は国大協の会長である東北大学総長もご参加いただいておりますが、ここは国立大学全体として危機感を共有すべきところではないかと思います。もし共通試験を変えることでそういうことになるとしたら、いったい何をしてくれたんだ、という感じになりますね。

共通試験の設計に必要なこと

さて、以上のことをふまえて、共通試験をどのように設計していくかというときには、第一に、共通試験の使い方、そして個別試験のあり方についてどのような範囲のものを想定するかを考えておく必要があります。第二に、共通試験を使用する大学について、どのような範囲を想定するかということがあります。

これらの点については次節で共通試験の類型化を考えますが、高大接続システム改革会議の反省としては、共通試験をどのように使うかということについて、必ずしも十分な合意や検

討がなかったこと、また、受験者のどの層の話をしているのかということが、時によって、人によってまちまちで定まらなかったことが挙げられます。どの層におけるどのような利用のための共通試験かについて共通認識がないまま、たとえばいまの大学入試センター試験の問題には正答できているけれども、それは多肢選択式だから答えられているんでしょう、こういう問題なら答えられないでしょうという、非常にハイレベルな識別を問題にしているかと思えば、学力不問で大学に入ってくる人たちは、という話になったりということで、どこを見て話をしているのかということが定まらなかったという反省があります。

共通試験がどのレベル、どの層を想定しているかということについては、現在の大学入試センター試験にも課題があるとすれば、このあたりは課題かなと思います。つまり、以前に比べて受験者の数が増え、受験者の層が広がってきたわけですが、センター試験はそれに応じて、どんどんお客さんに合わせて変わってきているわけですね。細かな科目を増やしたり、難易度を調整したりということで、お客さんが変わったらそれに応じて変わってきたという部分があります。本来はそうではなく、この共通試験はどのようなレベルをターゲットにした、何のための試験なんだという設計思想が、もっとしっかりとあっていいんじゃないかと思います。その上で、利用する大学は利用する、利用しない大学は利用しないというようになっていけば展開が違ったのかなと思います。だから今後、共通試験を改革していくとしたらその辺のターゲット、目的、果たすべき機能といったことについてはより明確にしていく必要があるだろうと思います。もしそういうテストが1つ定まって、そのとき、これだと難しくて使えないという大学があったとしたら、場合によってはそれらの大学のためのまったく別のテストを用意してそれで補う、それで全体として機能するというようなことも考えてよいかと思います。

共通試験の設計に必要なことの第三は、やはり関係者、関係機関の意見を広く聴取して、納得と協力を得られる形で進めることだろうと思います。これは、本日、最も強調したい点でもあります。第四には、当然のこととして、試験設計の専門家のチェックを受けることですね。

これらの点から高大接続システム改革会議を振り返ると、いずれも十分ではなかったのではないかという気がします。しかし少なくとも、会議当日の審議はオープンで、たくさんの傍聴の方がおられました。また、議事録もほぼ発言の通りにそのまま公開されて、文科省のホームページで見ることができます。そのような公開がなされていたため、メディアからもタイムリーに発信があるなど、課題を広く共有することができました。これはたいへん良いことだと思います。この点は今後も強く望まれるところですが、4月になってから個人的にもパブリックにもまったく何も聞こえてこない。この1年で基本設計を行うという話でしたが、この2ヶ月間、何が進んでいるのか、まったく見えてこない。非常に大きな大事なことをやっているのですから、できるだけ多くの人の目に触れさせて、納得と協力を得られる形にしていく必要があると思います。決して水面下でやるような仕事ではないということは強調しておきたいと思います。

共通試験の類型

より具体的な話をしていくために、共通試験の類型を整理しておく必要があるだろうと思います。類型化の1つめの観点は、受験者の学力の範囲の広さです。非常に広い場合も考えられますし、逆に結構狭い場合もある。たとえば、ほぼ同水準の大学で連合して共通試験を作るというような場合には、学力範囲は比較的狭く収まります。

類型化の2つめの観点は、共通の合格基準点を持つ資格試験にするのか、そうでないのかということです。

3 つめの観点は、採点期間です。短期間で採点をして、可否の発表をする必要がある場合と、採点期間に比較的余裕がある場合があるかと思いますが。小・中学校で実施されている全国学力・学習状況調査などは、余裕があるというか、ただ時間がかかっているだけかも知れませんが、そんなに急いでということではないですね。実際には、指導のためのフィードバックということを考えれば、もう少し早いフィードバックが必要だと思いますが、少なくとも合否判定のような急を要する形にはなっていないと思います。

4 つめの観点は、自己採点等のために採点基準をあらかじめ公表するのかどうかということですね。する場合としない場合が考えられます。

5 つめの観点として、いまの大学入試センター試験のように同じ日、同じ時間に一斉に実施するのか、あるいは適宜、たとえば学校ごとに異なるバージョンのテストを別の日に実施するのか、ということが挙げられます。コンピュータを使った適応型テストで個人に応じた出題が自動的になされるような形、そのような共通試験も考えられるだろうと思います。

以上、5 つの観点だけを挙げましたが、それだけでも、また、それぞれの観点ごとに可能性が二択であると単純化して考えても、これを組み合わせると、32 通りの類型があります。実際に共通試験をどう設計していくかというときには、それらの類型ごとに考えていく必要があります。

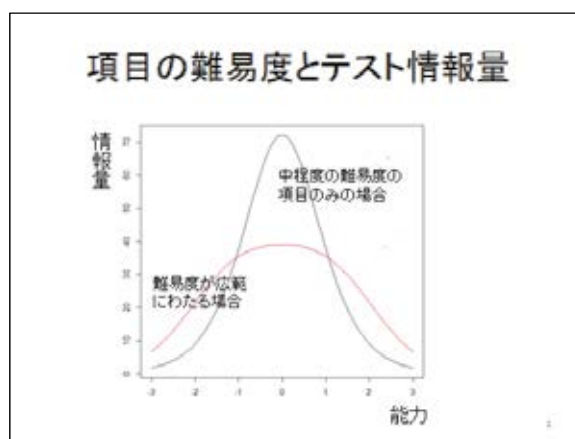
新共通試験に求められるもの

いま注目されている「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の場合ですと、今日の発表ではこのテストのことを簡単に「新共通試験」と呼んでおきますが、これらの観点に関して、以下の 5 つの性質を持つものと想定できるかと思いますが。1 つめについては「学力範囲は広い」、2 つめ、「資格試験ではない」、3 つめ、「短

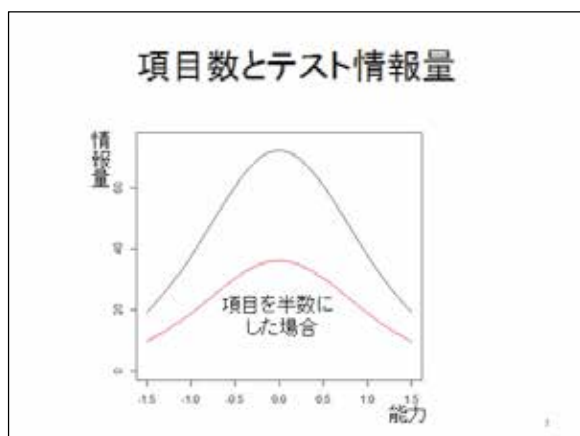
期間での採点が必要」、4 つめ、「自己採点ができるように採点基準を公開する」、5 つめ、「一斉実施である」と。実際にはまだはっきりしていないので違う部分もあるかも知れませんが、仮にこのような類型だと仮定して考えてみたいと思います。

まず、学力範囲が広いということ、それから資格試験ではないということから、以下のことが求められます。まず、広範囲で学力を識別できること。すなわちテストの得点がどの水準、上のほうでも中くらいでも下のほうでも、学力に関する十分な情報を持っているということです。もしも共通の基準があって、そこでの可否という分割だけが問題となる資格試験であれば、その分割点付近で十分な情報があれば良いわけです。それよりずっと上のほうで識別する必要もないし、ずっと下のほうで識別する必要もない。その分割点のところの精度を上げれば良いということになるわけですね。新共通試験は、そうではなく、まんべんなく高い精度が求められます。

ここで、テストのもつ情報量、精度というのがどのような要因によって影響を受けるかということについて測定論的なことを述べたいと思います。「項目の難易度とテスト情報量」と題した図は、縦軸に情報量をとっていますが、これがどのように定義されるかについては後ほどお話します。大まかに情報の多さ、精度の高さというふうに考えてください。横軸が能力の水準ですね。

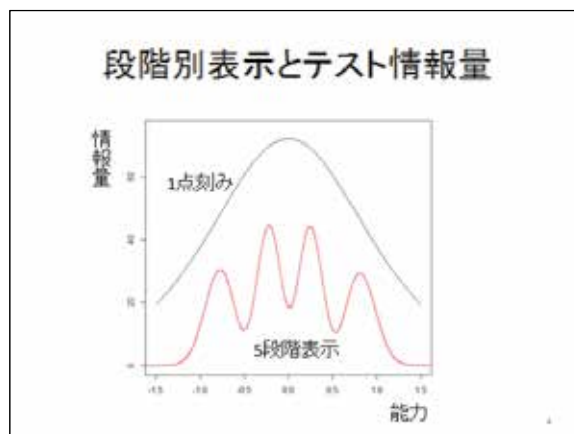


図中の、幅の狭い高いほうのグラフは能力がちょうど真ん中あたりの能力水準、そこにターゲットを合わせた中程度の難易度の項目ばかりでテストを構成した場合の情報量です。当然、真ん中あたりでは情報量が非常に高くなりますけれども、両側に行くにしたがって情報がどんどんなくなっています。それに対してまんべんなく項目の難易度を散らばらせた場合には、幅の広いほうのグラフになって中程度のところでは最初のテストには負けますが、それ以外のところではかなりの範囲で最初のテストよりも情報量が多くなっています。広範囲の識別が必要であれば、他の条件が同じであればこの2つめのような情報の曲線が望ましいということになります。



それから、テストの情報量に影響を与えるもう1つの要因として、テスト項目の数があります。「項目数とテスト情報量」と題した図で、高さが低いほうのグラフは、高いほうのグラフに対して、テストの項目数を半分にした場合の情報量で、他の条件が一定ならば単純に半分になります。項目数がこのように影響してくるということです。

次に、得点を段階別表示にするか、1点刻みにするかということがテスト情報量にどのような影響を与えるかを見てみます。入試改革の議論の中で、1点刻みでなく段階別にといいことがたいへん良いことのように語られていましたが、どうなのでしょう。



「段階別表示とテスト情報量」と題した図で、高いほうの1つ山のグラフが1点刻みのテストの情報曲線です。それを5段階、具体的には100点満点を20点、40点、60点、80点で分けて5段階表示とした場合には、低いほうの波を打っているグラフになります。波の高いところはちょうど段階が1から2、2から3・・・に変わるあたりです。言い換えれば、隣り合う段階の境界に対応する能力水準のところですね。そのあたりは能力水準の変化に段階の変化が伴いますから、段階別表示は能力に関してそれなりの情報を持っているわけです。しかし、たとえば、段階が1から2に上がった後は、能力水準が上がっても段階はしばらく2のまま続くことになり、どんなに頑張ってもまだ2点、さぼっても2点で、能力の変化がほとんど反映されません。したがって、情報量がぐんと低くなって、グラフでは谷間のようになります。特に、横軸の右端のほうに行くとも情報量はほとんどゼロですね。つまり、ある程度以上高い能力水準では、段階が全員5なので、何の識別もできない、テストの意味がないということになります。横軸の左端の、能力水準が低いところでも同様にテストの意味がないほど、情報量が低くなります。これが段階別表示です。

ここまでのことをまとめると、新共通試験に求められるものは以下ようになります。

- (1) テスト得点がどの水準でも学力に関する十分な情報を持つよう、難易度の高い項

目から低い項目まで、まんべんなくテストに含めること。

(2) 情報量は項目が多いほど多くなるので、できるだけ多くの項目でテストを構成すること。

(3) 段階別表示にすると情報量が減少するので、素点の情報を保持すること。

このうち(1)と(2)は、項目の難易度の分布と項目数のことですが、これに関連して、高大接続システム改革会議の最終報告に、思考力・判断力・表現力を中心に評価する問題を多く出題すると難易度が上がる傾向にあるということが書かれています。それから仮に記述式の問題を導入するとしたら、答えるのに時間がかかるのですが、その分時間を延ばすとは言っていないので、項目数は減少することになります。さらに、マークシート式の問題についても、いろいろと「改善」するとしているのですが、どれも全体的に難易度は上がり、かつ解答に時間がかかる方向の「改善」のようです。たとえば、問題に取り組むプロセスにも解答者の判断を要する部分が含まれるように工夫するとしています。あるいは、複数のテキストや資料を提示するとか、分野の異なる複数の文章を読ませるとか、学んだ内容を日常生活と結びつけて考えさせるとかです。それから、選択肢でありながら、複数の段階に渡る判断を要する問題とするなどです。いずれも時間がかかり、また問題を難しくするものなので、能力水準の広い範囲にわたって情報量を保持するという点からすると、測定論的には問題です。

(3)の段階別表示については、最終報告では、記述式を導入した場合、記述式問題の持つ特性を踏まえ、段階別表示とするとしています。段階別表示というのが、個々の問題に関してなのか、つまり1つの問題の記述の答えを5段階などに分けるということなのか、それとも、記述式部分の総合点を大きく5段階などに分けるのかということについては検討するというようなことが書かれています。個々の問題につ

いて段階別というのであれば普通のことで、正答、誤答も2段階ですよ。一方、総合点について段階別表示をしてしまうと先ほど述べたような情報量の減少が起きてしまうので、問題です。

段階別表示のその他の問題点

テストの結果を段階別に表示することについては、情報量の減少を引き起こすこと以外にも問題点があります。少し脇道にそれますが、入試改革議論のキーワードでもありましたので、お話ししておきたいと思います。

まず、段階をどこで区切るかということが恣意的だということがあります。明確な段階の分け方が存在しないということです。

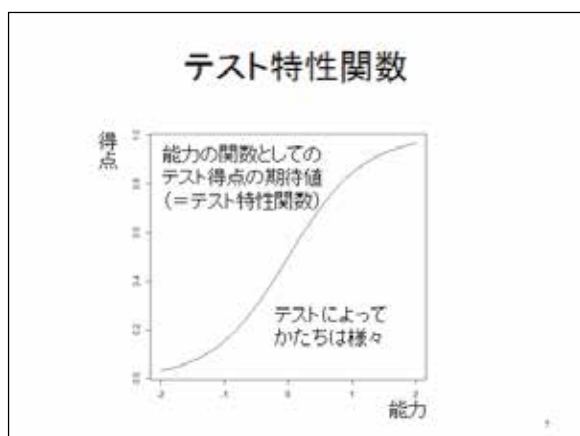
それから、先ほど情報量との関連で述べたことと関係しますが、たとえば5段階の4と言っても、その中には相当に大きな個人差があります。それが無視されてしまうということが問題です。一方で、ほとんど差はないのに、4と3の境界、4と5の境界では、差が拡大されてしまいます。100点満点の1点差ならほとんど意味がないということを皆、知っています。58点の人と57点の人はほとんど同じだということは、皆さん分かっているわけです。しかし、5段階で4と3、4と5と言うと、明確な違いがあるかのように思ってしまうわけですね。「1点刻みを脱却して、段階別表示へ」というスローガンがありますが、それはほとんど意味のない1点刻みの1点差に、スローガンの趣旨とは逆に、重大な影響力を持たせてしまうことにつながるのです。

段階別表示のもう1つの問題点についてですが、東京大学では、新たに導入した推薦入試において、大学入試センター試験で8割程度の得点を求めています。医学部医学科につながる理科三類についてはもう少し高いレベルを要求しています。個別大学が、このように柔軟に条件を設定できるのは、大学入試センター試験の結果が1点刻みだからです。もしも初めから

段階にまとめられていたら、使い方が非常に制限されてしまいます。それが問題点です。もちろん、使う側が段階別にするのは自由です。その目的に応じて、柔軟に段階別に利用したら良いのです。しかし、そのためには初めから段階別になっていると使えないわけですね。つまり、個別大学による多様な使い方を促進するためには、段階別にしないで、素点の情報を保持しておくことが必要になります。

テストの情報量について

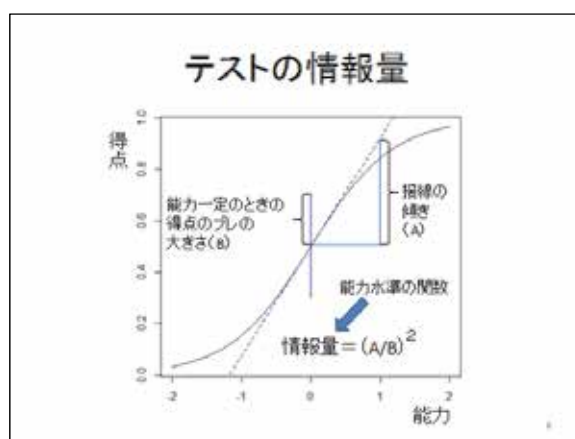
ここまで、テストの情報量という言葉がたくさん使ってきました。これも本論からは脇道にそれますが、演題に「測定論の観点から」という副題も付いていますので、少し説明しておきたいと思います。



「テスト特性関数」と題した図の横軸は能力で、縦軸はテストの得点、グラフはテスト得点の期待値です。当然、能力が高くなるほど、テスト得点の期待値は上がっていきます。そうでないとテストの機能を果たしていないわけですが、このようなグラフをテスト特性関数またはテスト特性曲線と呼びます。このグラフの形は、テストによって様々です。良いテストであれば、能力の変化に応じてぐっと上がっていく。識別力のないテストであれば、能力が変化しても得点の期待値がほとんど変わらない。このように、テスト特性関数によってテストの特性が表現されます。

次に、「テストの情報量」と題した図をご覧

ください。いま言いました、テスト特性関数が急に上がっていくのかフラットなのかというのは、接線の傾き (A) で表現されます。しかし、テストの情報量は接線の傾きだけでは決まりません。もし能力は同じなのに結果として得られる得点が大きく変動するとしたら、大きな誤差を含んでいることになり、それだとテスト得点の持つ情報量も限られてきます。その変動の大きさが図中の B です。たとえば、記述式問題の採点などで、採点者間で採点結果が一貫しないというようなことがあると、この縦方向の揺れが大きくなるわけです。これはもちろん、小さいほど良いです。接線の傾き (A) は大きいほど良く、縦軸のぶれ (B) は小さいほど良いということで、情報量は非常にシンプルに、この A と B の比をとって 2 乗したもの $(A/B)^2$ で与えられます。



ここで重要なポイントは、テストの情報量が横軸の能力の関数であるということです。個々のテストは、どの能力水準の範囲で情報量が高いかというように、能力別に、能力の関数として表現されます。そこがテストの信頼性というものとは大きく違うところです。信頼性は、1つのテストとして信頼性がいくらかというふうに言うわけですが、情報量はそうではなくて、どの能力水準では情報量はいくらかで、どの能力水準では情報量が十分でないというように、能力の水準別に見ていくものです。能力の広い範囲にわたって利用される共通試験の設計の上では、このようなテスト情報量が重要な考え方に

なるだろうと考え、ここで紹介しておきました。

再び、新共通試験に求められるもの

さて本論に戻ります。先ほどの新共通試験の類型化で、短期間での採点が必要で、かつ採点基準を公開するのであれば、以下のことが求められます。

(4) 採点基準が明確で、迅速な採点が可能であること。

この観点から懸念されることは、新共通試験に記述式問題を導入しようとしている点です。一般に、記述式問題は明確な採点基準を設定するのが難しく、かつ採点に時間がかかります。それで、その問題を解決するためにということで提案されているのが、条件付記述式の問題で、これは最終報告の説明によると、作問において設定した条件に適合しているかどうかを中心に採点するというものです。設定した条件に適合しているかどうかは、いわば表面的な基準ですので採点の信頼性は高まります。信頼性というのは、採点結果が一貫しているか、安定しているかという指標です。何を測っているかということは問題にしません。採点の基準が表面的で、その意味で明確であれば、これは誰が採点しても同じ結果になりますので信頼性は高くなるわけです。しかし、それで測りたい能力を測っているかどうか、これは信頼性ではなく妥当性ですが、これは別問題です。

条件付記述式の問題例として 1 つ紹介します。今年 4 月に行われた全国学力・学習状況調査の中学校の B 問題からです。赤道のはるか上空に、地球の回転に合わせて回転する宇宙ステーションを設置して、地上とケーブルで結ぶ「宇宙エレベーター」についての記事を読んで疑問に思ったことを、「なぜ」、「どのような(に)」、「どのくらい」という言葉のいずれかを使って、20 字以上、40 字以内で 1 つ書きなさいという問題です。

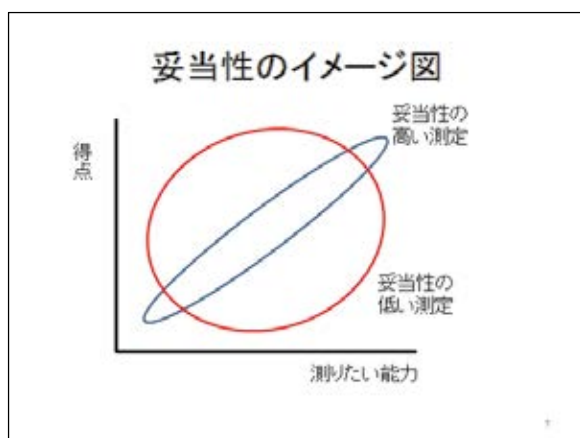
この問題の正答例の 1 つとして挙げられているのは、「宇宙エレベーターの実現には、ど

のような課題があるのか」というものです。面白くもなんともないですね。疑問を書きなさいと言われて、どのような課題があるのかと書く、これで正解です。一方、誤答例として挙げられているのが、「宇宙エレベーターのケーブルは、地上のどこに向かって伸ばしていくのか」、また、「宇宙エレベーターに乗るための費用は幾らなのか」というものです。すごく子どもらしい素直な疑問です。場所的に日本の近くなのだろうか、とか、費用は自分たちにも可能なレベルなのだろうか、という疑問ですが、これらの答えは 0 点です。なぜかという、「どこに」という言葉は、条件として設定した言葉の中に含まれていないからです。「どこに」を使っちゃいけないわけです。同様に「費用は幾ら」もだめで、これを「費用はどのくらい」としていれば正解だったわけです。

これはいったい、何を測っているテストなんでしょうか。思考力や表現力などではなく、単に表面的な条件に関する指示に従う力しか測っていないのではないのでしょうか。これはまだ「調査」だから笑って済ませられるかもしれませんが、あなたはこれで不合格になりましたという、ハイスタークスの決定に使われるとしたら、事情が違ってきます。条件付記述式というのは、こういう危なさを持っているのです。もしこのような問題を出され続けて、このような問題の対応を国語の先生が指導したら、文章を書く面白さを感じることもなくなり、記述式問題を導入することで、逆に負の波及効果が生じかねないのではないかと思います。

妥当性および「学力の 3 要素」について

いま述べたことは、条件付記述式にすることで採点の信頼性は高めることができても、最も重要な妥当性、つまり測りたい能力を測っているかどうか、という問題があるということです。ここでまた少し脱線して、妥当性の説明をします。



「妥当性のイメージ図」と題した図にあるように、テストの得点が、測りたい能力と対応し、それをよく反映している程度が妥当性です。図中の「妥当性の低い測定」の例ですと、測りたい能力が同じでも、テストの得点は広範囲にばらついてしまっています。また、逆にテストの得点が同じでも、測りたい能力の水準は広範囲にわたっており、テストの得点から測りたい能力の水準を判断するのが困難になります。

妥当性について大事なことの1つは、妥当性というのはテスト得点の持つ性質なので、設問内容だけを見て妥当かどうかは言えないということです。記述式問題であれば、設問内容だけでなく、採点基準はどうか、誰が採点するのか、どのような体制で採点するのか、その結果としてどのような得点が産出されるのか、ポイントで、この最後に得られるテスト得点の妥当性を問わなければならないわけです。また、選択式問題について、偶然でも正答できるから妥当でないということがよく言われますが、妥当性に関しては、そのようなこと自体は問題ではなく、そのような選択式問題がたとえば100個集まって100点満点のテストとなったとき、そこから得られるテスト得点が測りたい能力をどれだけ反映しているかが問題なのです。

妥当性について、もう1つ大事なことは、「測りたい能力」が明確に定義・整理されていないと、妥当性を検討することができないということです。

このことに関連して新共通試験では、「知識・技能」の評価も行いつつ、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価するとしています。ここにある「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」に「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を加えたものを、最終報告では「学力の3要素」と呼んでいます。

『内外教育』という刊行物の2016年4月15日号に「学力の3要素でいいのか？」という論が掲載されています。そこには学力の3要素がどのようにして生まれたのか、要素が互いにどのような関係にあるのかなどについて、疑問が述べられていますが、私も、学力の要素に関するこの整理には以下のような疑問を持っています。

1つめの要素とされている「知識・技能」の中の「知識」については、最終報告などを読むと、「知識の暗記・再生」という表現に含意されるような断片的な知識が主にイメージされているようです。しかし、実際にはいろいろな問題について「思考」し、それを通して「発見」があって、「理解」が深まり、「知識」が再構築されるという側面が重要であり、1つめの要素にある「知識」は、2つめの要素にある「思考」の材料となるだけでなく、その成果でもあります。「知識偏重」という言葉で知識が矮小化されることがありますが、深い思考によって相互に関連づけられ、構造化され、本質的な理解を伴った知識は、「偏重」される価値のあるものです。

また、「知識・技能」の中の「技能」はスキルと言い換えれば、コミュニケーション・スキルやプレゼンテーション・スキルなど、2つめの要素とされている「思考力・判断力・表現力」の中の「表現力」を包含しています。

このような深い知識や、現実には活用される技能は非常に重要であり、むしろそれこそが重要であり、それと切り離れた「思考力・判断力・表現力」を中心に評価するというのは、上で述べたように「測りたい能力」として十分に整理

されて明確になっていないだけでなく、そもそも「測りたい能力」の設定として適切な方向性なのかという根本的な疑問があります。

もう一度、新共通試験に求められるもの

本論に戻ります。新共通試験の類型化で、一斉実施の試験ということになると、以下のことが求められます。

(5) 実施手続きが複雑でなく、分量も過大でないこと。

この観点から懸念されることは、英語の「話すこと」まで新共通試験に導入することが検討されている点です。試験全体の実施手続きが著しく複雑になりますし、記述式問題もあわせて導入すると、全体としての分量もかなり肥大化してしまいます。

以上、途切れ途切れに列挙してきた、測定論の観点からの新共通試験への要請をまとめると以下ようになります。

【測定論の観点からの新共通試験への要請】

- (1) テスト得点がどの水準でも学力に関する十分な情報を持つよう、難易度の高い項目から低い項目まで、まんべんなくテストに含めること。
- (2) 情報量は項目が多いほど多くなるので、できるだけ多くの項目でテストを構成すること。
- (3) 段階別表示にすると情報量が減少するので、素点の情報を保持すること。
- (4) 採点基準が明確で、迅速な採点が可能であること。
- (5) 実施手続きが複雑でなく、分量も過大でないこと。

また、これらの要請に対し、現時点での新共通試験のプランについての懸念をまとめたものが以下のリストです。

【測定論の観点からの新共通試験に関する懸念】

(1) 「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する問題を多く出題すると難易度が上がり、中位以下の層で十分な情報が得られない可能性がある。

(2) 記述式問題を導入すると、解答に時間がかかるため項目数が減少し、十分な情報が得られない可能性がある。

(3) マークシート式問題を提案のように“改善”すると難易度が上がり、かつ解答に時間がかかるため項目数も減少し、中位以下、そして全体的に十分な情報が得られない可能性がある。

(4) 総合点を段階別表示にすると情報量が減少する。

(5) 記述式問題を導入すると、明確な採点基準を設定するのが難しく、かつ採点に時間がかかる。

(6) 記述式問題の採点を容易にするために、提案のような条件付記述式問題を採用すると、信頼性（採点者間の一致度）は向上しても、最も重要な妥当性が低下する可能性がある。

(7) 英語の「話すこと」の評価を導入することは、実施手続きを著しく複雑にする。

(8) 記述式問題と合わせ、分量的にも肥大化する。

個別試験に求められるもの

最後に個別試験についてですが、個別試験は基本的に、個別の大学の責任で、また独自の工夫で行うものですので、今回は詳しくは取り上げません。

測定論的に言えば、共通試験の成績と個別試験の成績が非常に相関の高いものは、コストをかけて個別試験を実施する意味はないこととなります。違う側面を評価して初めて、実施する意味があるわけですね。共通試験では評価が難しいような、個別ならではの内容が望ましいということは一般的に言えると思います。

また、単独の大学で高品質の作問をし続ける

ことが困難な場合は、地域等のブロックの中での共通化という工夫も考えられるかもしれません。

高大接続システム改革会議の最終報告に、個別試験では「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」についての評価を重視すべきとの記述がありますが、どの大学も同じでは、大学の主体性も多様性もなくなります。そこは大学の主体性に任せて、大学ごとに、また大学内でも必要に応じて多様な評価を実現していけば良いと思います。

最後に、教育効果・波及効果については、個別試験の場合も、共通試験とあわせて留意していく必要があるということを述べて、まとめさせていただきます。

どうもありがとうございました。

(拍手)

宮本友弘准教授(司会)：

南風原先生ありがとうございました。冒頭で申し上げましたように、ご質問等につきましてはお手元の質問票をご利用下さい。

第4回東北大学教育フォーラム
大学入試における共通試験の役割
ーセンター試験の価値と新制度の課題
(2016.5.23、東北大学、川内敬一郎)

共通試験と個別試験に求められるもの ー測定論の観点からー

南風原朝和
(東京大学)

システムとしての入学者選抜

一方、共通試験がどのようなものになるかによって、共通試験の使い方(使うかどうかを含めて)と、個別試験に求められるものが規定されてくる

(例)・共通試験で教科の知識・理解が十分に評価されない⇒個別試験で評価

共通試験の意義

1. 人的資源を共通試験に集中的に投入することにより、個々の大学の人的負担を減らして効率化するとともに、高品質の評価を実現すること
2. 広範な大学入学希望者に共通に適用される評価の軸を示すことにより、良い教育効果(波及効果)をもたらすこと

システムとしての入学者選抜

多様な大学のうち、どの部分集合での共通試験を想定するかによって、共通試験に求められるものが規定されてくる

一方、共通試験がどのようなものになるかによって、共通試験を使う大学の集合が規定されてくる

システムとしての入学者選抜

共通試験を、どのような個別試験と、どのように組み合わせて、入学者選抜を行うかによって、共通試験に求められるものが規定されてくる

- (例)・共通試験を第一段階選抜のみに使用
- ・基準点を定め、共通試験を資格試験として使用
 - ・共通試験+個別試験=総合点
 - ・個別試験で本格的な学力評価
 - ・個別試験で学力以外を重点的に評価

共通試験の設計に必要なこと

1. 共通試験の使い方、および個別試験のあり方について、どの範囲のものを想定するか
2. 共通試験を使用する大学について、どのような範囲を想定するか

【高大接続システム改革会議の反省】

これらの点について十分な検討がなく、どの層におけるどのような利用のための共通試験かについて共通認識がないまま、試験の設計の話が進められた

共通試験の設計に必要なこと

3. 関係者、関係機関の意見を広く聴取し、納得と協力を得られるかたちで進めること

4. 試験設計の専門家の視点からのチェックを受けること

【高大接続システム改革会議の反省】

いずれの点も十分とは言えなかった

しかし、当日の審議も議事録も公開されたため、タイムリーにメディアからの情報発信があるなど、課題等を広く共有することができた（この点は、今後強く望まれる）

共通試験の類型

5. 一斉実施か、適宜実施か

5a. 一斉実施

5b. 適宜実施

（学校ごとに異なるバージョンを提供、またはCBTによる適応型テスト）

以上だけでも $2^3=32$ 通りの類型の可能性があり、それによって求められるものも異なってくる

共通試験の類型

1. 受検者の学力の範囲は？

1a. 受検者の学力範囲は広い

1b. 受検者の学力範囲は狭くない

（同水準の大学間での共通化の場合など）

2. 共通の合格基準点をもつ資格試験か？

2a. 資格試験ではない

2b. 資格試験である

「大学入学希望者学力評価 テスト（仮称）」の場合

ここでは、このテストを「新共通試験」と略称し、以下の性質をもつと仮定して、「求められるもの」について検討する

1a. 受検者の学力範囲は広い

2a. 資格試験ではない

3a. 短期間での採点が必要

4a. 採点基準を公開する

5a. 一斉実施

共通試験の類型

3. 採点期間

3a. 短期間での採点が必要

3b. 採点期間には余裕がある

（全国学力・学習状況調査など？）

4. （自己採点等のための）採点基準の公開

4a. 採点基準を公開する

4b. 採点基準を公開しない

新共通試験に求められるもの

1a. 受検者の学力範囲は広い

+

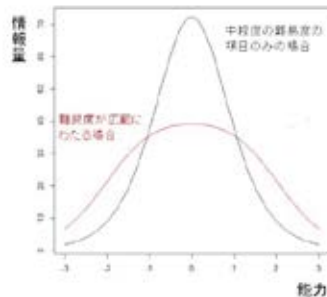
2a. 資格試験ではない

↓

広範囲で、学力を識別できること、すなわちテスト得点がどの水準でも学力に関する十分な情報を持っていること

（共通の基準で合否を決める資格試験であれば合否の分割点付近で十分な情報量があればよいが）

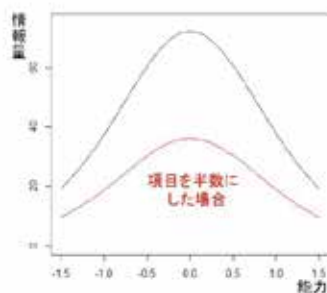
項目の難易度とテスト情報量



新共通試験に求められるもの

- (1) テスト得点がどの水準でも学力に関する十分な情報を持つよう、難易度の高い項目から低い項目まで万遍なくテストに含めること
- (2) 情報量は項目が多いほど大きくなるので、できるだけ多くの項目でテストを構成すること
- (3) 段階別表示にすると情報量が減少するので、素点の情報を保持すること

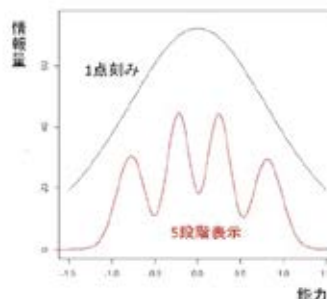
項目数とテスト情報量



(1)(2)の観点から懸念されること

- 「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する問題を多く出題すると、難易度が上がる傾向がある (最終報告, pp.58-59)
- 記述式問題を導入すると、解答に時間がかかるため項目数が減少する
- マークシート式問題を以下のように“改善”する (最終報告, p.55)と、全体的に難易度が上がり、かつ解答に時間がかかるため項目数も減少する
 - ☆ 問題に取り組むプロセスにも解答者の判断を要する部分が含まれるよう工夫すること

段階別表示とテスト情報量



(懸念される“改善”の続き)

- ☆ 複数のテキストや資料を提示し、必要な情報を組み合わせ思考・判断させること
- ☆ 分野の異なる複数の文章の深い内容を比較検討させること
- ☆ 学んだ内容を日常生活と結びつけて考えさせること
- ☆ 他の教科・科目や社会との関わりを意識した内容を取り入れること
- ☆ 正解が一つに限られない問題とすること
- ☆ 選択式でありながら複数の段階にわたる判断を要する問題とすること
- ☆ 正解を選択肢の中から選ばせるのではなく必要な数値や記号をマークさせること

(3)の観点から懸念されること

■ 記述式問題を導入するとした場合に、「結果の表示については、記述式問題の持つ特性を踏まえ、段階別表示とする」とし、「段階別表示について、個々の問題に関して表示するのか、総合的に表示するのかなどについても検討する」(最終報告, p.57)としている

■ 個々の問題についてであれば、「正・誤」の2段階表示を含め普通のことだが、総合的に段階別表示となると、情報量の減少のほか、種々の問題が生じる(配付の『テスト学会誌』説説を参照)

20

新共通試験に求められるもの

3a. 短期間での採点が必要

+

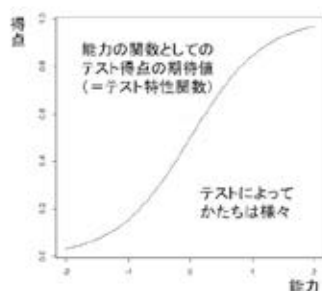
4a. 採点基準を公開する

↓

(4) 採点基準が明確で、迅速な採点が可能なこと

21

テスト情報量についての補足



22

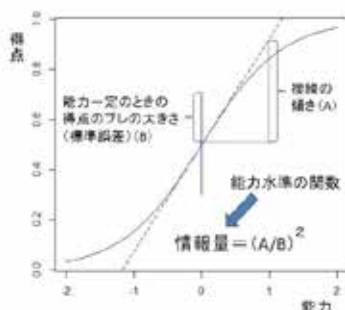
(4)の観点から懸念されること

■ 記述式を導入すると、明確な採点基準を設定するのが難しく、かつ採点に時間がかかる

■ 記述式の採点を容易にするために、「作問において設定した条件への適合性を中心に採点する」(最終報告, p.57)「条件付記述式」を採用すると、信頼性(採点者間の一致度)は向上しても、最も重要な妥当性が低下する可能性がある

23

テストの情報量



24

「条件付記述式」の例

■ 平成28年度全国学力・学習状況調査の中学・国語Bの第2問の三のア:

【問】「雑誌の記事」を読んで、宇宙エレベーターについてあなたが疑問に思ったことを、「なぜ」、「どのような(に)」、「どのくらい」という言葉のいずれかを使って、二十字以上、四十字以内で一つ書きなさい。

【正答例の1つ】宇宙エレベーターの実現には、どのような課題があるのか。

【誤答例1】宇宙エレベーターのケーブルは、地上のどこに向かって伸ばしていくのか。

【誤答例2】宇宙エレベーターに乗るための費用は幾らなのか

25

「条件付記述式」の例

最終報告にある「複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめるための思考力・判断力やその過程や結果を表現する力」を妥当に評価しているか、単に**表面的な条件に関する指示に従う力**を評価しているのではないか、疑問が残る

⇒負の波及効果の可能性も

19

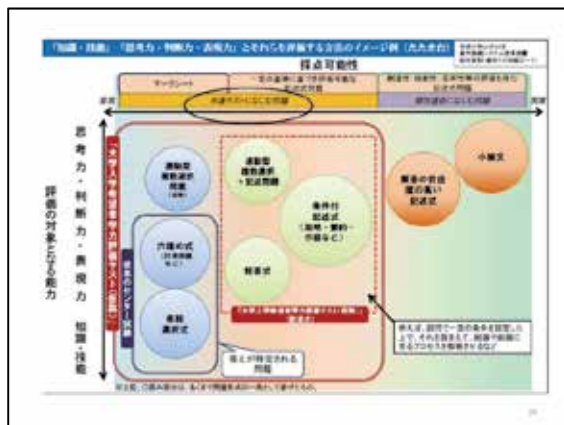
知識・技能について

・知識には、「知識の暗記・再生」という表現に含意されるような断片的な知識だけでなく、深い思考によって相互に関連付けられ、構造化された、本質的な理解を伴った知識があり、これは「**慎重**」されて良いもの

・技能(skill)は、writing skill や communication skill など、表現力と称されているものも含んでおり、英語では「多技能」の評価をとられ、主役になっている

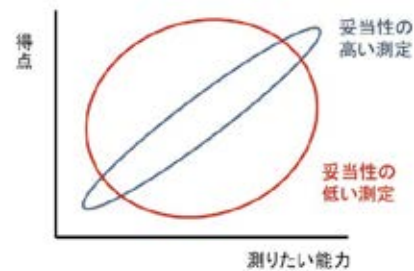
・このような深い知識や、現実に活用される技能と切り離した「**思考力・判断力・表現力**」を中心に評価、ということについては、**慎重な判断が必要**

20



21

妥当性のイメージ図



22



23

妥当性に関する重要なこと

- 妥当性は、結果として得られる得点の性質であり、設問内容だけでは決まらない
- どのような採点基準、採点者、採点体制で、どのような得点が産出されるかがポイント
- 選択式が1個1個の問題で偶然正答の可能性があっても、それ自体は問題ではなく、あくまでも全体としての得点が妥当であるかどうか問われる

24

新共通試験に求められるもの

5a. 一斉実施

↓

(5) 実施手続きが複雑でなく、分量も過大でないこと

24

測定論の観点からの懸念まとめ

(1) 「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する問題を多く出題すると難易度が上がり、中位以下の層で十分な情報が得られない可能性がある

(2) 記述式を導入すると、解答に時間がかかるため項目数が減少し、十分な情報が得られない可能性がある

(3) マークシート式問題を提案のように“改善”すると難易度が上がり、かつ解答に時間がかかるため項目数も減少し、中位以下、そして全体的に十分な情報が得られない可能性がある

(4) 総合点を段階別表示にすると情報量が減少する

25

(5)の観点から懸念されること

■ 英語の「話すこと」の評価を導入することは、実施手続きを著しく複雑にする

■ 記述式と合わせ、分量的にも肥大化する

26

測定論の観点からの懸念まとめ

(5) 記述式を導入すると、明確な採点基準を設定するのが難しく、かつ採点に時間がかかる

(6) 記述式の採点を容易にするために、提案のような「条件付記述式」を採用すると、信頼性(採点者間の一貫性)は向上しても、最も重要な妥当性が低下する可能性がある

(7) 英語の「話すこと」の評価を導入することは、実施手続きを著しく複雑にする

(8) 記述式と合わせ、分量的にも肥大化する

27

測定論の観点からの要請まとめ

(1) 難易度の高い項目から低い項目まで万遍なくテストに含めること

(2) できるだけ多くの項目でテストを構成すること

(3) 段階別表示にせず、素点の情報を保持すること

(4) 採点基準が明確で、迅速な採点が可能なこと

(5) 実施手続きが複雑でなく、分量も過大でないこと

28

最後に個別試験について

測定論的には、共通試験との相関が非常に高いものは実施する意味がない

共通試験では評価が難しい、個別試験ならではの内容が望ましい

単独で高品質の作問が困難な場合は、複数大学での共通化などの工夫も考えられる

入学選抜方針のもと、たとえば多様化のために複数の方法を並置するなど柔軟に

個別試験の教育効果(波及効果)にも留意

29

基調講演 2：大学入試制度改革の論理に迫る

—センター試験「廃止」の理由—

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

倉元 直樹 氏

〔講師紹介〕

宮本友弘准教授(司会)：

それでは次の基調講演に移ります。「基調講演 2 大学入試制度改革の論理に迫る——センター試験廃止の理由——」倉元先生よろしくお願いいたします。

倉元直樹教授：

1. はじめに

東北大学の倉元と申します。南風原先生のお話は、かなり理論的、かつ、これから先に向かってのお話というふうに感じましたけれども、私の方は一度、昔を振り返ってみようと思います。今まで、私どもが経験をしてきました制度改革、これは何度か大きなものもあったわけですが、その中で学んだ経験を振り返り、そこから今後何が起こってくるかを考えてみよう、というような主旨であります。お付き合いいただければと思います。よろしくお願いいたします。

本日の内容です。基本的にはセンター試験について考えてみたいという主旨でございます。

南風原先生のお話にもありましたように、復習になりますけれども、基本的には一昨年末出ました中教審の「高大接続答申」・・・と私どもは呼んでいますけれども・・・それによって新制度が提言されています。そこでは、二つの共通試験の導入が言われておりまして、その代わりに大学入試センター試験が廃止になる、というようなお話でございました。今回は、私の話では高等学校基礎学力テストは置いておいて、基本的には大学入学希望者学力評価テスト



を新しい共通試験としてとらえ、簡単にお話をさせていただきます。

南風原先生が高大接続システム改革会議に加わっておりますが、中間まとめが出され、その段階で、大学入試センター試験に関する検証をする必要があるのではないか、というような声がありました。そこから今回の企画をしたというところでございます。その後、高大接続システム改革会議は3月31日に「最終報告」という形で結論を出されたという経緯でございます。

私の話の基軸にしておきたいと思う資料がございます。実は、南風原先生のお話と共通でございまして、私も「日本テスト学会」というところに所属しております。そこで、あまり知られてはいないと思うのですが、この後、ご講演になられます大塚先生とも一緒にまとめた「テスト・スタンダード」という・・・これは本の形になっておりますけれども・・・語弊を恐れずに言えば、テストの守るべき基本の法律、「憲法」のようなものを作ったと言えるかもしれません。テストということについて考える時に、まずは、テストには「品質」がある。また、日本には日本固有のテストに関わる習慣があ

る、といったことを踏まえた上で、こういったものを大事にしていきましょう、こういったことを守りましょう、といった指針をまとめたものが「テスト・スタンダード」でございます。南風原先生のお話の中で、「テストには目的があり、設計がある」ということに触れられました。この考え方は、私のお話でも踏襲していきたいと思います。非常に大事な考え方だと思います。ということで、センター試験について少し突っ込んで考えてみたいと思います。

2. センター試験の実像

センター試験とは、どんなテストかと言いますと、「独立行政法人大学入試センター法」という法律があります。それは、大学入試センターのあり方について定めたものですが、その中で、確か第13条第1項だったと思いますが「大学に入学を志願する者の高等学校の段階における基礎的な学習を達成の程度を判定とすることを主たる目的として、大学が共同して実施することとする試験」というのが大学入試センター試験の定義です。これを基本設計のコンセプトにおいて、センター試験が設計されていることになります。

パワーポイント（配付資料）には「TS」と記載されておりますが、「テスト・スタンダード」の略でございます。この「1.1」に「テストの基本設計」という条項があります。それにしたがって、まず、テストには「目的」があり「受検者」、・・・これは普段、入試の「受験」といった場面で用いる文字とは異なる用字ですが、一般的な意味で、例えば、運転免許試験のような適性検査ですとか、アンケートへの回答、そういったものまで含めて「受検」と表示していますが・・・「受検者層」です。さらに、テストでは「測定内容」が重要です。当たり前といえば当たり前ですが、センター試験の「目的」は「大学入学者選抜に利用する」ということになります。「受検者層」は「利用大学等を受ける入学志願者」となります。「測定内容」

は「高校における基礎的な学習の達成度」というのがセンター試験の設計であります。

さらに、センター試験について語るためには、センター試験が実際どのように実施されているのかを押さえておかなければなりません。後で大塚先生がもう少し詳しくお話して下さるでしょうが、志願者数、受験者数は、このところ 50 万人台で推移しております。一時、志願者数が 60 万人に達したこともあったようですが、今は、多分、55 万人前後だと思います。

参加している大学は、短期大学も含めて 700。監督者数は恐らく 6~7 万人ぐらいの規模になっているのではないかと思います。これは根拠のある具体的な数字が見つけれなかったのですが、公刊されていたある資料に掲載されている数字から推定してみると、そのくらいになりました。これらの監督者が監督要領を持って監督に当たります。今日、持って来られればよかったのですが、監督要領は「部外秘」という扱いになっていますので、残念ながらお見せできません。ご存知の方もこの中に結構いらっしゃるかと思いますが、最近では 200 ページを超えています。6~7 万人が、この 200 ページを超えた監督要領に基づいて実施するという大変な規模の試験となっています。

ただ、これが世界に類例がないほどのものかと言えば、そんなことはありません。私もそれほど詳しいわけではないのですが、米国には SAT という大学入学者選抜に使われる試験があります。複数回受験ができる、という話が知られています。当たった資料が 20 年ほど前の情報なので、最近の正確な状況は分からないのですが、・・・おそらく、そんなに変わってないと思いますが・・・年に何回か受験機会があります。通算すると、年間で 200 万名ぐらいの受験者数に上るのですが、やはり 1 日で 40 万人くらい受験をする日があるようです。センター試験がものすごく例外的に大規模かということ、そうでもないということになりますね。

次に、センター試験の運営に触れます。大学入試センターから毎年発行されている「大学入試センター要覧」という冊子によりますと、センター試験は毎年 110 億円ほどの予算で行なわれています。約 9 割は受験生からの受験料ですね。検定料・・・それから成績通知の手続きを希望した場合には 800 円必要になりますけれども・・・それで賄われています。残り 1 割くらいは、大学がセンター試験を利用する時に志願者一人につき、いくらか大学入試センターに成績提供料を支払っている。これで成り立っています。110 億円がどの程度の金額かと言いますと、私たち、仙台の人間には縁の深い、東北楽天イーグルスにいた田中将大投手が大リーグに移籍した時、7 年間で 160 億円という契約を結んだのですね。1 年間のセンター試験の経費では田中将大投手を雇うことができないのです。しかも、大事なことは、大学入試センター職員の人件費を含めて、全て自前で賄われているということです。税金が一切投入されていないということなのです。

センター試験は 2 日間で実施されます。出題教科グループという形で、初日が 3 コマ、2 日目が 4 コマの試験時間帯から、受験生が自由に科目を選んで受ける形になっています。科目数もここに示しております通りですが、かなり複雑なシステムです。あとで触れることになるかと思いますが、大きなトラブルの元になったのは、この 1 科目と 2 科目受験が混在している時間帯でした。

センター試験の歴史を簡単にご説明いたします。前身はご存知の通り共通 1 次ですね。正式名称は「共通第 1 次学力試験」というものです。共通 1 次は 1979 (昭和 54) 年度に導入されました。それから色々と議論があって、1987 (昭和 62) 年度にア・ラ・カルト方式・・・この件についても、あとで説明いたします・・・が導入されます。1990 (平成 2) 年度からはセンター試験となっています。そのあと、様々なアクシデントに見舞われながらも現在まで続

いている、というのがセンター試験の概要です。

3. センター試験の誕生

ここで共通 1 次を話に出しましたのは、共通 1 次とセンター試験の設計について一度ご紹介させていただき、一緒に考えていただきたいということなのです。

共通 1 次というのは、文字通り、「国立大学が共同で実施する 1 次試験」という位置づけだったのですね。すなわち、各大学で独自に行う 2 次試験・・・今の個別試験・・・との組み合わせで使うという形で設計されたものです。したがって、「受検者層」は、「国公立大学受験生」になります。学力的に言えば、比較的上の方に限定された受検者層です。大学入学志願者全体の中で学力的に高いという意味です。なお、「上の方」というのは価値を含んだ言葉ではなく、「学力というものを試験の点数で表した時に得点が多くとれるであろう」という程度の意味として受け取ってください。

「測定内容」が「高校」における学習の「達成度」という点はセンター試験と同じなのですが、センター試験では「一般的」という言葉が抜け落ちて「基礎的」達成度となりました。これはどういうことかということ、共通 1 次は 5 教科 7 科目制、すなわち、5 教科とは、国、数、それから当時の社会ですね、それと理、英・・・正確には外国語・・・ですね、この 5 教科がワンセットで、さらに、社会と理科は 2 科目受験する、という制度です。「5 教科 7 科目全体でワンセット」という設計のテストでありました。そういった設計のコンセプトです。

先ほどの南風原先生からのお話でもありましたように、この 1 次試験と各大学の 2 次試験との組み合わせで選抜を行う、という制度です。国立大学が作ったものですが、公立大学もそれを利用するという形で、国公立大学の受験生が対象の制度となり、このような設計になったということです。

それに対して、センター試験ですけれども、

国公立大学に私立大学が加わって成立し、さらに短期大学の受験生が加わりました。当然、私立大学にも学力的に非常に水準の高い受験生が混じっているわけですが、おおむね受験者層としては、対象者が学力の下の方に広がって行くことになりました。南風原先生のお話の中にもあった通りです。

また、先ほど触れましたが、測定内容から「一般的」という文言が抜けました。一般的ではなく「基礎的」達成度ということになり、「ア・ラ・カルト方式」が導入されます。要は、「1教科1科目」のみのテスト結果に基づく選抜をも可能にした、ということです。さらに、個別試験を課さないでセンター試験だけで選抜しても良い。そのような設計です。

繰り返しますが、以前、共通1次の時には5教科7科目全体で1セットだったものが、1教科1科目で選抜を成立させることが可能という形になりました。これは、基本設計的には大転換、大きな改革だったと思います。すなわち、以前の共通1次の時には、2次試験も含めて、選抜として必要な能力を測定すればよい、ということだったわけです。それがセンター試験になった時には、それぞれの科目がそれだけで選抜に使われても良い、というコンセプトで各科目が設計されていなければならなかった。このことはしっかりと意識されてしかるべきだったと思います。

4. センター試験の変容

センター試験に変わった当初、この基本設計の根本的転換が意識されることはほとんどなかったと思います。というのは、受験する側の準備行動にそんなに影響がなければ、意識しようがないのだと思うのです。ただ、ア・ラ・カルトは徐々に顕在化していきます。

これは大学入試センターの内田先生と鈴木先生のご研究から引用してきたものです。これがセンター試験の5教科受験者の割合です。当初はほとんどが5教科受験者だったのが、10

年くらいで5割強まで下がり、その後は横ばいということなのです。実は、5教科受験者の比率が低下してきたのは5教科の受験者数が減ったのではなくて、センター試験を新たに受験する層が出てきたからだと思われます。それはア・ラ・カルトの成果です。私立大学の専願者もセンター試験を受けるようになってきたからだ、と解釈できます。

ここで大切なのは、共通1次からセンター試験へ移行したときに、「何が変わってなかったか」ということです。何が変わってないか。これはもうお分かりになりますよね。先ほどから言っているように、マークシート方式という出題、解答形式です。テスト・スタンダードでは、質問項目、それから回答形式・・・回答の「回」は、一般的な「回る」という字を使っていますけれども・・・のコンセプトです。それから、それは採点手続きの設計にも直結します。すなわち、受験する側からは、変化が見えない形だったのですね。

しかし、理念的には大きく変わりました。それがどういう形で顕在化してきたかということです。年を経るにつれてア・ラ・カルトが実質化してきました、つまり、当初は実質的に5教科7科目が標準だったのが、今は5教科未満の受験も普通になってきている。少なくとも、一部の受験生にとってそれが一般化している。

それから、前年度の成績を使うことができるようになりました。実施面では科目選択の弾力化。先ほど申しあげました同じ試験時間帯に1科目と2科目受験者が混在してしまう、というようなことが起こっています。

したがって、実は、センター試験というのは、共通1次のコンセプトに対して、試験の実施や解答行動の側面では変化を見せずに根本的な設計思想の大転換を行い、運用の面でそれに対応してきたという試験だったということが言えます。センター試験は共通1次から誕生したものです。共通1次試験を多様化することが目的でありました。しかし、出題、解答、

採点に変更はなかった。ただし、実施や利用の複雑化によって、多様化という理念を達成していくという方針を取ったように思えます。

そうだからこそ、テストの基本設計という側面から考えると、センター試験の理念と制度設計には、元々、矛盾がありました。5教科7科目がワンセットであれば、それらを総合した「総得点」という概念が重要になる。しかし、センター試験の下では、一つ一つの科目が単独で選抜に使われる可能性がある。また、どの科目を使っても良いということになるので、総得点という概念はありません。逆に、得点が全ての科目の間に比較できないと駄目なのです。本来は、つまり、センター試験導入の時点で全ての科目をカバーする「完全得点調整方式」の存在が必要になったはずだ、ということが言えるのです。

ただ、これは初期には表面化しませんでした。これまで運用してきてセンター試験、20年以上が経って、やはり制度疲労が起こってしまって、今に至っているわけです。

5. センター試験の評判

それでは、実際にどんな問題があるのか、という話をします。まず、中教審の「学士課程答申」、・・・この答申では「高大接続テスト」の導入が提言されたわけですが、高大接続や大学入試関係という意味では「高大接続答申」の一つ前の答申である、と言ってよいと思いますが、・・・ここでは、やはり、新しいテストの導入を提言しておりました。したがって、新テストとセンター試験との関係が問題になるのですが、改めて見直してみますと、学士課程答申ではセンター試験については大絶賛だったのですね。「我が国全体として、入試の改善を推進する上で大きな貢献」をしてきたと言えるを書いてあります。

これが変わってしまうわけですが、きっかけは何だったのか、ということですね。私自身も触れたくない話題ではあるのですが、2012(平

成 24) 年度入試の話をしなくてはならないと思います。この時、何が起こったのか。2012(平成 24) 年度のセンター試験です。

先ほど、ちらりとお話しました。科目構成が複雑化したことに起因する大規模な入試ミスが起こってしまったのです。「地理歴史、公民」という枠、それから「理科」、ここが問題だったのです。ですから、初日の1時間目ということも不運に働いたと思います。一つのコマで自由に2科目選択が可能になり、さらに1科目でも構わない、という制度になったので、実施に工夫が必要となりました。そこで起こったのが「地理歴史」と「公民」の問題冊子配布ミスです。

「地理歴史」と「公民」の試験問題は教科ごとに分冊となったのですが、これらが同一時間で実施されたにもかかわらずに別冊子となった理由としては、一つにまとめるには厚すぎたからだ、と聞いています。一つの時間帯に行われる試験問題の冊子が分冊になり、しかも2科目選択者と1科目選択者が混在する状況の中では、特に2科目選択しようとする受験生にとっては非常に複雑な仕組みになってしまったのです。

また、試験監督者にとっても大変複雑なシステムとなってしまった。その結果、試験監督者による試験問題冊子配付に関わるトラブルが続出しました。

マニュアル、すなわち、監督要領では、最初から2冊ずつ配っておいて、解答する科目を受験生に自由に選ばせなければならなかった。それを監督者が誤って1冊しか配らなかつた、というようなトラブルが続出したのです。その結果、たしか、200～300名もの再試験者を出したという事態に至りました。

余談ですが、「入試ミスに関する研究」というものがあります。入試ミスでどのくらい重大な結果が引き起こされたかということによって、ミスの重篤度を判定し、分類した研究があるのですが、2012(平成 24) 年度入試における

大学入試センター試験に関しては、その中では非常に軽微なカテゴリーに分類されるようなミスでした。最も問題があるのは、受験生の合否に影響が及ぶものです。特に、複数年度に渡って合否判定をやり直して追加合格者を出さなければならないようなミスが続き、さらにそれを隠蔽しようとしたようなケースが一番深刻なカテゴリーに該当します。実際に、過去にはそういった問題が起こったこともあります。しかし、このケースでは、「再試験」という形で受験生の権利も保証されました。確かに入試ミスであったことは紛れもない事実なのですが、致命的な問題ではなかったと考えることができます。

しかしながら、世の中はそう見てはくれなかった、ということになります。そこで、検証委員会が立ち上がります。その報告書を読みますと、こう書かれています。「科目選択の範囲の拡大」、そのことに対しては「意義があった」という意見もある、という評価になっていました。しかし、大きな制度変更であったのに準備期間が足りず、当初から複雑となった試験方法に対する懸念の声が上がっていたにもかかわらず、あの形式で実施を強行せざるを得なかった。すなわち、センター試験の複雑化が限度を超えていた、という総括です。

若干、寄り道になりますが、この制度は国立大学協会からの強い要請で実現したものだったのです。・・・会長がおられるところで大変申し訳ないですが、・・・「国立大学の入試改革」と題した冊子が出されました。平成 12 (2000) 年のことですから、当時はまだ「大学審議会」と呼ばれた審議会が存在していた頃ですね。今は、中教審の中の大学関係の部会に吸収されていますが、そこで国立大学の入試の在り方が提案されているのですが、その中に、ア・ラ・カルト方式の弊害を認識し、「5 教科 7 科目」の受験を促す方針が出されています。同じ「5 教科 7 科目」と言っても、「地理歴史」と「公民」とを合わせて 5 教科として、数学を 2 科目と数

えていますので、実は、共通 1 次時代よりも 1 科目減、受験生から見ると負担軽減となっているのですが、その中で、「地理歴史」と「公民」から自由に 2 科目を選択させる、という提言がなされています。2000 (平成 12) 年ですから、相当に昔の話ですね。それが 12 年後にようやく実現に至った。共通 1 次の最初の制度の時代であれば、全員が 120 分で 2 科目自由選択でしたがア・ラ・カルトになった以上、1 科目の選択者と 2 科目の選択者がいる。この点の技術的な問題を見落としていたのか、軽視していたのかということですね。

もう一つ言えるのは、今までの共通 1 次、センター試験の歴史の中で、2 冊の試験問題を同時に配布することは、特別に事前申告して別冊紙を受け取る例外的な少数受験者のための制度以外にはなかったのですね。6 ～ 7 万人に及ぶかもしれない試験監督者が、このことを事前に理解していなければ、成功には至らなかった、というのが実態です。センター試験制度は複雑さの極みになっていたのです。

6. 大学入試改革論議とセンター試験

この後、様々な改革論議がなされてきたわけですが、そこで何が言われていたかということについて話します。

おそらく、大学入試改革に注目が集まった最初のきっかけとなったのが、与党自由民主党の「教育再生実行本部」における第 1 次提言です。3 年前の 4 月です。この提言は、元々は入試問題に焦点を当てていたのではなくて、グローバル化対応で英語教育をどうすべきか、ということを議論していました。その中で、「TOEFL 等の一定以上の成績を受験資格及び卒業要件とするような大学を作る」というような提案について、「TOEFL を大学入試に導入する」というような形で大々的に報道されたのです。この時点では、実は、センター試験はおそらく視野に入っていなかったと思います。提言でも、一切、言及がありませんでした。

中教審の答申に最も影響を与えたのは「教育再生実行会議」でしょう。首相官邸の下に作られた、教育に関する議論をする首相の私的な諮問機関、という位置づけのものです。この「第4次提言」でセンター試験に関する言及がなされました。そこでは、「良質の試験問題を提供」して「入試の個性化・多様化」に寄与してきた、というポジティブな評価の反面、「一点刻みの合否判定」を助長し、その結果、受験生の「志願先選択に直結する心理的圧迫」が存在する、さらに、「運営負担が増大」し、すでに限界である、という評価に基づく議論がなされています。注目すべきなのは、センター試験の内容に対する批判は、ここでも見当たらないのです。

7. センター試験批判の構図

一方、ここまでの話が言わば「公式見解」だとすれば、巷では、センター試験が嫌いな人が大勢いらっしやいます。

センター試験の批判は間欠的に出てきます。共通する視点は何かという、ことごとくマークシート方式に対する批判なのです。マークシートの問題に対しては、それだけに特化されたテクニックがある、というわけです。さらに、それを受けて高校現場がマークシートの解答テクニック習得に血道を上げている。こんな試験はけしからんではないか、と批判されてきたのですが、これは、よく考えてみると、センター試験というだけではなく、共通1次から含めた大学入試における共通試験に対する批判ということになるのだと思います。マークシートに対する批判のもう一つの特徴は、有効な代替案が示されることがない、ということです。まず、見たことがありません。

8. 共通1次とマークシート批判

共通1次は、やはり、その当時の大学入試に関わる問題があって、そういった当時の大学入試を是正する目的で導入されました。当時・・・共通1次以前・・・は、個別大学が学習指導要

領とは無関係に、すなわち、高校で学んでいる、学んでいない、といったこととは直接的に関係なしに難問を出題している、という批判がありました。高校で学んだことに基づいて大学に進学できるようにしたい、ということで、最初は教科書を調整するための試験を構想したのです。高校間格差の補正をするテストが必要、ということで共通1次の構想が出てきました。しかし、あまりうまく行かないことが分かって、そうであれば、いっそのこと、その試験そのものを大学入試に使えばいいだろうということになって、導入されたのが、共通1次ということになります。

マークシートに関して言えば、共通1次のような試験をする、大学入試における共通試験を導入するためには、客観式で高速で採点ができるものが他にない、マークシート方式の他には良い手段がない、ということだったのでしょう。

その前には、能研テストというものがあって、そこでも、たぶん、マークシート方式のテストを採用していたと思うのですが、あまり普及しなかったのです。そこで、共通1次については足掛け8年かけてじっくり検討されました。共通1次導入時点では相当な心配があったはず。要は、採点が遅れたり、途中でマークシートがうまく読み取れなくなったり、あるいは、答案がどこかで紛失したり、といったことが起こると大変なことになったわけですが、おそらく、そういった事態に対しては、相当に気を使っていた、ということがあったのだと思います。

また、当然、マークシートではどのような問題が出題できるのか、という検討も含めて4度の試行テストが行われています。その上で、1979(昭和54)年1月からの共通1次の開始、ということになったわけです。おそらく、この試験で懸念されていたのは、やっぱり入試ミス、事故でしょうね。マークシートのために導入した機械で、当時、約30万人の受験生の答案を本当に1週間でさばけるのか、それ以上かかったらどうするのだ。もし、そういった事態に陥っ

たら、一気に廃止に追い込まれたのだらうと思います。

ところが、共通1次ではそうした事故は起こらなかった。それにも関わらず、共通1次は激しい批判を免れることができなかったのです。

共通1次に対する批判を見てみますと、偏差値偏重ということが、まず、挙げられます。この当時、受験産業が教育に露骨に介入してくるようになった、ということがものすごく激しい批判的になりました。受験生にとって、画一的ではないか、過重負担ではないか、という批判もありました。私立大学は3教科なのに、何故、国公立では5教科も課すのか。2次試験で同じ科目を課すのは無駄ではないのか……。さらに、マークシートに基づく試験の内容に対する批判も噴出しました。「記述力・創造力・考察力の測定に不適」で、そのために受験生の「主体性」が「消失」してしまう。「学力低下」が起こる、その結果、大人になると私のような人間になってしまうということが起こる(笑)。そのような批判が起こりました。

それに対して、臨時教育審議会……。それは当時の中曽根首相の私的な諮問機関です……。での議論の際には、21世紀に向けて社会の変化に対応出来るように、特に必要とされている資質能力は創造性や自ら考え表現し、行動する力だ、とされました。これまでの我が国の教育は、どちらかといえば、記憶力中心の詰め込み教育という傾向が強かったことは否定できない、ということで「新しい入試を作りましょう」ということになるわけです。共通1次に代えて、新しい共通テストを行う。それがセンター試験ということになるのですが、そこでは、以下のような提言がなされています。良質な試験問題の再利用、マークシート方式の改善、採点区分の簡素化、資格試験的な取扱い、自己採点の廃止、得点通知、総点主義によらない弾力的利用、1科目利用も可。実施回数の複数化、短大の利用検討……。スライドでアンダーラインを引いた部分は、現在までに実現された内容

です。逆に下線が引いてないところはやろうとしたけれども、導入できなかったことです。

9. センター試験廃止論

臨時教育審議会の答申が出た時代と、高大接続答申が出た時代は、全くと言って良いほど違う時代になっていると思います。まず、高度経済成長下において、……。多少は鈍ってきたとは言え……。未来に向かって成長している時代と、ほとんど経済の成長が望めない、今の時代。18歳人口も今は減少しており、大学進学率はそれとは逆に上がっていく。

臨教審では、「大学は情報公開をしなさい」と提言していたのですが、この点は当時と比べるともの凄く進歩しましたね。当時は、おそらく偏差値ぐらいしか進学のための情報がなかったのですが、今は、受験生は洪水のように雑多な情報にさらされている。

さて、今度は「高大接続答申」です。あまり時間が無くなってきましたので、ざっとお話ししたいと思います。知識量のみのもので従来の教育が通用しない……。高校教育、大学教育、大学入学者選抜は、知識の暗記、再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性を持って多様な人々と協働する態度など、真の学力が十分に育成評価されていない……。これを執筆された方は、相当に今の時代に合わせた内容を書いたように思っておられるかもしれないのですが、こうして読み比べてみると、臨教審の答申と本質的にどこが違うのか、よく分からないですね。似たような観点で、今の教育の問題が取り上げられているに思われます。

なおかつ、センター試験に替えて新しいテストを入れましょう、というアイデアも同じように響きます。臨教審の答申には見られなかったと思うのは、「合教科・科目型、総合型」、「記述式」、「CBT」、「民間の資格検定試験の活用」、こういった内容です。

余談ですが、「合教科・科目型、総合型」の試験というのは、実は、先ほど言及いたしまし

た国大協の改革提言の中にありました。私は、実は、その当時、このテーマで研究をしておりました。結局、「合教科・科目型」といった形式を導入したとしても、結局は知識を問う問題しか作れないのではないかと、いう結論に至りました。民間の資格検定試験の活用、このアイデアは非常に新しいものに見えますよね。でも、1984（昭和 59）年に経済同友会が全く同じことを提言しています。CBT に関しては、米国の SAT でも導入されていません。これは、やはり、同時に 40 万人規模が受験する試験ですから、色々な問題があって実現できない。いずれも、実現困難だったアイデアということになります。

ということで、高大接続システム改革会議では、新テストの新しさを記述式の導入に焦点化したように見えます。しかし、残念ながら、実は、この「記述式」という形式は、共通 1 次の検討過程で、共通試験導入の前提として実施不可能とされた、という経緯があります。何となく、の個人的な印象に過ぎないのですが、臨教審はこのマークシートに関する議論を巧妙に避けたように思えます。

このような形で議論をひも解いてみますと、大学入試制度批判の基本図式が見えてくるように思えます。現実の大学入試の場面では、様々な理念と選抜方法、それに対する制約条件が相矛盾する形で錯綜します。ただ、実施する側はそれらを吸い上げながら制度として実現していかないとはいけない。その中で、何とか皆が妥協できるところを探して、現実の試験として実施しているというのが現状なのだと思います。

多くの方々は、自らの体験に照らして考えた時、入試が好きだ、という人は、まず、誰もいないのではないかと思います。実施する方もやりたくはない。選抜される側には必ず不満があります。ですから、常に大学入試制度には、潜在的に批判的になるのだと思います。現行制度に対する批判は、当然のことながら、新しい

制度に対する期待、という形を取ることになるでしょう。ここまではいいのですが、・・・新しい制度、新しいテストの方式に期待が寄せられるということまではよいのですが、・・・例えば、共通 1 次はどうなったでしょうか。

共通 1 次は、周到に準備して、導入されたものです。したがって、その時点で懸念されていた懸案事項は見事にクリアしたはずなのですが、結局、マークシート方式という実施面での大きな制約が課せられることになりました。それに付随して、実に様々な観点での批判が出て来ることになった。その結果、結局、短期間で廃止という憂き目にあうことになった。

センター試験は共通 1 次と比較すると、理念的には大転換があったのですが、試験の当事者からは制度変更が見えにくかった。その結果、導入後、表面的には穏やかに進んでいたのですが、長期間的には基本設計との齟齬がじわじわと表面に現れることになり、時折、大きな問題を引き起こしながら今に至った、というのが実状ではないだろうかと思います。

センター試験廃止論の実像について、もう一度まとめたいと思います。おそらくは、2012（平成 24）年度入試の混乱が、廃止論が登場するきっかけを作ってしまったのだと思います。手続き的な混乱をきっかけとして、潜在的な不満・・・これはマークシート方式に対する批判が中心ですが・・・に火をつけてしまった。検証問題の段階では、混乱の原因が的確にとらえられていました。そこまでは良かったのですが、中教審の議論の中で、実は、論点がすり替わってしまった。すなわち、センター試験制度の複雑さが問題とされていたのが、いつの間にか、センター試験導入のときに議論をすることが避けられたと思われる、マークシート方式の問題、マークシート方式で測られる測定内容の問題に焦点が移ってしまった。それで、結果的には「センター試験を廃止する」という提言が導かれるに至ったのではないかと、見えます。

10. 新しい入試制度の運命

そうすると、新しい制度はどうなるでしょうか。新制度が実現された途端に、その制度は「新制度」ではなくなってしまいます。「現行制度」になるのです。ということは、従来からの定番のような批判の観点に加えて、新たな批判の観点が呼び起こされて、必ず、現行制度批判に転化することになるでしょう。

最近の事例では、センター試験にリスニングテストが導入された事例が思い浮かびます。2006（平成 18）年度に導入されたこの方式は、初年度、私が現場感覚で見た場合には、本当に素晴らしい、完璧に近い実施だったと思います。しかし、機械の不具合とされる症状が出て、数百名が再開テストの対象となりました。「再開テストまで含めて、基本設計の中に入っています」と事前に説明しておいてくれれば、まだ良かったのかもしれません。しかし、大学入試センターの広報に立った担当者が、「実施には完全に自信がある」といったような態度で一貫していたこともあり、再開テストがミスとして取り沙汰されました。この制度が、何故、廃止にならずに今でも続いているかというと、報道が出るタイミングで、ライブドア事件による堀江貴文さんの逮捕、阪神大震災 11 周年等、・・・他にも何かあったと思うのですが、忘れてしまいました・・・大きな出来事があって、新聞の紙面や報道番組の時間枠が埋まってしまったということが主要な理由なのではないかと思います。そのうち、センター試験は旬なニュースではなくなって、忘れられてしまっただけなのではないでしょうか。

導入された新しい方法が、たとえ、完璧に実施されて、しかも、それがどれほど画期的な良い方法であったとしても、激しい批判を覚悟しなければならないのです。実は、大学入試制度に対する批判というものは、そういう構造になっていると思うのです。

先ほど、南風原先生が、現在、移行しようとしている制度に対する批判、知る権利を表明さ

れました。新制度案に対する予想される批判の観点としては、測定される能力、高校教育に対する悪影響、日程問題、負担、制度変更自体の悪影響、そういったものが挙げられます。それに加えて、潜在的な批判の論点の怖さがあります。例えば、現在のセンター試験では 110 億円の費用が掛かっています。今は、これを全て受験生に負担していただいています。新しい制度の下でもそれができるのでしょうか。それでは、受験生の過重な経済的負担を防ぐために、どのような財源からお金を投入するのか。そこまでの労力、財政的な負担を投入して成立させた制度が、教育的に見てどれくらい意味があるのだろうか・・・テストでできることには限界がある、と考えるべきではないのかと思います。

11. 高大接続答申の根拠？

そろそろ時間が来てしまったのですが、どうしても、最後、これだけは話をさせてください。高大接続答申の基本図式は、以下のような構図で提示されています。「小・中学校の教育は改善されている」とされています。それは、「全国学力・学習状況調査」の「活用」問題によって関係者の意識改革がなされ、授業改革がなされているから、とされています。それに対して、高校、大学は「知識の暗記・再生に終始している」というのです。したがって、「大学入学者選抜を改善する必要がある」というのが基本的なスタンスです。これは非常に分かりやすい構図です。

しかし、高校教育はこの 30 年間で大きく変化していました。少なくとも、大学も含め、高校や大学の教育の実状に対する認識は的を射ているとは思えません。さらに、高校の先生にうかがうと、「小・中学校の教育が良くなった」と評価する方は、私が聞いた範囲では少なくとも一人もいません。一体、どうなっているのだろう、と思ったら、この「小・中学校の教育が改善している」という根拠というのは、どうも

「PISA による国別順位が向上した」ということに拠っているようなのです。他の客観的な根拠はどうかと言うと、実は、聞いたことがないのです。もしも、これが、本当に答申で述べられている通りに改善されているのであれば良いのですが、単なるテスト技術のトレーニングによって得点が向上しているのだったら、どうなるのでしょうか。

そういうことを思っていたところ、衝撃的な報道がありました。これは、各社で報道されている内容なのですが、たまたま、私が見た新聞から引用させていただきました。

4 月末のことです。過去に出題された問題を利用して、「全国学力・学習状況調査に対して対策をするように教育委員会から指示がある」というようなことを訴えた方がいらしたとのこと。それを受けて、文部科学省から「調査の本来の趣旨を踏まえるように」という内容で教育委員会へ通知が出されたというのです。

これが、単なる少数の事例であれば、おそらく、個別に指導するだけで終わっているような事柄だと思うのです。教育委員会へ通知を出すことが必要だったということは、文部科学省では、相当、広範囲に広がっているという認識がおりなのではないかと感じた次第です。間違っているかもしれませんが。

答申が立脚する現状認識への疑義、PISA の国別順位の向上は、どのような意味があるのでしょうか。本当に、小・中学校教育が改善されているのか。これは、答申の根幹を支える極めて重要な立脚点です。しかし、もしも、PISA に類似する問題を出題している、全国学力・学習状況調査の受験技術の向上によって、成績の向上が導かれたものだったら、大学入試を変え、センター試験を廃止する根拠は何に求めればよいのでしょうか。もし、文科省の認識、報道が本当のことであれば、本当に、事態は重大だと言わざるを得ません。おそらく、文科省はこれから本腰を挙げて実態の解明をなされるだろうと思います。大いに期待したいと思います。

テスト・スタンダードの「3.2 拡大解釈の防止」には、「テスト利用者は、テスト開発において想定された受検者層の範囲を超えて実施しないように、また、テストの手引きで指示されていない過剰な解釈をするようなことがないように留意をする」とあります。論点として、残しておきたいと思います。

12. おわりに

最後に、大学入試改革論議の落とし穴に触れて、私の話を閉じたいと思います。

大学入試制度についての議論を理念から出発すると、様々な理念が存在していますから、最終的にはまとまりません。ですから、「出口から見た議論」が必要なのではないかと思います。つまり、改革を行った場合、その結果はどうなるのか。どのような影響が持たられるのか、ということをも可能な限り詰めていって、そこから議論を始めようではありませんか。

今まで過去にあった大改革、1926（昭和 2）年度・・・これは旧制中学校の入試ですが・・・学力試験を廃止して大混乱になりました。1987（昭和 62）年度の改革の結果が何をもたらしたのか、というのが昨年の私の話題提供のテーマでした。2012（平成 24）年度のセンター試験の混乱も教訓になると思います。

どんな混乱があったとしても、まあ、おそらく、数年後には何とか終息してくるのだらうと思います。今のところ、仮に 2020（平成 32）年度に何かが変わるのかな、と考えています。それも数年後には収まるところに収まるでしょう。ただし、最終的に収束するにしても、最大の被害者は誰か、と考えたいと思うのです。それは、その時に受験することになる受験生です。ですから、こういったことが起こらないようにするには、受験生の視点から問題の解決方法を一緒に考えていきたいと思っています。

ということで、本日のご清聴ありがとうございました。

(拍手)

宮本友弘准教授（司会）：

倉元先生ありがとうございました。

ここで1回休憩を取りたいと思います。会場
右前方にございますデジタル時計で、ちょうど
切りがいい所で 14 時 50 分に再開したいと思います。
よろしくお願いします。

(休憩)

 **東北大学**

大学入試制度改革の論理に迫る

——センター試験「廃止」の理由——

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
教授 意元 直樹

センター試験の実像 (1)

- 独立行政法人大学入試センター法
大学に入学を志願する者の高等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的として**大学が共同して実施**することとする試験...

本講演の構成

- はじめに
- センター試験の実像
- センター試験の誕生
- センター試験の変容
- センター試験の評判
- 大学入試改革論議とセンター試験
- センター試験批判の構図
- 共通1次とマークシート批判
- センター試験廃止論
- 新しい入試制度の運命
- 高大接続答申の根拠？
- おわりに

センター試験の実像 (2)

- 大学入試センター試験の基本設計
 - 目的: **大学入学者選抜**に利用
 - 受検者層: **利用大学等**の入学志願者
 - 測定内容: **高等学校における基礎的な学習の達成度**

(T.S. 1.1 テストの基本設計)

はじめに (1)

- 中教審高大接続答申(H26.12.22)による新制度
 - 二つの共通試験**の導入
 - 大学入学希望者学力評価テスト(仮称)
 - 高等学校基礎学力テスト(仮称)
 - ← **大学入試センター試験**の廃止
- 高大接続システム会議で議論 → 中間まとめ
- 大学入試センター試験に関する議論**の必要性

センター試験の実像 (3)

- 大学入試センター試験の規模
 - 志願者数、受験者数は**50万人台**
 - 参加大学数: 約700大学(短期大学含)
 - 監督者数: おそらく、**6~7万人**規模?
 - 監督要領ページ数: **200ページ超**
- センター試験は比類ないほど大規模か?
 - 米国のSATも1日で約40万人(?)受験

はじめに (2)

- 日本テスト学会編 **テスト・スタンダード**
平成19年9月15日 初版第1刷発行
- テストスタンダードとは?
テストを扱う先進諸国に存在
テストの品質の判断基準
日本の習慣に即した規準



センター試験の実像 (4)

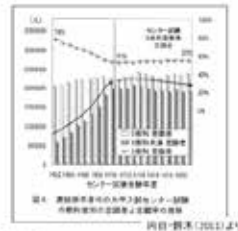
- 大学入試センターの運営経費
- 予算: **約110億円**
 - 約9割は受験生(検定料、成績提供・通知手数料)
 - 残りは大学から(成績請求手数料)
 - 受験料: **3科目以上18,000円**、2科目以下12,000円(成績通知希望の場合+800円)
- 人件費も含めて独立採算、**税金の投入はない!**

センター試験の実像 (5)

- ・初日出題教科(グループ)・科目数(平成28年度)
 - ・「地理歴史」6科目、「公民」4科目(**I or 2科目受験**)
 - ・「国語」1科目
 - ・「外国語」5科目(英語のみ「筆記」と「リスニング」、別冊子有)
- ・2日出題教科(グループ)・科目数(平成28年度)
 - ・「理科①」4科目
 - ・「数学①」2科目
 - ・「数学②」4科目(別冊子有)
 - ・「理科②」4科目(**I or 2科目受験**)

センター試験の変容 (1)

- ・ア・ラ・カルトの顕在化
- ・**5教科受験者比率**の減少(内田・鈴木、2011)
- ・センター試験 **新規参入層**増加(私大専願受験者)



センター試験の実像 (6)

- ・昭和54(1979)年度: 共通第1次試験導入
- ・昭和62(1987)年度: **ア・ラ・カルト方式**へ
- ・昭和64(1989)年度: 理科の得点調整
- ・平成2(1990)年度: 第1回 **大学入試センター試験**、私大参加
- ・平成9(1997)年度: 数学の新旧課程科目間格差問題
- ・平成14(2002)年度: 韓国語導入、**前年度の成績利用**開始
- ・平成16(2004)年度: **短大参加**
- ・平成18(2006)年度: 英語リスニング導入
- ・平成24(2012)年度: **大規模トラブル**発生、全国で再試験

センター試験の変容 (2)

- ・変化しなかった側面 → **マークシート方式**
 - ・質問項目、解答形式、採点手続き
(T.S. 1.3 **質問項目の設計** ~ 1.5 **採点手続き**の設計)
- ・大きく変化した側面
 - ・利用面: ア・ラ・カルト実質化、前年度成績利用可
 - ・実施面: 科目選択の弾力化 → **実施の複雑化**

センター試験の誕生 (1)

- ・共通1次の制度設計
 - ・受験者層: 国公立大学受験生
 - ・**限定**された受験者層
 - ・測定内容: 高校、**基礎的・一般的**達成度
 - ・**5教科7科目制**: 5教科で1セットのテスト
 - ・選抜は各大学の2次試験との組合せ

センター試験の変容 (3)

- ・センター試験とは?
 - ・共通1次から誕生し、画一的な共通1次を多様化
 - ・**出題、解答、採点の設計に変更なし**
 - ・実施や利用の**複雑化による多様化の達成**を志向
- ・テストの基本設計から見たセンター試験の矛盾
 - ・得点の意味? ← **完全得点調整**の必要性
(T.S. 1.8 **複数の尺度得点の比較**)

センター試験の誕生 (2)

- ・センター試験の制度設計
 - ・受験者層: 国公立大・短大受験生
 - ・受験者層の**広がり**
 - ・測定内容: 高校、**基礎的**達成度
 - ・**ア・ラ・カルト方式**: 個々の科目が独立
 - ・1教科1科目による選抜も可能

センター試験の評判 (1)

- ・中教審学士課程答申(H20.12.24)
 - ・高大接続テスト(仮称)の導入を提言
→ センター試験との関係は?
- ・学士課程答申のセンター試験評価
我が国全体として、入試の改善を推進する上で、大きな貢献をしてきたと言える(p.31) ← 大絶賛

センター試験の評判 (2)

- ・**絶賛から廃止論へ**の急展開
きっかけは？ ← **平成24年度入試の混乱**
- ・H24センター試験検証委員会報告書 (H24.4.26)
 - ・地理歴史・公民で自由に2科目選択可能に
→ 地理歴史と公民を分離化
→ 試験監督の**指示誤り、配付トラブル**が続出

大学入試改革論議とセンター試験 (1)

- ・教育再生実行本部第一次提言 (H25.4.8)
 - ・自由民主党成長戦略に資するグローバル人材育成部会
 - ・**TOEFL等の一定以上の成績を受験資格**及び卒業要件とする…大学を30程度指定…
 - ・**大学入試センター試験に言及なし**

センター試験の評判 (3)

- ・平成24年度問題の総括
 - ・科目選択範囲の拡大という制度変更そのものに対しては、…意義があったとの評価の声も (p.12)
 - ・**大きな制度変更に見合うだけの準備期間が足りなかった**…当初より関係者の中に**複雑となった試験方法に対する懸念の声**があった (p.12)
 - ・**センター試験の複雑化**は限界 (p.19)

大学入試改革論議とセンター試験 (2)

- ・教育再生実行会議第四次提言 (H25.10.31)
 - ・良質の問題提供、入試の個性化・多様化
 - ・**1点刻みの合否判定**を助長
 - ・志願先選択に直結する**心理的圧迫**
 - ・**運営負担**が増大し、限界
 - ・センター試験の**内容に対する批判はない!**

センター試験の評判 (4)

- ・平成24年度問題の遠因: **角を矯めて牛を殺す**
- ・国立大学の入試改革 (2000)
 - ・ア・ラ・カルト方式の弊害を認識し、**5教科7科目の受験**を促す
 - ・5教科:地理歴史・公民を合わせて1教科
 - ・7科目:数学を2科目と数える
→ 共通1次時代よりは1科目減

センター試験批判の構図

- ・巷に見られるセンター試験批判の構図
- ・センター試験批判 = **マークシート方式批判**
 - ・マークシート問題に特化された解答秘策 (伊藤, 2008)
 - ・高校現場が解答テクニック習得に血道を上げる
- ・しかし、**代替案は示されなし!**ことがほとんど

センター試験の評判 (5)

- ・地理歴史・公民から自由に2科目を選択させるための**時間制変更**
 - ・共通1次:全員が2科目 → 120分で2科目
 - ・センター試験:ア・ラ・カルト
→ **1科目選択者と2科目選択者の混在**
 - ・2冊の試験問題の同時配付は**かつてなかった**
- ・センター試験制度が**複雑さの極み**へ

共通1次とマークシート批判 (1)

- ・共通1次以前の大学入試の是正 → 共通1次
- ・共通1次の目的
 - ・難問奇問の出題 → **学習面での高水準接続**を
 - ・調査書の高校間格差補正 → 調査書の代用
 - ・学力検査への過度の依存 → 選抜資料の多元化
 - ・Ⅱ期校コンプレックス → 試験日の統一

共通1次とマークシート批判 (2)

- ・マークシート方式：共通1次制度の成立条件
 - ・共通1次の導入は約8年をかけて検討
 - ・**マークシート方式の導入も周知に準備**
 - ・1973(昭和48)年12月頃から4回の実地調査
 - ・1979(昭和54)年1月共通1次開始
- ・共通1次の評判 → **激しい批判の連続**

センター試験廃止論 (1)

- ・**臨教審答申(1985)**と**高大接続答申(2014)**
- ・大きな環境変化
 - ・高度経済成長と低成長
 - ・18歳人口と大学進学率
 - ・**高大連携の進展**と高校におけるキャリア教育

共通1次とマークシート批判 (3)

- ・共通1次批判の観点
 - ・序列化輪切り → 偏差値偏重、**受験産業介入**
 - ・過重負担、私立大学の選抜との格差
 - ・一発勝負化、画一化 ← 一律5教科7科目
 - ・**マークシート批判** → **記述力・創造力・考察力の測定に不適**、主体性喪失、学力低下...

センター試験廃止論 (2)

- ・我が国が成熟社会を迎え、**知識量のみを問う「従来型の学力」**や、主体的な思考力を伴わない協調性はますます通用性に乏しくなる中、現状の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性を持って多様な人々と協働する態度など、**真の「学力」が十分に育成・評価されていない!**。(高大接続答申, 2014)

共通1次とマークシート批判 (4)

- ・21世紀に向けて社会の変化に対応できるように必要とされる資質、能力は、**創造性**や**自ら考え、表現し、行動する力**である... (中略)...しかしながら、これまでの我が国の教育は、どちらかと言えば**記憶力中心の詰め込み教育という傾向が強かった**ことは否定できない (臨時教育審議会, 1985)

センター試験廃止論 (3)

- ・高大接続答申(2014)の提言
 - ・**大学入学希望者学力評価テスト(仮称)**の在り方
 - ・**合教科・科目型、総合型、記述式**、資格試験的利用、年複数回実施、段階別表示、**CBT**、**民間の資格・検定試験の活用**

共通1次とマークシート批判 (5)

- ・臨時教育審議会第1次答申による提言(S90.6.26)
 - ・共通1次に代えて**共通テスト** → センター試験
 - ・**良質の試験問題再利用、マークシート方式の改善、採点区分簡素化、資格試験的な取扱い!** 自己採点の廃止・得点通知、総点主義によらない強力的利用、1科目利用も可、実施時期・**実施回数の複数化**、短大の利用検討...

センター試験廃止論 (4)

- ・合教科・科目型、総合型
 - ← **国立大学協会(2000)**
- ・民間の資格・検定試験の活用
 - ← **経済同友会(1984)**
- ・CBT: **米国のSAT**では本格導入されていない
 - ← いずれも**実現困難な具体案**

センター試験廃止論 (5)

- ・高大接続システム改革会議「最終報告」(2016)では新テストの新奇性を **記述式導入** に焦点化
- ・記述式: 共通試験導入の前提として、**実施不可能とされた方式**
(国立大学協会入試調査特別委員会, 1972)
← **国教審はマークシート方式の議論を避けた?**

新しい入試制度の運命 (1)

- ・新制度の実現は何をもたらすか?
・**新制度は実現したとたんに現行制度となる**
・従来の批判に加えて新たな批判の観念の誕生
→ **現行制度批判** へ転化
・最近の事例: **センター試験リスニングテスト** 導入
・新制度は良否に関わらず **激しい批判を覚悟?**

センター試験廃止論 (6)

- ・大学入試制度批判の基本図式
・現実の大学入試制度の理念と選抜方法
← **制約と相互矛盾** の塊
・多くの人が体験的に持つ **選抜への不満**
→ 常に大学入試制度は潜在的批判の的
・現行制度に対する批判 → **新制度への期待**
・**新制度 = 新テスト構想** へという図式

新しい入試制度の運命 (2)

- ・新制度に対して予想される批判
・**測定される能力** への疑義、公平性への疑義
・新テスト準備の **高校教育に対する悪影響**
・実施、運営の負担、**日程問題**
・制度変更自体の悪影響
・**潜在的論点** の怖さ...
・**テストでできることの限界** を考えておくべき?

センター試験廃止論 (7)

- ・共通1次とセンター試験の対比
・共通1次
・**周到な準備、目に見える大きな制度変更**
← 激しい批判によって **短時間で廃止**
・センター試験
・理念的大転換、**制度変更は見えにくい!**
← 表面は穏やか、**長期間に制度疲労が進行**

高大接続答申の根拠? (1)

- ・高大接続答申の基本図式
・**小・中学校の教育は改善**
・**全国学力・学習状況調査** の「活用」問題
→ 関係者の意識改革、授業改革
・高校、大学は知識の暗記・再生
→ **大学入学者選抜を改善** する必要

センター試験廃止論 (8)

- ・センター試験「廃止」の危機の真相
・平成24年度入試混乱の本質: 制度の複雑化
・**手続き的混乱がきっかけで潜在的不満 (= マークシート方式批判が中心) に火をつけた**
・中教審の議論の中で論点のすり替わり
・**制度の複雑さ** → **測定内容** の問題
・結果的にセンター試験廃止という提言へ

高大接続答申の根拠? (2)

- ・大いなる違和感
・**高校教育は30年間で大きく変化**
・**小・中学校の教育改善の実感がない!**
・小・中学校教育改善の根拠?
・根拠?... ← **PISAの国別順位の向上** (のみ?)
・テストの限界
・**受験技術** によって得点が向上 (柴山, 2007)

高大接続答申の根拠？ (3)

- 衝撃的な報道
- **過去問題**を利用して
全国学力調査対策する
ように**教育委員会から指示**
- **文部科学省**から本来
の趣旨を踏まえるよう
に教委へ通知



おわりに (2)

- 大改革による混乱は最終的には収束する
 - 昭和2年度、昭和62年度、平成24年度...
 - 次には平成32年度が加わるのか？
 - **最大の被害者**は誰か？
- 受験生の視点から、未来の解決策を！**

高大接続答申の根拠？ (4)

- 答申が立脚する**現状認識への疑義**
- PISAの国別順位向上の原因は？
 - 小・中学校教育の改善 ← 答申の立脚点
 - **PISA受験技術の向上**
← 文科省通知が出された理由？
- 本当ならば事態は重大、**実態説明が待たれる**

高大接続答申の根拠？ (5)

- T.S. 3.2 **拡大解釈の防止**
 - テスト利用者は、テスト開発において想定された受験者層の範囲を超えて実施しないように、また、テストの手引で指示されていない**過剰な解釈**をすることがないように留意する。

おわりに (1)

- 大学入試改革論議の陥穽
 - 理念からの議論 → **収束しない!**ことが予想される
- **出口から見た議論**の必要性
 - 改革の**結果からの影響を出発点**として議論する必要

第 2 部 現狀報告

現状報告者

大塚雄作（おおつかゆうさく）氏

1952 年東京都生まれ

〔教員歴〕

大学入試センター研究部助手（3 年 5 ヶ月）
放送教育開発センター研究開発部助教授（10 年間）
放送教育開発センター研究開発部教授（1 年間）
メディア教育開発センター教育開発センター研究開発部教授（3 年半）
大学評価・学位授与機構評価研究部教授（4 年）
京都大学高等教育研究開発推進センター教授（9 年半）
独立行政法人大学入試センター教授／試験・研究副統括官（1 年）
独立行政法人大学入試センター教授／試験・研究統括官（1 年）

〔主な研究歴〕

教育心理学，教育評価を専門分野とし，大学評価，大学教育，大学入試等を研究フィールドとしている

〔主な著書，研究業績〕

- ◇大塚雄作（2005）． 学習コミュニティ形成に向けての授業評価の課題 溝上慎一・藤田哲也（編）『心理学者，大学教育への挑戦』，2-37． ナカニシヤ出版
- ◇大塚雄作（2007）． 授業評価とアカウンタビリティ 山地弘起（編著）『授業評価活用ハンドブック』，80-101． 玉川大学出版部
- ◇大塚雄作（2007）． 高等教育の個別的実践と普遍的理論化の狭間で—大学評価・FD 実践の体験を通して— 高等教育研究・第 10 集，111-127． 日本高等教育学会
- ◇大塚雄作（2010）． 授業評価の読み方・使い方—学問学習共同体における実践的妥当化のすすめ— 東北大学高等教育開発推進センター（編）『学生による授業評価の現在』，37-64． 東北大学出版会
- ◇大塚雄作（2011）． FD 共同体の形成と評価の役割 ——「組織的 FD」の実質化に向けて—— 京都大学高等教育研究開発推進センター（編）・松下佳代（編集代表）『大学教育のネットワークを創る —FD の明日へ—』，143-167． 東信堂
- ◇大塚雄作（2012）． 大学教育評価（1～3 節） 京都大学高等教育研究開発推進センター（編）『生成する大学教育学』，165-201． ナカニシヤ出版

〔学会活動等〕

日本テスト学会理事（2 年間）

（プロフィール例）

大塚雄作氏 略歴・著作

【略歴】1952 年生まれ

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学

大学入試センター研究部助手

メディア教育開発センター研究開発部助教授，教授

大学評価・学位授与機構評価研究部教授，

京都大学高等教育研究開発推進センター教授，同センター長

大学入試センター試験・研究副総括官，試験・研究総括官（副所長）

京都大学名誉教授

日本テスト学会理事，日本教育心理学会社員，大学教育学会社員など。

教育心理学，教育評価を専門分野とし，大学評価，大学教育，大学入試等を研究フィールドとしている。

【著書・論文・制作物等】

『心理学者，大学教育への挑戦』（2005 ナカニシヤ出版）

『授業評価活用ハンドブック』（2007 玉川大学出版）

『生成する大学教育学』（2013 ナカニシヤ出版） 他

現状報告者

駒形 一路（こまがた かずみち）氏

1963 年 静岡県生まれ

〔教員歴〕

静岡県立静岡東高等学校教諭（3 年間）

静岡県立佐久間高等学校教諭（5 年間）

静岡県立磐田南高等学校教諭（19 年間）

静岡県立掛川西高等学校教諭（現職 3 年目）

〔主な教育活動〕

進路指導主事

静岡県内進学指導連絡会事務局 企画・渉外担当

磐田サッカー協会理事長

現状報告 1：センター試験運営の実際と課題

大学入試センター試験・研究統括官（副所長）

大塚 雄作 氏

〔講師紹介〕

宮本友弘准教授（司会）：

それでは、第 2 部現状報告に入らせていただきます。

現状報告 1「センター試験運営の実際と課題」
大塚先生よろしくをお願いします。

大塚雄作試験・研究統括官：

皆さんこんにちは、大学入試センターの大塚と申します。試験研究統括官という名前は耳慣れないかと思います。私もセンターに行くまではわかりませんでしたが、「副所長」と呼んでよいという内規がありまして、そのほうが通り易いかもしれません。理事長を補佐する副長格としましては、理事と統括官の二つの役割がありまして、理事が管理運営面の総括であるのに対して、統括官は主として、センター試験の問題作成を統括する立場ということになります。センターの試験問題は大学教員によって作成されておりますので、その点で、教員が統括官を担当し、また、大学入学者選抜に関する研究面も担当することになっている次第です。

倉元先生から「センター試験運営の実際と課題」ということで依頼を受けたわけですが、先ほど、倉元先生の方からセンター試験についてご説明いただいた部分がありましたので、ある程度センター試験のことは把握していただけたかと思います。私の方からは、私が 2 年前に大学入試センターに戻って来てから強く感じていることとして、センター試験が簡単には捨て難い試験文化を培ってきているということがありまして、その一端をご紹介しますと思います。実は、私は 30 数年前になりま



すか、最初に助手として着任したのが大学入試センター研究部でありまして、当時はまだ共通一次試験と呼んでいた頃になりますが、4 年ほどで異動しまして、それから 30 年近くはセンター試験にはほとんど関わっておりませんでした。外に出ておりますと、センター試験にはそれほど関心を寄せることもなく、その何たるかはほとんど知るところではなかったのですが、2 年前にセンターに戻って、実際にセンター試験に携わってみますと、やはり中に入ってみないとわからないことがたくさんありまして、それは私自身の驚きでもありましたので、その辺を報告させていただければと思います。

それから課題につきましては、現行のセンター試験についてもいろいろありますし、また、新テストの構想についてもいろいろ感じるところもあるのですが、その点につきましては南風原先生の基調講演の中でもご指摘がありましたので、私は軽く流していければと思います。

大学と高校により実施されるセンター試験

まず、平成 28 年度センター試験、今年の 1 月に行われた試験の概要を簡単にご紹介しておきます。本年度のセンター入試は、先ほど倉元先生から平成 24 年度センター試験のトラブ

ルについてご紹介いただきましたが、そういう大きなトラブルもなく、大過なく無事に完了いたしました。この会場には、大学の先生方をはじめ、高校の先生方、入試関係の方々が多数お集まりかと思いますが、まずもって、皆さま方には心よりの感謝を申し上げる次第であります。各大学では、先ほど6~7万人が関与しているのではないかとということも出ておりましたが、私はその数を正確に把握してはおりませんけれども、本当に全国多くの方々にご協力いただいております。センター試験が無事に実施できているということだと認識しております。その点で、センター試験を実施する度に私自身が改めて確認できますことは、先ほど倉元先生が大学入試センター法を引いて下さいましたけれども、センター試験というのは大学の試験であって、大学「が」とスライドでは「が」に鉤括弧を付けて強調させていただいておりますけれども、センター試験は、大学があくまで実施主体となって実施されているということです。参加大学も、693大学、157短大となっておりますし、試験会場につきましても、いくつかの高校などにも提供していただいておりますけれども、ほとんどは大学の試験会場を拝借して実施されています。試験室は、全体で1万近い数に上ります。一つの試験室には2~3人の監督が配置されることになりますので、それだけでも3万人前後の方々が試験監督としてセンター試験に関与してくださっていることになります。センター試験というのは、大学入試センターが実施する試験を、大学が受身的に利用している試験ではないということです。答申には、新テストの実施主体は「大学入試センター」というように書かれていますが、やはり新テストにおいても、その理念に立ち返って、大学が実施主体の試験であって、それを大学入試センターが支援するという位置づけがこれからもなされていくべきではないかなと私自身は思っております。もちろん大学入試自体は、いろいろな形を取り得るわけでありま

して、実施主体をどう位置づけるかについてはさまざまな考え方があるだろうと思いますが、私自身はそこにこだわってほしいと思います。

入試は、大学だけでできないわけでありまして、高校の協力も不可欠です。昨年度も、56万3,768人の志願者がありましたが、その内、現役志願者が、かなり増えてきておりまして、46万人となっています。これだけの数の志願票は、高校単位で取りまとめて提出いただいていることで、円滑に処理が進められておりまして、高校からのこのご協力がなければ、センター試験も毎年なかなか円滑に実施できていないだろうと思います。

このような大学の共同実施ということと、高校からの多大な協力が相俟って、初めてセンター試験が円滑に実施できてきているということ、改めてみなさんと共有しておきたいと思っています。

センター試験問題の点検体制

センター試験が果たす役割につきましては、先ほどの倉元先生の話の中でも触れられておりましたが、まず難問奇問を排除した良質な問題の確保ということが挙げられます。これは共通一次試験の時代から言われていることですが、難問奇問を排除した良質な問題というのを作り続けるということは、存外大変なことです。この点は、私の試験・研究統括官という立場が非常に関わる場所でもありますので、多少詳しく触れておく必要があるだろうと思います。

まず、センター試験の問題は、ご存じの通り、大学の先生方が大学入試センターに集まって作成されています。今年は、6教科30科目にわたって問題作成の部会が構成されております。部会ごとに、10人から20人くらいの先生が問題作成委員を担当してくれておりますので、全部で500人を超える先生方に問題作成を担当していただいております。その先生方が、1年間に40日から50日、センターに集まって

いただいて問題を作成してくれています。

その問題作成の委員会を問題作成第一委員会と呼んでいますが、それに対して、作られた問題を点検する問題作成第二委員会というのが設置されておりまして、作成された問題に関して、数度のチェックの機会を入れています。問題作成に関わる形成的評価が行われているということになりますが、忌憚のない意見交換を促進するという趣旨の下に、センターの試験・研究副統括官、調整官というスタッフが間に入って、第二委員会からの意見を受領し、その意見を第一委員会に伝達するという役割を担当しています。

その他、「点検協力者」と呼んでおります、高校関係者にも点検いただいております。「高校関係者」とわざわざ呼んでおりますのは、昨年、司法試験の問題漏洩が社会問題にもなりましたが、授業を実際に受け持っている先生に、実施前の入試問題を点検してもらうわけにはいきませんので、例えば教育委員会に出向されている先生や、授業を担当されていない立場の役職の先生をお願いしているということです。点検協力者の先生方には、センター試験として作成中の問題が高校教育の視点から受験生に無理のない内容や難易度になっているかということ点を点検してもらっています。

試験実施後には、試験問題評価委員会による評価がありまして、高校の先生方や関係学会などによる事後評価も行われております。その評価報告書は、大学入試センターの Web ページにも掲載されております。

センター試験は、このように、いろいろな目にさらされているということで、良質な問題が確保されてきているということです。これだけのことをこなしてきているのを、その現場で身近に見てきておられますと、センター試験というのは本当に大変なことをやっているということをつくづく感じさせられます。良質な問題を確保していく体制づくりは、新テストにおいても引き続き大切になるだろうと確信しており

ますので、センター試験で醸成されてきたこの文化は、何らかの形で継承することを考えていただければいいと思っております。

多様性に対する役割分担と配慮

センター試験の役割として、次に、個別試験との組み合わせによる入試の個性化、多様化ということが挙げられております。これは南風原先生のお話にもありましたように、個々の大学の多様性に則した独自入試に注力できるように、センター試験で基礎学力の部分を担保するということも意図されてきているわけでありまして、少なくともある程度は機能してきているのだと思います。

それから、実際にセンターに入って初めて涙ぐましい努力をしているということがわかったのは、配慮を要する受験生への対応です。今年も4月から、障害者差別解消法という法律が施行されたこともありまして、どの大学も要請があれば合理的な配慮をしなければいけないという時代に入ってきているわけですが、センター試験では、障害を有する受験生への配慮ということは当初からしっかりと対応してきています。もちろん、大学の協力なくして、この種の配慮は困難でありまして、例えば、場合によっては、一人の要請のために、試験場も別室に用意する必要が出てきたりもします。別室を用意するということも、そう容易なことではありませんし、さらに、別室を確保すればすむことではなくて、そこには試験時間中ずっと監督として張り付く人も準備していただく必要があります。

また、障害の種類というのも本当に多様でありまして、今年は、問題冊子の拡大版として、22 ポイントのバージョンを提供するように準備しましたが、今までの拡大版である14 ポイント版は、現行の問題冊子をA4判に単純に拡大コピーすればいいのですが、22 ポイントに拡大するのは、A3判の冊子では大きすぎてかえって見にくくなるということもありますし、

A4 判で提供したのですが、そうしますと、図表なども含めて、ページの構成を一から組み替えていかなければならないという大変さがあります。

点字問題もなかなか大変です。最近では、図とか表とか写真とか、そういう視覚的なものを入れる問題が喜ばれる風潮にあって、センター試験でも増えているのですが、点字問題ではそれは困ることになるんですね。そういった場合には、代替問題を別途、問題作成の先生方に考えていただかなければならなかったりするわけです。

センター試験問題作成の基本方針

次に、現行センター試験と、新テスト構想との関係につきまして、センター試験の「試験問題作成の基本的考え方」に基づいて見ておきたいと思います。センター試験では、問題作成の委員は、基本的に「試験問題作成要領」という要領を抛り所としておりますが、それ自体は「部外秘」とされているものです。ただ、その冒頭に「試験問題作成の基本的考え方」というのがまとめられておりまして、その点については公開可能とされておりますので、その点を中心に見ていきたいと思います。

新テストの構想では、試験問題の内容を思考力・判断力・表現力等を測定できるものに力点を移していくことが求められています。その点では、実は、「基本的な考え方」の項目のなかに、「基礎的事項の理解の程度のほか、思考力・応用力・総合力等、受験者の能力を総合的に測定できるように工夫し、単に記憶力のみに基づく知識だけを検査する出題は避けること」とありまして、現行のセンター試験でも強調されていることのひとつです。にもかかわらず、改めて、思考力・判断力・表現力に力点を移すことが求められるということは、まずもって、例えば、思考力を測定する問題というのはどういうものなのかをきちんと共有しておく必要があるのだと思います。これは、測定論的には「妥

当性」の問題になりますが、妥当性の検証というのは一朝一夕に片付く話ではなく、なかなか厄介なことだろうと思っております。

次に、「教育的に公平」ということもセンター試験問題の大切なポイントになります。これもなかなか厄介なことでありまして、特に社会系の問題などでは、入試センターの正門の所に街宣車が来てがなり立てられたという事件もあったと聞いています。それだけに、「時事的な社会現象、特定地域にかかる事項、思想、信条、民族、性などに関する事項については、受験上不公平ではなく、教育的に公正であるよう配慮すること。」と規定されております。

また、先ほど、南風原先生のお話の中に「悪問」ということがありましたけれども、特に、点検を担当する委員会が目配りをしていますのは、公表正解選択肢の他に正解となる選択肢がないように、正解の一意性という点です。正解の一意性が崩れた途端に採点のやり直しをしなければならなくなるようであれば、これはもう個々の受験生の可否に関わってくる話でありまして、由々しき問題として非常に気を配っている点であります。

それから、倉元先生の話の中にもありましたけれども、実は科目間の得点の比較可能性が求められるということも大切なポイントです。これは測定学的にも非常に難題で、それをどうやって担保するかは常に悩ましい問題となっております。現行のセンター試験では、これは問題作成の先生方の名人芸に期待しておりまして、各科目の平均点は 60 点程度を目標に作って下さいということをお願いしています。ただこの点は、センターは正式には公表していないのですが、社会的には既に共有されていることかと思えますし、平均点を 60 点とする目標が共有されていまして、南風原先生が先ほど東大の推薦入試ではセンター試験で 8 割程度以上を最終的な合格基準にしているということも怪しくなってしまうことですので、センターの責任として、そのことは公表すべきこ

とと考えております。センターの目標とする平均点が共有されないと、そもそも、個別入試の自由度を増すという役割分担も危ういものになってしまうだろうと思います。ただ、確かにこれは、完全な形で達成するのはなかなか困難なことであって、問題作成の委員会、点検の委員会があれだけ検討を積み重ねたとしても、平均点はある程度バラつくことになりまして、平成 27 年度試験では得点調整をしなければならなかったということは、まだ記憶に新しいところかと思います。

いずれにしても、センター試験では「さらなる良問の作成に努力」することが掲げられておりますが、一方で、良質な問題とは何かということもそう簡単なことではありません。高大接続システム改革会議でも、新テストの問題イメージというのは提案されておりますけれども、それぞれの問題は確かにいろいろな工夫があって面白い問題だと思いますが、そのひとつひとつの問題が良問かどうかというのは、その問題を含む試験全体がどういう枠組みをもっており、その中でどういう構成が意図されているかということに依存するということに留意する必要があります。60 分程度の制限時間のなかで、一つの試験には複数の問題が含まれるわけでありまして、そのなかで 1 題解答するのに 60 分位かかってしまうような問題であったとすれば、それがいかに内容的に良い問題とみなされたとしても、試験としては良い問題に成り得ないわけです。

センターで問題作成を担当しておりますと、最初の頃は問題作成の委員の先生方から意欲的な問題が提案されたとしても、全体的な時間配分とか、難易度のレベルといった視点から点検委員会からの指摘が来ますので、そういった部分が徐々に削ぎ落とされていくということを目の当たりにします。センター試験の問題がややもすると淡泊に捉えられて、知識問題に偏ってしまってしまうという一因は、そのような問題作成の基本的考え方と点検のプロセスに

あるというようにも考えられますが、ただ、共通テストの役割として、この点は今後も大切にしていかなければいけない部分ではないかと個人的には考えている点です。

なお、スライドには、新テストで求められる思考力などを問う問題の類は、現行のセンター試験でも既に作成されているということを示す問題例を二つ入れておきましたので、ご確認いただければと思います。

センター試験と高大接続

最近では、入試改革の議論においても「高大接続」という言葉が当たり前に使われるようになりましてけれども、私が「高大接続」という概念に触れたのは、入試センターの助手の時でありまして、そのときの先輩、私の前任の統括官の荒井克弘先生が、「articulation」という言葉を使っておられたのを思い出します。当時は、「高大連携」という言葉だったかと思いますが、いずれにしても、高校と大学の教育的接続ということを大切にすることに浮き彫りにされることは、大学の先生方が参加してセンター試験の問題を作成しているということでもあります。大学「が」という大学が実施主体の大学入試という意義以上に、大学の先生方の問題作成過程自体が、先生方にとっての FD になっているということが大きいことだと感じています。大学の先生方は、私自身もそうでしたが、高校の学習指導要領がどう変わろうが、その変更点を調べるわけでもなく、自分のペースで授業してしまいがちだということがあります。

私は、前任は京都大学の高等教育研究開発推進センターにありまして、まさに FD を担当しておりましたが、その研修会の際に、最近の子どもたちは英語の筆記体を習っていないということを知りました。ですから、例えば、三角関数の「sin」などを筆記体で板書すると学生がわからなかったりすることがあるということを知って驚いたことがありました。また、私自身、因子分析のモデル式を板書する際に、非

常に簡単な式になりますので「行列」を使って書きましたら、学生の反応がおかしいので聞いてみましたが、今の高校では「行列」は習っていないということを知り、面食らったこともありました。

その点で、センター試験の問題作成を担当しますと、学習指導要領や教科書を、まずは一通り目を通すところから始めざるを得ませんので、それで大学に戻って授業する際に、学生が持っているはずの事前知識をある程度想定して授業を組み立てることができることにもなるのだと思います。学習指導要領のみならず、それに基づいた教科書も、科目ごとに多いものでは十社以上から出版されていたりもするのですが、その全てに目を通したりもしております。実は、出版社によって教科書に盛り込まれていることが少しずつ違ったりもしておりますので、公平性という観点から、例えば10冊教科書があるとする、その過半数の冊で扱われている術語を用いて問題を作成するといったこともセンター試験のチェックポイントになっています。これは3冊しか出てないから不公平になるので取り下げるようにというようなことが点検委員会から来たりもするわけです。それだけ、教科書も精査する必要がありますし、問題作成の先生方は、高校教育でどういうことを学ぶことが期待されているのか、その点をしっかり把握し、共有してから問題作成に取りかかって下さっています。そしてさらに、作成した問題に対しては、点検委員会をはじめ、外部からもさまざまな評価がきて、中途半端な理解ではそれに対応し切れませんから、相当に重たい作業をお願いしていることになります。私自身、FDの場合は、何度も参画しましたし、また、企画もしてきましたが、こんな密で、充実したFDの場合はどの大学でも見ることはなかったというのが正直なところです。そういう意味で、大学教育という視点からしても、センターの問題作成の体制というのは、まさにひとつの高大接続のチャレンジになっ

ているんだと思います。

それから、センター試験の問題は公開されるということも、高大接続のもう一つのチャレンジになっていると思います。公開されたセンター試験の問題は、高校ではもちろん受験指導の素材として利用されることになりますし、また、大学においても、いくつかの大学ではいわゆる初年次教育として行われる授業などで利用されているということも聞いております。アメリカなどでは、問題項目のデータベースを構築して、そこに含まれる問題は秘匿とされています。データベースには、それぞれの問題の統計的性質を表すパラメータなども含まれておりますので、一定の方式で問題項目を集めることによって、得点の比較可能性をテスト理論的に担保することも可能になるわけです。また、試験の平均点の60点目標というのは名人芸ということを先ほど申しましたが、それをあまり気にせず問題作成ができるという点でも、問題項目の非公開とデータベース化は大きなメリットがあります。しかし、高大接続に関わる教育的視点からすれば、センター試験の翌日に新聞に問題が公開されるという日本の試験風土は、私自身は、簡単には捨てがたいと感じているところであります。

センター試験の課題

センター試験にも、解決すべき課題はいくつも残されていると思います。その一つが、受験者の多様化に如何に対応していくかということがあります。18歳人口が徐々に減りつつあるという流れのなかで、多くの大学がセンター試験を利用してくれていて、受験者数はこのところ増えたりもしているわけです。その中に、実は、センター試験成績を利用していない受験者が含まれているということを、センターの研究開発部教員の研究から最近知ることができました。センター試験を受験したものの、その成績を大学への出願に利用していない「成績未利用者」が2割くらいは含まれるということ

す。「記念受験」という言い方もあるらしく、高校教育の集大成としてセンター試験を受けるように指導する高校もあると聞いています。AO入試などで、センター試験成績が必要ないということもあるのだろーと思ひますが、そういう層のセンター試験の成績が低いであろうことは想像に難くないわけでありまして、事実、そういう傾向が見られるということです。そのような学力差の大きな受験者集団に対して、広範囲の難易度の問題を含む試験を、現行のように一つにまとめて実施することが適切なかどうか、これはセンター試験に課せられた大きな課題ではないかと私自身は認識しているところだす。

また、センター試験にかかるコストと労力の問題があります。一朝一夕にセンター試験の問題ができているわけではないということは先ほどもお伝えいたしましたが、さらに今回の新テストへの改訂や、新学習指導要領への改訂に際しては、まず、どのような試験構成にするかといった、テストの仕様を定める委員会での議論を2年程度積み重ねる必要があります。その仕様に基づいて、ほぼ2年程度かけて実際の問題を作成していくことになりますので、実際は新しいテストをはじめるまでに4年くらいは必要になります。2020年度から新テストを始めるといふことは、そのスケジュールからすれば、既にギリギリになってきているということです。

コストの面では、緊急対応用試験の準備についてあまり議論されていないように思ひます。緊急対応といふのは、ここは仙台ですから東日本大震災が身近な出来事だったと思ひますが、あのような大規模災害が起こった時にどうするか、あるいは、試験問題の搬送中の事故などで問題が漏洩してしまったといった可能性もゼロではないわけで、そのような場合への対策として、センターでは緊急対応用試験といふのを準備しているということであります。つまり、センターでは、本試験、その翌週に行われる追

再試験の他に、我々第3セットと呼んでいますが、緊急対応用の試験を準備する必要があるといふことは一般にはあまり知られていないことかもしれません。通常は、緊急対応用試験は、学習指導要領の改訂の期間である10年ごと程度に作り替えることになりますが、2020年度から新テスト、また、2024年度から学習指導要領の改訂と続きますと、緊急対応用試験は4年ごとに作成しなければならないといふことになります。緊急対応用試験は、本試験と同じ部数を準備しておく必要がありますので、これは印刷代だけでも非常にコストがかかることになります。受検料を上げるといふこともできかねますので、そういうコストの面についても視野に入れていただければと願う次第です。

記述式問題の課題につきましては、南風原先生からも触れられましたが、これもコストのかかる問題です。おそらく1万8,000円の受検料ではやっていけないだろーと思ひますし、また、採点に際しては、大学の先生方、高校の先生方にもお願いせざるを得なくなる可能性も大きいので、先生方への負担面をどうバランスを取っていくのかといふ点についてのシミュレーションも大切になります。南風原先生が示された共通テストの要件の中にありましたように、もちろんそこにある程度のマンパワーやコストを集中しなければいけませんけれども、全体的に見れば効率がよくなる試験にしていかなければ共通テストとしての意味は半減してしまひます。その点の検討は、この1年の間に、フィージビリティスタディという形で進められていくことになるのだろーと思ひます。

記述式に関しては、例えば50万件の解答を、今ですとOCRで読んでかなり精度でデジタル化できるというシステムもないわけではありませんので、類似した解答を集めてある程度クラスター化し、似たような答案を続けて採点をすることである程度は効率が上がるという研究も行われています。ただ、センター試験の50万人の規模といふ数の圧力を見逃すわけに

は参りません。18歳人口の減少が続けば、50万人が数十万人というオーダーに減っていくという事はあり得たとしても、それくらいのオーダーの試験では、いずれにしても数の圧力というのがあります。例えば、今年のセンター試験では、問題訂正がありまして、センターの実施本部から、各大学の本部に、当日FAXで知らせるという手続きをとりましたが、1万近い試験会場がありますと、何人かの試験監督が確認してくれているとは思いますが、問題訂正の板書などでの小さなミスが数件発生してしまいます。万オーダーの数が揃いますと、確率的に数件のミスが発生してしまうのは、存外避けることのできない数の圧力というものと感じているところです。センター試験を実施する側におりますと、大規模・共通・一斉テストの怖さをヒシヒシと感ずるものですから、ミスの確率が小さいレベルの技術が利用可能であったとしても、なかなかそれに踏み切れないということもご理解いただければと思います。

残りました最後のスライドには、試験に関する議論のなかで、私自身が感じてきたいろいろな懸案事項を並べておきました。時間的に詳しく説明はいたしません、後ほどご確認いただければと思います。まず、入試などで「多面的な評価」ということが簡単に取上げられますが、そうした人間にとってより大切な特徴を、公的な入試などで評価してよいのかどうかという問題があります。次に挙げたのは、養成すべき力と選抜すべき力をもう少し区別して、入試で何を測定すべきかを浮き彫りにする必要があるのではないかという問題です。三番目は、学習のプロセスにおいて適合的な教育評価手法と、選抜時に有効な評価手法を区別して考える必要があるのではないかという問題です。4番目は、学力調査といった「調査」に利用できる試験と、選抜目的の大学入試とを明確に区別して議論すべきという問題です。調査は、一定の集団の特徴を明らかにする目的が第一となりますので、集団での統計量に意味があればよ

いのに対して、選抜試験では、一人ひとりの力がどのレベル化ということが推測できないといけません。調査と選抜試験を区別する必要性についてはまだ十分な共通理解にいたっていない印象があります。これらの諸課題について、どう考えるべきか、また、どのような知見が蓄積されているのか、その辺の共有を図っていくことも、入試改革においては重要な課題となると思われるということです。

ちょっと長くなってしまい申し訳ありませんでした。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

宮本友弘准教授（司会）：

大塚先生ありがとうございました。

● センター試験問題作成の基本方針

- 高等学校学習指導要領に準拠し、学習指導要領解説及び教科書に基づいて基礎的事項の理解の程度を見るほか、**思考力や応用力を見る問題**を出題
- どの教科書によっても字などがよって**不公平が生じないよう配慮**
- 思想、信条、宗教、民族及び性に関する内容、社会的に問題とされやすい内容の取扱については、**教育的に公平であること**に留意
- 公表正解解説時には**正解となること**がないうち注意（**正解の一貫性**）
- **各科目の平均点は60点程度を目標**
- **極端な難問は回避**
- **試験問題数が試験時間に適切な分量となるように配慮**

→ 「良問」は、個々の問題について**独立に評価できるものではなく**、それを含む構成とれたテスト全体が、以上のような観点から、総合的に評価されるべき

平成28年度センター入試 完了 御礼！

センター試験は「大学」の試験

➢ 大学「が」大学入試センターと共同して行う

参加大学： 82国立大学 84公立大学 527私立大学
＝693大学＋157短大 参加
試験会場： 690試験場（含む54高校試験場）
9,625試験室

➢ 高校の協力 ＝ 願書とりまとめ・受験場案内 等

志願者数 536,768人・現役志願者数 462,335人
受験者数 536,768人（受験率 95.22%）
（追試験 177人 再試験 17人を含む）
成績提供件数 1,433,084件（2016年2月22日現在）

[illegible]

● センター試験が果たす役割

- 難問奇問を排除した、良質な問題の確保
 - 問題作成 ← 第1委員会 ← 問題作成OB委員会によるチェック
➢ 高校教育関係者等を中心とする点検協力者によるチェック
 - 試験実施後の試験問題評価委員会による評価
<http://www.dnc.ac.jp/data/hyouka.html>
 - 問題公開による各方面からの問題照会
- 個別試験との組合せによる入試の個性化・多様化
 - 小論文・面接 推薦入試・AO入試
帰国子女・社会人対象特別入試 etc.
- 配慮を要する受験生への対応（平成26年度許可者数：2,559人）
 - 拡大文字問題冊子（14卓・22卓） 点字問題冊子
 - 点字解着（1.5倍延長） 文字・チェック・代筆解着（1.3倍延長）

第 2 次世界大戦(1914 ~ 1945)のゾグリア(中国)に、最もよく育つところの地に集り、
 働いた者ばかりが戻ってきた。戦後戻りてきて最も富むものも、それより下
 層の(もの)もあるに(一つ)つづける。

例 1 29

Children between the ages of three and five begin to answer questions. *The average weight of children around these ages is more than 44 kilograms. The way parents handle their children's questions is important. These parents may be proud of their children's development and height. Some of their questions. The average age of children to start their imagination will become more complex. On the other hand, if parents are not patient enough to answer questions, children might feel that they shouldn't be curious about things. As a result, they may begin to feel nervous about trying an activity.*

例 2 30

Which do you prefer, living in the country or in the city? *According to a United Nations survey, half of the seven billion people on this planet are living in the countryside. However, more and more people are moving into urban areas. It is estimated that about two thirds of the world's population will live in cities within the next 50 years. Living in a city means to experience the excitement, but cities are likely to be less convenient and become very difficult places to live. Moving out there, like in recent population trends, we seem not to have a choice about where to live.*

● 高大接続へのチャレンジ

□ 大学教員の手による問題作成 = FD

➢ 大学教員が

高校の学習指導要領に準拠して 教科書なども精査して
大学の視点から 問題作成 = 受験生への一つのメッセージ

➢ 高校→入試→大学の高大接続の一体的流れの確保

大学教員が 高校教育に触れる場
高校教員と大学教員との対話の場

□ 問題公開による教育利用

高校教育の教材として
大学の初年次教育の教材としての利用

● 記述式問題の課題

□ 記述式の得点は何を反映するのか？ = 妥当性の問題

■ 条件付記述式： 採点しやすい明確な観点

→ 必ずしも「思考力・表現力」を反映するとは言えない

□ 採点に時間がかかる → 時間＋労力 等の負担 → コスト

■ 想定外の回答の出現により採点基準の更新 → 採点のやり直し 等

■ 回答の分類 + 分類されたクラスターごとの採点 等による効率化
50万件 → 数千クラスター？ について人的採点

□ 採点者信頼性の問題

■ 単純化された採点基準に依っても採点ミスは避けられない

○ 都立高校入試の採点ミス → 自動採点システムの導入が前提？

→ 試験の前倒しは高校教育に影響・採点作業は大学教員に負担
受験料のアップは社会から受け入れられるか？

● 共通テストとしてのセンター試験の課題

□ 「センター試験が諸悪の根源 知識しか測っていない」

という罵詈 マークシート方式に対する根深い偏見

選択肢からの逆方向の思考？ 当てずっぽうでも当たる！

選抜に必要とされる「尺度」の測定値を得るという考え方の欠如？

→ 思考力等は測定していないのか？

記述式・パフォーマンス型・CBT (Computer Based Testing)

などを導入すれば解決するのか？

□ 大量の受験生・多様な教育ニーズに広じて複雑化

平成29年度試験： 6教科 30科目

→ 教科・科目等をどう設定していけばよいのか？

□ 受験者層の変化・多様化

成績未利用者の存在 (平成27年度～第2期値)

→ 広範囲の難易度の試験をどう実現するか？

● 入試改革に関わるいくつかの留意点

□ 「いちばん大切なことは評価してはならない」

板倉聖宣『教育評価論』仮説社 (2003)

教育において他者が他者を評価すべき能力の範囲は限られる

□ 養成すべき力 と 選抜すべき力 の区別

目標とすべき力は教育において養成すべき力

□ 形成的評価 と 総括的評価 の区別

教育において必要とされる形成的評価のための手法

選抜の際に総括的評価として必要とされる手法

□ 調査 と 選抜試験 の区別

集団の特徴を知るための調査と 個人差を明確にする試験

集団の統計量の意味と誤差 vs. 個人の得点の意味と誤差

□ 波及効果 (washback effect) の把握

● 共通テストのコストと労力負担の課題

□ 共通テスト実施に至る必要なスケジュール

➢ 学習指導要領の改定による試験問題の構成の検討 + 試作問題

各科目試験問題調査研究会 … 約2年 問題作成ガイドライン

→ 問題作成ガイドラインに適合する問題作成委員の依頼

➢ 試験問題作成委員会（第一委員会）による問題作成 … 約2年

・ 点検委員会による問題点検 + 試験問題の印刷と校閲 等

→ 2017年度から上記作業を進める必要あり

学習指導要領の改定 → 2021年度から再び続ける必要あり

□ 緊急対応用試験（本試と同規模）の作成のコストと労力

➢ 本試（第1セット）と追再試験（第2セット＝部数減OK）を作成

➢ それ以外に、緊急対応用試験（第3セット）を作成 = 10年程保管

→ 新テスト開始時、学習指導要領改定時、両方で作成の必要

ご清聴
ありがとう
ございます



了

現状報告 2：センター試験を「受けとめて」

—高校の教員として 受験者の保護者として—

静岡県立掛川西高等学校教諭

駒形 一路 氏

〔講師紹介〕

宮本友弘准教授：

それでは引き続きまして現状報告 2「センター試験を『受けとめて』—高校の教員として受験者の保護者として—」駒形先生、よろしくお願いいたします。

駒形一路教諭：

みなさんこんにちは。静岡県の掛川西高校から参りました駒形と申します。今日は地方公立高校で進学指導をしている教員の声を届けたいと思います。

3 つほど柱を設けました。高校の教員としての観点、受験者の保護者としての観点、そしてより良い改革に向けて。これに従ってお話をしていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

まず高校の教員として。前任校には 19 年勤めました。クラス担任は 13 年、13 年ということは $3\text{年} \times 4\text{周} = 12\text{年} + 1\text{年}$ です。3 年の担任は 4 回やりました。1 年だけ担任をした学年の主任を 2 年 3 年と務めて、学年主任としては 1 回、その後、進路指導主事として 4 回、センター試験を経験しておりますので、前の学校だけで 9 回です。今の学校に来て 3 年目ですが、1 年目が担任、2 年目が学年主任で、3 年目が進路指導主事ということで、前の学校で 10 何年もかかってやった仕事を 1 年ずつポンポンと駆け足で仕事をしているような、そういう状況です。もうひとつ、静岡県内進学指導連絡会という組織があります。県内の 12 校が集まっている団体です。すでに学区制は廃止されていますが、旧学区の中の進学校が集まって定期的に



会議を開いています。今年度第 1 回は一昨日静岡市内で行ったばかりです。関係者大体 30 名ぐらい集まって情報交換を行いました。その運営の中心となる事務局を 4 年務めて、その後引き続き企画渉外担当を 3 年務めています。

「センター試験を『受けとめて』」という柔らかいタイトルの通り、基本的にセンター試験を守る立場でお話をします。センター試験に向けての対策は、前の学校も今の学校もマーク式模試を 6 回受験することがメインです。2 年生の 2 月から始まって、3 年の 6 月、今の学校では次の週末が文化祭ですので、その次の週が 3 年になって第 1 回のマーク模試ということになります。3 年の 6 月、8 月、9 月、10 月、12 月にはプレ試験という位置づけで受験します。まず、自分の取れそうな得点は自分が一番わかっている、というお話です。実は 6 回もマーク模試をやっていくと、いわゆる 5 教科 7 科目 900 点満点で、自分がどれぐらいとれそうかというのは、少しずつわかってくる。最後の本番だけ 150 点ボンと上がるということはないので、巷では心理的な圧迫が強いという意見もあるようですが、実はそれほどのものでもないと思います。自分が取れそうな点数は本人が一番

わかっているのです、果たしてそれを純粹に試験当日まで何点取れるかわからない一発勝負と言えるかどうか。さほどの心理的圧迫ではないのではないか、と私は感じています。次に、マーク型問題演習ですけれども、私の教科・国語の場合は3年の2学期の中間テスト、10月中旬以降、マーク演習を中心に行っていきます。日課に定められた授業のなかでは、前任校からずっとセンターの過去問題しか使いません。学習の指針を一番与えてくれるのは過去問題だと思っています。レジュメには大変失礼なことを書きましたけれども、やはりセンター試験のホンモノには独特の癖があります。「下手」と書いてしまいましたけれども、大塚先生がいるので消したいぐらい、大変無礼なんです。何年かに一度、新傾向の問題が含まれてきたりする時、問題を見てみますと、「ちょっとこれは…」というような感想を抱くこともあります。でも実際に出てしまった問題ですので、独特の癖に慣れていくという意味でも、過去問題を中心にやっていくことには大変意義があると思っています。一方、今日も何社さんかいらっしゃっていますが、教育産業各社が作るマーク式問題集というのは、センター試験をお手本にしようまく出来すぎていて、解説も本当にしっかりしていて、生徒個人に自宅でやらせる分には構いませんけれども、授業の中で使うのには若干の抵抗があります。

実は、正答率のデータというのが大変貴重です。受験した生徒たちに、もうすぐに卒業する生徒になりますが、その生徒たちに協力してもらって、センター試験自己採点の日に、1枚特別に紙を用意して、どの選択肢に回答したか。何点取っただけではなく、センター試験の国語は枝問の数が全部で36~38だったでしょうか。それらすべて何番にマークしたかということも集めて、それを処理して、それぞれの科目について正答率を、得点だけではなく枝問ごとの正答率も求めるようにしています。これは、翌年以降の現役の生徒に大変効果的です。この点

数、諸君の先輩は大体これぐらい点数を取っているぞ、この問題は何%の先輩が正解しているぞ、ということが、学習の指針になる。新しいテストでは、これはどうなっちゃうのかな、と不安に思います。また、過去問題からメッセージを読み取ろうなんてことも、実はしてしまいます。例えば、小林秀雄が出た時。一体これにはどういうメッセージがあるんだろうなんて必死に考えたこともありました。次の年は、「漢文学と近代日本」でした。齋藤希史の文章が出ました。付録でプリントをつけてありますけれども、前日配布の「進路課通信」に「今年のセンター、国語はやさしいから大丈夫だぞ」って書いちゃった。小林秀雄が出題された翌年に書いたのですが、ものの見事に予想が外れて、2年連続、評論で泣いた生徒がいました。この2年を見て、「これからセンター試験の評論ってどうなっちゃうんだろう？」って思っていたところが、昨年は、ネット社会に関することですし、今年はリカちゃん人形とキティちゃんが登場。そんな意外なこともありました。ここ4年間のうち、大学4年生は小林秀雄を読んでいて、大学1年生はリカちゃんキティちゃんを読んでいるわけで。この辺の差というのは、どんなところに出てくるのかなと思います。これもセンター試験の本物の面白さ。面白いというと不謹慎ですが、そういう面白みもあるのではないかなと思います。

高校によってはセンターマラソンというものも行います。大体12月以降の2日間で行います。実は、日程に慣れておくということも大変必要なことです。休み時間がずいぶん長い。その長い休み時間の間に何ができるか、何をやるのか、何を持っていこうか。そのようなことも考えさせておく。そういう準備も怠ってはならないなと思っています。さらに、終わったテストの話はしないということも、生徒には伝えるようにしています。空き時間が長いと、ついつい終わった科目のことをくよくよ考えがちなのですが、終わったテストの点数は変わりま

せんので、もう次の長い休み時間は次の科目に向けてやらなきゃいけないんだというような話はします。センター試験の会場は残念ながらいろんな学校が一緒に来ますので、同じ学校の生徒同士だったらこの話も通じるんですけども、違う学校の生徒と一緒になったりすると、前の問題の話をあーだこうだずっと話していて、それが気になって仕方がないという悲劇に見舞われる生徒もいます。耳栓を持って行けよというアドバイスもするようにしています。

さて、自己採点です。インターネットの功罪と書きましたが、翌日の朝刊が待ち遠しいという、そういう時代もありました。でも今はインターネットで、もう当日の夜に出てしまう。これは、実は先ほどの終わったテストの話はしないということとは相矛盾する話で、見るなという方が無理なんですね。どうしても土曜の夜に、土曜日の試験科目の正答を見てしまう。それが翌日に影響を与えるというようなことはあるかと思います。ですので、翌日の朝刊が待ち遠しいと言っていた頃が懐かしいなという気がします。センターリサーチは、2社3社にいったん送るんですけども、こういうところを教育産業に依存しているというふうに言われますが、やはりセンター試験の受験者が50万人を超えているということを考えてみますと、ひとつの学校のデータではなかなか処理しきれないというのが本当のところですね。大体各社さん、本当にご尽力いただいて水曜の夕方にはデータ配信がされて面談が始まるという流れになっています。

静岡県では、先ほどお話をしました連絡会という組織。そこで大体12校2,500人分のデータを自己採点が集まると同時に集計をし始めて、度数分布が月曜の大体夕方6時くらいには集まります。1校ですと、300人程度のデータですけども、2,500人集まると、大体の傾向は掴めることになっています。このデータが10年分くらいありますので、今年度分がまとまったところで過年度と比較して、今年のセ

ンターの分布はあの年に似ているから、あの年の対応でやってみよう、となる。これは業者の情報が届く水曜日の夕方までの応急処置ということになりますが、励ましたり慰めたり戒めたり。月曜日の夕方から指導を始められるということは、大切なことです。やはりこれも、過年度のデータが蓄積されているということが大事で、度数分布の山の形、過去10年分くらい見て、あの年のこの形だからこれくらいの点数だったらここに出願できるっていうようなこと。予定通り取れた子も取れなかった子も、そういう指導が早い段階からできるという意味でも、この過年度のデータを蓄積できている今のシステムは捨てがたいと思っています。

担任をやっている頃のお話ですけども、そこに郵便番号、市外局番、生年月日というふうにレジュメには書かせていただきましたが、静岡県はちょうどいい。郵便番号は、私は磐田市なのですが438なんですね。市外局番、これもちょうどよくて0538なんですね。438と538なので、ちょうど100点。生年月日、私がこのことに気づき始めた頃、生徒は昭和57年生まれでした。一回りやると今度は、昭和60年生まれになるんですね。そうしてみると100点100点あげていって、あと50点とか70点とかってあげていく目安として、まずは郵便番号から、438点から始めて受かる国公立大学があるのかっていう話しになるんですが、静岡県みたいに6月ぐらいまで部活をやっていると、そんな立ち上がりにもなるかと思います。やっぱり、まず100点あげてみよう。その次は少しずつっていうことで、まず郵便番号めざす、市外局番めざす、生年月日をめざす、と。そうやって進めて行くんですけども、ある時それも通用しなくなりました。昭和63年生まれの子を担当していた時に、早生まれの子で平成元年っていう子がいて。先生私どうしたらいいんでしょうか？って。どうするもこうするもなく、皆に習ってやれば良いよというアドバイスを当然送るようになるんですけども。長くやっ

ているとそんなことにもなります。

1 回につき 100 点ずつ伸ばして行こうよと言うんですけども、5教科7科目で900点満点。大体1科目で言うと10点とか、それくらいですね。でも各教科10点ずつ伸ばしていくってことはなかなか難しいことです。国語や英語ですと20点ということになりますけれども、やっぱりこういう時は、例えば漢字の書き取りは2×5で10点ですが、あと古文の短い訳の問題ですか、それは5×3で15点ですね。あと10点上げるためには、まだ漢字の書き取りがこれだけ間違っているんだからここを上手くできるようにすればいいじゃないかとアドバイス。これも次の学習の指針になるんですね。これもやはり1点刻みの動機づけになる。そういう1点刻みの動機づけとかが、段階別表示というようなことにすると、情報量が少なくなっていくお話が南風原先生からありましたけれども、動機づけしやすいこの1点刻みというのがよろしくないというふうに言われてしまうと、じゃあ何をどうすればいいのかという、そんな話になるかと思います。南風原先生はダイエットに例えていらっしゃったこともあります。先週の評価もやや肥満、今週の評価もやや肥満ではなかなかダイエットのやり甲斐もないというお話でした。やはり、0.1kg刻みぐらいでないとダイエットもやり甲斐がないということだと思うんです。やはりセンター試験のようなテストですと、1点刻みが学習の動機づけになるということは、大変ありがたいことだなと思います。

2 回目に担任をやった時だったのでしょうか。どうしても辛くなったら日曜日の夜に電話してきなさいって。日曜日の夜待っているからって。本当は待っていないんですけど、電話かけてきても良いぞと、そういう話を金曜日にして生徒を送り出したことがありました。そしたらまさか、土曜日の夜に電話がかかってきてしまって、明日まだ試験があるのに。もう半べそをかいている男子でした。「今日の試験失敗した。

どうしたら良いか分からない…」っていう、そういう生徒でした。女子生徒ならともかく男子生徒だったので、まあ一喝するわけですけども、ダメなら来年があるじゃないかって、そんな話も。やはりその年は残念ながらという結果でした。でも次の年再チャレンジして、今弁護士になっていますが、きっと彼は人の痛みがわかる。そういう弁護士になっているんじゃないかなと思っています。

余談になります。学年主任や進路指導主事になりますとクラスを離れますので、ちょっと客観的な目で見ることになります。そうやってまず言うことは、「フェアに受験しなさい」ということ。どういうことか。点を取りたいのは君だけじゃないんだと。うちの学校の生徒だけじゃないんだと。その試験会場に集まっている皆が点を取りたいんだから、よその生徒の邪魔になるような、そういう受験はしちゃいけないという、そういうことを口すっぱく言うようになりました。実は静岡県には大変特殊な事情がありまして、先ほどの大塚先生のお話で、全国で高校の会場が54という数字が示されましたが、静岡県は私が知っているだけで6以上あります。高校会場が。これはなかなか大きなアドバンテージです。受験者がトイレの位置を知っているだけで違うと思う。自校受験者にはアドバンテージがもちろんあります。ホームとアウェイで言えば、うちの生徒はアウェイ会場で受験するようなものです。実はこのこと、生徒募集に使っているというウワサも聞きます。「センター試験、この高校で受けられるんだぞ」っていうふうな。そんなことを言われてしまうと、うちなんか校舎の老朽化も激しいんですけども、似たような高校はちょっと厳しいなというふうな、そんなこともあります。先ほど全国の高校会場54というなかでの1割以上を静岡県で占めているんだなと思うと、まあ静岡県に大学が少ないということがひとつの原因でもあります。

もうひとつ、「簡単に失敗したと言うな」と

いう話もします。担任を持っている頃は、本当に一人ひとりの生徒のことが良くわかるので、全員の成功を祈るんですけども、やっぱり関わる生徒が多くなると、うまくいく子もいれば、そうじゃない子もいるわけで、そういうなかでは「簡単に失敗したって言っちゃいけない」と言ってます。『失敗した』って言うけど、じゃあ何点取るつもりだった？」って問い詰めると、実は口ごもってしまうということもある。あるいは『失敗』って言うけど、何点取ったら成功だったんだ？」ってということもある。実はセンター試験は取れ過ぎて困るんですね。例えば今年の国語のように、ずいぶん易しくて予想外に取れてしまった、そうすると、個別試験の対策が間に合わないということにもなります。もちろん、それでも何でも出願するんだって言う子も出てきます。そこからの追い込みというのは本当に見事なもので、短期間で力を伸ばしていくという生徒は確実にいるわけですけども、どうもシステム改革会議の中では、そういう短期間で身につく学力というのは本物ではないんじゃないかというような、ああ言えばこう言う的な、そんな声もあったとどこかの記事で、ちょっと読んだ気もしますけども。でも世の中で仕事する場合、火事場の馬鹿力って、本当に実は求められるもので、そういう力も実は養っていることになっているのでは、と思っています。

最も緊張した自己採点。これはうちの子どもの自己採点です。テレビ見ているフリしながら耳を澄まして聞いていた時、日曜日の夜にインターネット開けば出て来ちゃいますので、うちの子どもはふたりともずいぶん威勢よく自己採点をする連中だったので、赤ペンで、丸だと、合つてるとキュッ！といういい音がする。ダメだとビッ！という、そういう音がする。横でお父さんが耳を澄ましているなんてことも知らないもんですから丸丸丸丸が続くと良いんですけどもビッビッビッというそういう音がすると、本当に肝が冷えました。どの生徒の自己

採点に立ち会った時よりも、やはり自分の子どもの時、自己採点の音を隣りで聞くっていうのも、こういう仕事をやっているからですが、それが実は一番緊張したわけです。

引き続き、受験者の保護者としてという観点です。実は、とありますけれども、先ほど倉元先生のお話にありました、平成 24 年度というのはなかなか大きな年だったようですけども、実はその平成 24 年度入試というものを、うちの長女が、お姉ちゃんが受験しています。この春、新社会人になりました。具体的に何があったかと言うと、公民に 4 単位科目が加えられた年です。公民を、2 単位科目で良いっていうところがかなりバラついて、しんどい思いをした年です。難関大とそうじゃない大学っていう言い方をしちゃいけませんけども、かなり難関でも、この年に限っては公民 2 単位でも OK というところがあったり、さほど難関でもないのに 4 単位じゃないとダメというところもあったり。それでも『倫理・政経』は自分で勉強する」って言って、長女は勉強したわけですけども、なかなか新設の科目、情報が早く流れればいいんですが、そうばかりでもなくて、結構大変な思いをしていた様子も横で見えています。長男は大学 2 年で、こちらの大学にお世話になっているんですが、理科の新課程が先行導入された、そういう年でした。文系ですので理科基礎 2 科目。これが入ってきた年で、おまけに自己採点後に得点調整までがあった年で。なんだかセンター試験の歴史的な切れめって言ったらなんですが、かなり話題になる年に、うちの子どもの受験がたまたまぶつかりました。こういう仕事をしていますので、各社の説明会、秋口ぐらいから始まりますけれども、はたして公民 4 単位科目の倫理・政経っていうのはどんな問題が出るんだ、というような勉強会があると、東京や名古屋まで足を運んだり。理科の基礎科目はこんな感じっていうのにも、同じように足を運んで情報収集に走りました。役得って言わ

れそうですが、やはり大変気になるんですね、どんなレベルの問題が出るんだろうということが、受験者本人もそうですし、親の立場としてもそうでした。そんなことまで気にしている親はいないと思われるかもしれませんが、やはり変更があるとなると大変不安です。これが 900 分の 100 でするので、まだいいものの今回本当に大きく変わると言われていることを考えてみた時に、やはり段階的な変化、段階を踏んで少しずつ改革を進めていくということは、ぜひお願いしたいというか、そういう方向にもっていかなくてはいけないんじゃないかと、それが大人の務めじゃないかなと思っています。

二人の子どものセンターがともに変更があった年、というのが共通点でしたが、相違点もありました。二人のうち一方は、センター本番が自己最高点でした。予想の範囲内で、これぐらいの点数までいけたらいいなっていうその点数まで届きました。そうは言っても各教科、科目がすべて自己最高点だったというわけではなくて、点数、科目ごとにでこぼこはありながら、合計で自己最高をマークしたのがひとり。もうひとり、えっ！というような点数で、さあ困ったという感じでした。それでも、月曜日の夜には、先にお話した大体のデータが分かりますので、大丈夫だよ受けられるぞという励ましをしたのですが、やはり個人によってもいろいろなセンター試験の受け止め方はあるんだということの例ではないか、と思います。

最後に、よりよい改革に向けてということですが、実はかつてこんなことを書いていたという、その文章になります。ずいぶん長い文章ですので、いちいち読むことはしませんが、2 年半前、2014 年の 1 月 27 日です。まだこの頃新しいテストが達成度テスト、ふたつの達成度テストと言われていた頃ですが、日本経済新聞に投稿しました。その結び近くです。まず各大学の機能分化っていうものがぜひ進んでいけば、と書きました。基礎レベルの機能は、私

立大を中心とした推薦 AO 入試の学力判定に絞る。発展レベルテストについては、現行のセンター試験に準じたものとする。近未来的に、基礎レベルとの分化が進み、受験者数が適正化すれば、現在より作問の制度が上がるだろう。先ほど大塚先生のお話で、平均点 6 割というようなお話でしたが、2 割が成績の請求をしないとのことを考えた場合に、こういう受験者層が外れるという言い方をしているのか、受験しなくなれば、その分だけ問題の精度が上がると思いうのです。問題の精度を上げていくことは、新しいテストでも大変必要なことだと思います。また、評価テストは、本当に今までもいろいろ文部科学省の方の講演も聞きましたけれども、まだ受験者数も 50 万人と想定していますが、本当に 50 万人受けると考えているのかなというのが、今のところ正直な感想です。

もうひとつ、一番下は今年度の掛川西高校の「進路のしおり」に書いたことです。今の高校生は新テストには関係ないだろうと構えがちなのですが、大学は通過点に過ぎず、必ず世の中に出ていくことになります。世の中に出て行った時に、5 つ、6 つ下の後輩たちと長く机を並べて、一緒に仕事をすることになる。その時に、その後輩たちがどういう試験を受けて大学生になり、世の中に出てきたのかということも知っておいた方がいい。そう考えて、今の在校生たちにもしっかりとこのテストの経緯っていうのを見ておきなさいという、そういう話をしています。

資料、残り 4 枚は前任校でセンター試験の前日に配り続けた進路課の通信です。生徒の声も載せてありますので、お時間のある時に読んでいただければ幸いです。センター試験を、高校現場ではこんなふうを受け止めながら過ごしているという報告を、改革がよりよい方向に進めばと思いつつ、させていただきました。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

宮本友弘准教授（司会）：

駒形先生，ありがとうございました．ここで休憩を取らせていただきます．なお，休憩中に質問票の回収を行います．回収箱を持ったスタッフがお近くに行きましたら，ご提示ください．前方の時計で 16 時 5 分に再開をいたします．それでは休憩に入ります．

（休憩）

東北大学高等教育フォーラム

・ 現状報告 2 ・

センター試験を「受けとめて」

駒形一路（静岡県立掛川西高等学校）

センター試験を迎え撃つ

- ・ マーク模試

センター試験は「一発勝負」？
- ・ マーク演習

正答率は学習の指針
- ・ センターマラソン

目標設定も試験科目
- ・ 自己採点

インターネットの功罪

- ・ 高校の教員として
- ・ 受験者の保護者として
- ・ よりよい改革にむけて

- ・ 担任のころ
- ・ クラスを離れて
- ・ もっとも緊張した自己採点は

高校の教員として

- ・ 前任校勤務19年

担任13年 学年主任2年 進路指導主事4年
- ・ 現在校3年め
- ・ 静岡県内進学指導連絡会事務局

受験者の保護者として

- ・ 実は
- ・ 一姫二太郎

共通点

相違点

よりよい改革にむけて

第 24 回東北大学高等教育フォーラム
大学入試における共通試験の役割

現状報告2 センター試験を「受けとめて」

静岡県立掛川西高等学校 駒形 一路

高校の教員として

●前任校 19 年 担任 13 年（4 周＋1 年） 学年主任 2 年 進路指導主事 4 年
現在校 担任 学年主任 進路指導主事

▲静岡県内進学指導連絡会 事務局 4 年・企画渉外担当 3 年

○センター試験を迎え撃つ

・マーク模試 6 回 2 年 2 月 3 年 6 月 8 月 9 月 10 月 12 月

「自分が取りそうな得点は、自分がいちばんわかっている」

・マーク演習

2 学期中間テスト（10 月中旬）以降
授業では過去問題中心
独特のクセ（へた？） 上手すぎる教育産業各社

「貴重な正答率データ」

・センターマラソン

12 月以降 2 日間 1 セットを複数回 同一日程で
クラス解体 受験型別 あいうえお順
意外に長い空き時間 「終わったテストの話はしない」

・自己採点

翌日の朝刊が待ち遠しい → インターネットで当日夜に 功罪あり
センターリサーチ 2 社・3 社 水曜日夕方にはデータ配信、面談開始
▲静岡県では 12 校 2500 人の度数分布を月曜 18 時までに集計
…過年度との比較「あの年に似ている」
→応急処置（励まし 慰め 戒め）

「貴重な過年度データ蓄積」

○担任のころ

・郵便番号 市外局番 生年月日（だったが…）

「1 点刻みの動機づけ」

・どうしてもツラかったら、日曜の夜に電話してきなさいよ

→まさかの土曜の夜
半べそ男子 いま弁護士

○クラスを離れて

・フェアに受験せよ

静岡県の事情→高校会場開設
自校受験者のアドバンテージ 生徒募集にも？

・簡単に

「失敗した」と言うな 何点取るつもりだった？ 何点だったら「成功」なの？ （取れ過ぎても困る）

○もっとも緊張した自己採点は

受験者の保護者として

●一姫二太郎

○共通点

長女（新社会人） 公民4単位科目（倫理・政経）の新設
長男（大学2年） 理科新課程先行導入 理科基礎2科目

どんな問題が出る？ 100/900でさえ不安 まして...

「段階的变化を」

○相違点

自己最高点

各教科・科目の最高得点がセンター本番の得点になるわけではない

こんなこと書いていた

「議論進む『達成度テスト』 高校現場には違和感も」

...提言にある新しい時代にふさわしい人材育成に向け、真に高等教育のグローバル化を図るならば、新テストの導入だけでは不十分だろう。まずはタブー視されている各大学の機能分化を促したい。2種類の達成度テストが、その第一歩になるなら意義もある。

基礎レベルの機能は私立大を中心とした推薦・AO入試の学力判定に絞る。出願は必要に応じた個人単位とし、実施は3年1学期以降に2回を限度とする。理念に沿って多くの教科で学習達成度を問うものとする。建設的な議論のためにも、回答方式を含む実施形態の早急な明示が必須だ。何より、テストを選抜に活用する大学が名のりを上げやすいものでなければ、導入の価値はない。

発展レベルテストについては、現行のセンター試験に準じたものとする。近未来的に基礎レベルとの分化が進み、受験者数が適正化すれば、現在より作問の精度が上がるはずだ。...

日本経済新聞 2014.1.27

「知っておきたい大学事情 【大学入試改革編】」

大学入試の改革は、やや大げさではあるが、世代を作ることに直結する。大学進学率が高まった現代では、なおさらその傾向は強まるに違いない。遷層を迎えようとする方々は、「国立一期校・二期校」という言葉に敏感に反応するはずだ。諸君のご両親よりやや上の年代から始まったのが「共通一次試験」。マークセンス方式が導入され、大量の答案をコンピュータが採点することへの賛否が問われたこともある。後継の「センター試験（正式名称は大学入試センター試験）」に引き継がれ、40年が経過する。

...「最終報告」で示された新しいテストの具体像は、現時点でも明らかにされてはいない。これを懸念する教育関係者は多い。今後、急ピッチで具体化が進むはずだが、その経緯をぜひ注視したい。なぜなら、先にも記したように、大学入試改革は、世代を作ることに直結するからだ。

大学は、長い人生を送る上での通過点に過ぎない。いずれは誰もが世のなかに出て行く。ほとんどの諸君が、末期に近いセンター試験を受験して大学に進むことになるが、やがて世のなかに出て行った先で、しばらく経って出会う5つ6つ年少の後輩たち以下は全て「新テスト世代」ということになる。彼らと肩を並べて仕事することになる。その時、諸君にはどんな力が求められるのか。今の大学入試で求められる力を身につけるのはもちろんのこと、新テストで求められる力を知っておこうとすることも、決して損にはならないはずだ。新テストを他人事で済ますわけにはいかない。

平成28年度 静岡県立掛川西高等学校「進路のしおり」

進路室の窓から

時期が時期だけに、どうしても3年生向きになっちゃいます。
1・2年生、ごめんなさい。でも、1年後2年後は、すぐにやって来るよ。

- 1月19日(金) センター前日
まさか、このタイミングで当番日誌が回ってくるとは…
朝、登校して33、34HRの前を通過して自分のクラスへ。
雰囲気が違う、ピリピリしてる。
5限はLHRで体育館、I先生のものすごいエールで締めてもらいました。
帰りのSHRが終わっても、みんないつもより長く教室にいる気がしました。
- 1月20日(土) センター第1日
6時に起床。朝食をとり、いざ出陣。好きなバンドの曲聞きながらリラックス。
現地では、昇降口前で磐南の人たちがかたまってる勉強してました。
8時30分、会場入り。9時30分試験開始。
とりあえず、問題としかかる前に、「黒板消し(*)」、見ました。
長い紫のものがひとつ、短い青いのがふたつ…。
午後、英語。冊子開いて、「いつもと形式が全く違う…」
焦りました、初めての問題ばかりで。
- 1月21日(日) センター第2日
6時起床。今日も音楽聞きながら会場へ。不思議と昨日より気分が楽。
そのまま意外なくらいリラックスして、2日めを終えました。
帰るときには、何か肩の重荷がとれた感じがして、
テンションが上がっている自分がいました。
駅まで歩いて帰るとき、ずっと友だちと話していました。会話が止まらない。
明石家さんまくらいの勢いで話している、って友だちに言われた。
この2日間を通して、まず言えること、「疲れた」。
でも、帰りの会話のなかにも出てきたのだけど、受験はこれからが本番。
2次試験まで、気を引き締めて勉強していきたいと思います。

今年もいるはず、よりによってセンター試験前日に当番日誌が回ってきてしまった貴方。
むしろラッキーだと思って、ぜひ、今の思いを記して下さい。
上掲は、大学4年になるバンナンOBの当時の日誌、「センター試験体験記」。
何年か前にも紹介したのですが、なかなか臨場感に満ちた記録なので、再登場です。
「黒板消し(*)」の記事は直前にHRで話した「大型黒板消し」の話によるもの。
「会場の黒板消しは、どんなのかなあ、見てきて教えてよ」との求めへの回答。
試験会場でも周りを見回す余裕を持ちなさいよ、という暗示でもあったのですが、
自己採点の日、何人かの生徒が黒板消しの報告してくれたものでした。
こんなバンナンセイの「素直さ」こそが、「伸びる力」の原動力。

浜松南高がバンナンセイのセンター試験会場になるのは、2年連続。
記憶が確かなら、ここ10年で3回めになるのでは、と思います。
駅から遠いのは難点ですが、校舎の古さ加減、教室の大きさはちょうどいいのでは？
出来たばかりの建物ではかえって落ち着かないでしょうし、
バンナン以上の古さでは、身の危険があるし…(そんな会場はないでしょう、きっと)
普段通りの力を発揮するには、ちょうどいい条件とも言えます。地の利は、ある。

あ、サッカー部の諸君は、昨年度の選手権の2試合めの会場でしたね、確か…。
1点が取れなくて負けたのではなかったかな？
あの時、取れなかった点を、320人みんな取って来てくれれば、と祈っています。
偶然ですが、蛇足。今年のサッカー部新人戦、日曜日は、浜松南高と試合です。

さて、裏面は、今年もあの文章を掲載。じっくり読んで、しっかりと。

進路室の窓から

センター入試では何時何分に何を言うかすべて決められており、決められていない台詞を口にすることは許されない。全国一斉に同じ時間に「ただいまより問題冊子を配布します」という同じ台詞をおそらくは数万人の教師が教壇で口に出しているわけである。

全国どの会場でもまったく同一の条件で試験がなされなければならない建前であるから、どのようなトラブルが発生しようとも、「臨機応変に対処する」ということは許されない。すべて規定通りに対処しなければならない。したがって「こんなトラブルが起きたら、こう対処してください」というマニュアルが事前に配布されるのであるが、年々その「事例」の数がふえてきて、とても読み切れない量になってきた。

ばらばらとめくるうちに、「こんなことが私の会場で起きたらどうしよう……」というようなむずかしい事例を想像してしまう。…

内田 樹著『街場の大学論』角川文庫より

例年、この時期の「窓」のウラには、

『国家の品格』がバカ売れした藤原正彦の一文を掲載していますが、今年はおモテにもセンター試験の監督経験者の体験談。辛口な論調で評判のウラの藤原氏も、その苦惱ぶりが目に浮かびます。おモテの内田氏は、たしか神戸女学院大学の実質的な入試責任者でもあったはずなので、苦勞もひとしおだったろうなあ。どんな「むずかしい事例を想像し」たのかは、ぜひ続きをお読み下さいませ。笑える。

さて、秋も深まる頃からセンター試験の過去問題集を扱っていて閉口するのは、著作権絡みの「原著者のご意向」とかで、素材文掲載が見送られてしまうこと。例えば、評論だと別役 実とか池澤夏樹とか。小説で芝木好子とか辻 邦生とか…。近年、追試問題で目立つ。

若者の「学力」(受験学力、という限定つきですが) 向上のためにも、堅いこと言わず、ひと肌脱いでもらえないものか、と思えて仕方がない。そのためか、最初から著作権についてうるさくさそうな論者や作家の文章が、素材文として用いられる傾向にあるのではないかな、とも思う。昨年の驚田清一は前の大阪大学総長だし、しばらく前の堀江敏幸は早稲田の教授だし…。すでに定年を迎えたが、上掲の内田 樹もセンターデビューしてもいい気がする。

さて、その内田センセイ、同じ本のなかで入試問題に用いられやすい文章の基準として、以下の5点を挙げていて、なかなか興味深い。

- 1 何を言っているのか、一読しただけではよくわからない
- 2 しかし、再読、三読すると「なるほど、そういうことって、あるよね」と高校生にも得心がゆく
- 3 しかも、ところどころに読みにくい漢語や、やや専門的な術語がさりげなく配されている
- 4 くわえて、文章に文法上の間違い、誤字脱字などがない
- 5 さらにくわえて、高校生が受験の前に読んでいる可能性が低い

はたして、今年はどうな文章が出るのやら…。

話は冒頭の引用に戻ります。

日本全国で555,527人もの出願者がいる、国民的行事とも言うセンター試験。もちろん受験する諸君が緊張するのは当たり前、してくれないと困りますが、監督者をはじめ、試験に携わる関係者も、かなりのストレスのもと、二日間を過ごすに違いありません。そんなことにも思いを馳せて、ぜひフェアに受験を。 めざせ、自己ベスト！

進路室の窓から

さて、センター試験だ。(1・2年生も模試です、来年再来年のこと想像しておこう)
昨年あれだけいろいろあったのだから、今年は多少なりとも改善されているはず。
配布方法等で(あれ、おかしいな…)と思ったら試験官に聞いてみるのもいいだろう。
そういう対応も柔らかくなっているに違いない。
ミスしちゃいかん…って思っているのは受験者だけじゃない、試験官も緊張してるのだ。
(裏読めばわかる)

11月の3年生保護者会で話したことを紹介しておく。
3年生はもちろんのこと、2年生も重々承知、1年生もわかりはじめたと思うが、
いま一度、おさらいしておこう。
ちょっと乱暴な喩えだけど、国公立大学の入試の仕組みは、
陸上競技のレースを2本走るのだ、と考えてみるといい。
1本めのレースは、例年1月半ばに行われる全大学学部共通のセンター試験で、
2本めのレースは、2月末に各大学学部で実施される個別試験(前期)、と置く。
(3月上旬の後期試験は、大胆に言えば敗者復活戦の位置づけかな?)

各大学学部によって2本のレースの距離の組み合わせが違っていると考えてみよう。
例えば、短距離1本・長距離1本とか、その逆とか、あるいは中距離2本とか…。
そうすると自然に1本め2本め、それぞれのレースに臨む構えも違ってくるワケだ。
(もちろん科目数とか傾斜配点とか細々したことはあるけれど、ここでは無視する)
これを、センターと個別の配点比になると仮定しよう。以下、例を挙げる。
静岡大学教育学部は、センター900に対し個別300だから、3:1。
最初の1本が重みのある長距離で、後の1本は短距離、これがAタイプ。
東北大学経済学部は600・600で1:1。中距離2本、重みは半々のこれがBタイプ。
京都大学文学部は250・500の1:2。短距離が先、後の長距離に重みがのしかかる。
こちらのCタイプ、顕著な例は東大で、センター110に対し個別440の1:4。
1本めが200m走で2本めは800m走くらいか(実態はそれ以上だけど…)。
1本めのレースの出来が大きくモノを言うのは、どのタイプか、わかるかい?

Aタイプ、長距離でついた差を短距離で挽回するのはなかなか難しい。
でも長距離で差をつけたからって安心してると爆発的なダッシュで抜かれちゃうかも。
Bタイプ、中距離2本なら、最初の1本でいい位置につけておいて2本めで勝負もある。
もちろん1本めから勝負するのも間違いではない。2本めまでに1ヶ月あるし…。
Cタイプは、1本めはほとんどウォーミングアップに過ぎず、2本めこそが本番だ。

志望校を決めることは、出場するレースの組み合わせを決めるということにもなる。
A・B・C、それぞれのタイプによって準備の仕方が変わってくるはずだ。
1本め・2本め、それぞれのレース展開を思い浮かべながら、
日々のトレーニング(予習・授業・復習の黄金サイクル)で必要な部位を鍛えてゆく。
何度か小さな大会、予選(小テストや定期テスト、模試とか…)を経て、さあ、本番…。
On your mark, Get set, Go !!
と行きたいところですが、間違えてはイケマセン。
何度めかになるけど、諸君の向かう先は、ゴールではなくスタートラインだということ。
大学入試の先に大学での「学び」があり、世の中に出てからも「学び」は続く。
大学入試は、ここ磐田南高を出た先の当座の「学び」の場を決めるに過ぎない。
それをこの3年間の日々の積み重ねが支えることになる。

3年生諸君、さあ1本めのレースの始まりだ。みんながキミの背中を見ている。

裏は恒例の藤原正彦のエッセイ。3回めに読むときが本番だよ。

進路室の窓から

さあ、明日からセンターだ。

「大学受験を通じた人間的成長」とずっと言い続けている。
主体的に長期計画を立てて事に臨む姿勢とか、強い意志を貫く自己管理とか、
自身の長所短所、得意不得意を客観視する習慣とか、
ともに学ぶ友人への配慮や支えてくれている周囲への感謝とか…。
そういったもののすべては、
高校3年の6月からの学校生活で身につくと信じている。
(もちろんそれ以前から身につけていても一向に差し支えはないけど)

3年2学期も半ばを過ぎると授業でもセンターの過去問演習が始まる。
現代文は3600字の評論、4000字の小説。
古典は1500字の古文、200字の漢文。
問題本文を読んでは選択肢とにらめっこ、絞ったところで塗りつぶす…。
そんな単調に思われる演習ではあるけれど、
毎回の提出を促す記録用紙に、こんな「一言反省」を見つけるとほっとする。

- ・小説がとてもし話だった。
- ・読んでいて、楽しい話は点がよくなる。
- ・登場人物の表現方法が面白かった。
- ・読んでいて楽しかった。とてもうまくできた。時間もうまく使えた。
- ・小説で点が取れたときは、
主人公と自分が似たような経験をしていることが多い。

ネタバレを承知で記すが、これは23年追試験を解いた際のコメント。
たった5年の東京での生活だったけれど、たまに両親が上京してきた時には、
たしかにこの主人公のような気持ちにもなったことも思い出す。
記録用紙への記入こそなかったが、
他のクラスでも、この年の小説は男子生徒が話題にしていた。
「なんか感情移入しちゃって、途中から泣きそうになって困った…」とか。

こういうのっていいなと思う。
これだけでも十分に「人間的成長」の証だ。
こういう生徒がいる学校の教壇に立ていられることは幸せだ。

例年は鎌倉に出向く初詣なのだけど、今年は奈良 東大寺に行ってきた。
元日には大仏殿の正面・観相窓が開けられ、外からご尊顔を拝むことができる。
なんだか不思議な感覚だ。
そのせいか、毎年お祈りしていることをひとつ忘れてしまった。
けっこう大事なことのなのだが…。
「センター試験、いい問題が出ますように」

でも大丈夫、去年のセンターを考えれば、今年は点はとれるはず。とくに国語。
今年だけじゃない、新課程が理科・数学で先行実施される来年も、本格実施の再来年も、
前年比で点はとれるはず。世の中、そうなっている。
ただし、点がとれることと「いい問題」かどうかは別問題。それが悩ましい。

裏面は毎年おなじみの文章で。3年生諸君！ めざせ、自己ベスト更新！！
1・2年生諸君、3回めに読む時が来たら、主役はキミたちだ。

第3部 討議

ーディスカッションー

討議—パネルディスカッション—



石井光夫教授（討議司会）：

それでは、これから討議の時間とさせていただきます。先ほどご講演、ご報告いただいた先生方に再度ご登壇いただいています。ここから討議の司会は私、東北大学入試センターの石井と……

田中光晴講師（討議司会）：

東北大学の田中と申します。よろしくお願いいたします。

石井光夫教授（討議司会）：

2人で行わせて頂きます。どうぞよろしくお願いいたします。この東北大学の高等教育フォーラム、毎年開催させていただいておりますが、ちょうど1年前、同じこの会場で中教審の高大接続答申が出たというので、高校も、大学も、非常に不安と戸惑いで受け止めたわけですが、この改革にどう向き合うかということでテーマを設けまして、議論を行ないました。入試改革の第1弾であったわけですが、今回は言ってみれば入試改革の第2弾として設定させていただきました。1年前もこのフォーラムでは、方向は出ているけれども、なかなか検討すべき課題がはっきりしないということで、とりあえず私たち、高校、大学でもそうですけれども、できること、できないこと、そういったことをしっかりと見極めながら、その実証的に着実に、改革に取り組んでいければというようなことを確認しあったというようなフォーラムであったと記憶しております。それから1年で

すけれども、その改革の論議は、先ほども南風原先生からもご紹介いただきましたけれども、文科省でも高大接続システム改革会議に引き継がれて、今年の3月に最終報告書が出たと。高大接続、入試改革についての将来の形というのが、1年前よりはだいぶ具体的なものも提言されましたが、しかしなお、また形として本当にはっきりとして見えてきたわけではないんですね。今日この場で議論の焦点になっております、新テスト、共通試験の新しい姿というところについて、議論する必要があるということで今回のフォーラムを開催させていただいたわけです。今日は南風原先生、倉元先生、大塚先生、駒形先生、それぞれのお立場から、この共通試験を巡って色々なお話をいただきました。南風原先生からは測定論の立場から新しい共通試験に対するいくつかの懸念を言及していただきましたし、倉元先生からはその前に現行のセンター試験についての検証が十分なのかどうか、その論理について検証する必要があるのではないかというようなことをお話しいただきました。大塚先生からは現行のセンター試験の運営も含めて、色々な課題についても、それから記述式試験についても触れていただきました。駒形先生からは現場の高校におけるセンター試験をめぐる生徒たちとのやりとり、姿をご紹介いただきました。

先生方のご講演を経て、たくさん質問、ご意見をいただいております。これをもとにちょっと時間が押しておりますけれども、5時くらいを目途にまた議論を深めていただければとい

うふうに思います。たくさんいただいたものですから、大変申し訳ないのですが、全部取り上げられるかどうかはわかりません。その辺ご了承くださいたいと思います。

その前に先ほど先生方にも大変短い時間の中でお話をいただきまして、その時間に言えなかった、言い足りなかったということがございましたら、お一人ずつ簡単にお話をいただければと思います。いかがでございましょうか。南風原先生からお願いします。

南風原朝和教授：

先ほどの休憩時間に石井先生から、高大接続の会議の雰囲気はどういう感じかということをお聞かせいただきました。実は互いに意見を言い合うってことはほとんどなかったです。意見を言ったら、「はい。他に何かありますか」という感じで、淡々と流れていく。事務局から提出されたものは議論ではなかなか変わらない。このような専門家会議というものの流れは、人選、つまり、どなたを中心にしたどのような構成となるかで決まると思いました。私は統計学を専門としていますが、対象者のサンプリングというのはすごく大事なんですね。一番避けるべきは、偏ったサンプリングというものなんです。あとは質の悪いサンプリングもありうる。そういうことを避けるためにもオープンな議論というのがすごく大事で、皆の目に見えるような形でこの後もやってほしいということを、改めて強調しておきたいと思います。

それから、入試センター試験の作題に私は関わったことがないので、ちょっと質問をしたいのですが、センター試験を廃止するという話がありますが、センター試験を廃止するにしてもいろいろと順番があると思うのですが、例えば、2020年に作る2021年度の入試というものは、いつから作業が始まるのでしょうか。

大塚雄作試験・研究統括官：

試験の作成スケジュールの詳細は、基本的に

は秘匿とされていることかと思いますが、その概要的な部分しかお話しできないかと思いますが、2021年の1月に新テストを実施すると仮定した場合の問題作成は、大雑把に言えば、およそ2年近く前の2019年4月くらいから準備を進める必要があると思います。その間、問題作成を担当する委員会の案に対して、点検を担当するいくつかの委員会からチェックしていただきながら、試験実施の数ヶ月前には試験冊子が完成されている必要があります。

そして、2019年4月から問題作成に取りかかるためには、それよりも前に、試験問題の枠組みというのでしょうか、あるいは、試験の仕様とでもいうのでしょうか、どのくらいの試験時間で、どのような内容に関わる問題をどういうバランスで試験として構成するのかが定められている必要があります。センター試験の場合はそのベースに学習指導要領を置くこととなりますが、それにしても、新テストのように、試験で意図する力点が違ってきますと、試験の仕様も変わって来ますし、それによって、問題作成の委員としてお願いする先生方も選ばなければなりません。問題作成の委員の先生方の委嘱は、ほぼ半年くらいを必要としますので、仕様の策定につきましては、その前、一年半くらい必要とすれば、2017年4月くらいから着手する必要があるということになるのでしょうか。大雑把に言って、来年度はじめには具体的な方針が定められて動き出す必要があるということかと思いますが。

倉元直樹教授：

すみません。さきほど自分の話の中で気になった点が3つか4つくらいあります。付け加えさせていだきたいと思います。

まず、最後に話をいたしました全国学力学習状況調査です。おそらく、毎年、約60億円かかっていると思います。国費です。最初の頃は100億という額だったと思います。南風原先生が主張されていたサンプリングですと、おそら

くその半額ぐらいでできるのかもしれませんが、それだけのお金をかけて、一体、私たちは何をしてきたのだろうか、ということは、検証していただいてもいいのかなということが1点目です。

2点目です。私が言いたかったことは、現状をちゃんと見据えて、その上で先入観にとらわれることなく、実際の問題を抽出して、それに可能な範囲で対処をする、というようなことが本来の「改革」というものではないのか、ということです。時間をかけることが必要だと思います。昨年も同じことを言ったと思うのですが、30年かけて、少なくとも高校と大学の関係は当初と本当に様変わりした状況です。良い面、悪い面があるとは思いますが、1年程度では変化が感じられないかもしれないけれど、振り返ってみた時に、「ああ、ここまで違ってきたな」というような感覚になるのが、本来あるべき改革ではないかと私は感じます。そのことをお伝えしたかったということです。

それから、3点目は少し細かいことなのですが、理念にしたがうのであれば、センター試験に変わる時点で「完全得点調整方式」にすべきだったということです。それは私の変わらない主張なのですが、少し含みがあります。大塚先生が誤解されたかもしれないと思ったのですが、問題を非公開にしようということ一切考えていません。公開の上で出来る範囲での調整ということです。今、センター試験でやっておられる方式もあります。測定の専門家は「その程度のものか」とおっしゃるかもしれませんが、それ以上に主張したかったのは、本当に1教科1科目だけ、個別試験もなしに選抜に使う、というような、そういう設計で良かったのか、ということです。ですから、そこが妥協点なんです。例えば、3教科以上は選択する必要がある、というような形で考えておけば、それなりの設計ができたのかも知れない。結局、それはその時には目に見えないのですが、二十数年経つと、やはり、ひび割れが目立つのかな、と思

います。これが、今回、センター試験に手を入れるべきところの本質なのではないかと思っています。

最後、「平成 32 年度入試」と言ってしまったのですが、「平成 33 年度入試」ですね。すみません、1年、間違えました。お許し下さい。

大塚雄作試験・研究統括官：

入試の年度は、我々でも紛らわしくて、32年度に実施する試験は、今のスケジュールであれば、33年1月に実施されることになりました。それは33年度の大学入学者を選抜するという意味において、33年度センター試験と呼んでいるのですが、33年度センター試験は、32年度の33年1月に実施されるということになります。そこはある程度文脈から理解するようにしておりますし、我々もよく間違えますので気にしておりません。

南風原先生からセンター試験を「廃止する」という言い方が紹介されておりましたが、私が問題作成に関わって、大学の先生方がこれだけ真剣に問題を作成して下さっているという現場を知ってしまいますと、輕輕に「あんな知識問題ばかりのセンター試験など廃止すればいい」、あるいは「センター試験が日本の教育の諸悪の根源だ」といったことまで言われますと、反発を感じてしまうというのが正直なところです。そういう大学の先生方の努力、そして、それを25年も積み重ねてきたという部分を大事にしてほしいという思いが私には基本的にあります。

もちろん、今のセンター試験でも、知識問題、いわゆるクイズ的問題もないわけではなくて、その点は、点検委員会からもコメントされることがあります。「クイズと試験は違う」とか、「今年の問題はアカデミックな匂いがしない」といった言われ方もします。逆に、大学教育の視点から考えさせる問題作成にチャレンジしますと、「これは高卒レベルの問題ではない」という逆のコメントが来たりもして、その狭間

で問題作成を担当する先生方は苦悶すること
もしばしばです。

そもそも、問題の難しさとか、考えさせる問題であるかどうかといったことは、一般化して決められる話ではないということもあります。ひとつの科目を担当する先生方のなかでも、大学教員の立場からすると、専門は多岐に渡っているわけで、専門に関わることであれば当たり前の知識問題に見えたとしても、専門から外れると考えさせる問題になったり難しい問題になったりします。「私でもこのセンター試験は満点がとれません」という問題作成の先生もいるくらいで、私自身も、センター試験は難しいとよく思います。センター試験で、それこそ8割くらいをみんなが取れるのであれば、日本ぐらい教養の高い国はないだろうと思うくらいのレベルの高さを感じます。ただ、問題の難易度レベルは、個人のなかでも、私などの場合にはもう勉強していることを忘れていているというか、教科書もずいぶん変わってきていますから、自分が知っているか知らないかで解けるか解けないか決まって来るということがあります。私でも、わずかに知識が残っているかなと思う数学などの問題は、その気になって考えれば解けたりもしますので、これは考えさせる問題だなあという印象を持てたりもします。つまり、一人の個人の中で、思考力を測定する問題なのか、あるいは知識、暗記、知っているか知らないかで決まるのかということは、その個人がどういう領域の知識をどのレベルで持っているかということで違ってくることがあります。

一方、それは一人の個人のなかだけではなく、受験生の個人差においても同様でありまして、ある層の受験生にとってはセンター試験というのは思考力が反映される問題になるかもしれませんし、また、両極に位置する受験生にとっては、考えることなく解が導き出してしまう層もあれば、いわゆるボリュームゾーンから下位の人たちにとっては、単に勉強していないこ

と、知らないことということで解くこともできないということがあるわけです。それらの層にとっては、できる場合も、できない場合も、単なる知識問ということになってしまうということがあるわけです。特に、ボリュームゾーン以下の受験者層にとっては、センター試験のレベルでも、ほとんどどう受験勉強していいかもわからないということもあるのではと思います。

この点については、南風原先生が基調講演で的確に整理してくださいましたが、共通テストで受験者の広範に渡る学力レベルにどう対応していくかという課題は、今のセンター試験においても大きな課題であると思いますし、今回の改革はそれを乗り越えていくためのよいチャンスであると私自身は思っています。

その点で、記述式問題に関しても、学力のレベルによって採点基準を変えていかなければいけないということが出てくると思います。あるレベルでは、問題で指示された通り、いわゆる「条件付き記述式」の採点基準で一定の識別力が得られる問題になり得るだろうと思いますが、別のレベルにある大学でその教育を受けるにふさわしい思考力等を備えているかどうかを測るためには、また別のそれに合った採点基準を作っていかなければいけないということが出てきます。ですから、記述式問題もその採点基準がどう定められるかによっては、一部の大学では共通テストに含まれる記述式問題はほとんど使えなくなってしまうということも出てくるように思います。記述式に関しては、その点も一つの大きな課題になると思います。

いずれにしても、そういったひとつひとつの課題をクリアしていきながら、新テストをより良い形のものにしていければと思いますし、そういう意味で、皆様方からもそれぞれの視点からの率直な声を聞かせていただきたいと思いますし、さらに、いろいろとサポートをいただけるとありがたいと思っていますところ です。

駒形一路教諭：

先ほどで、言いたいことは全て言いましたので、特にありません。

石井光夫教授（討議司会）：

ありがとうございました。それでは、いただいたご質問を先生方それぞれ宛てに来ておりましたので、順にお答えいただければと思います。

田中光晴講師（討議司会）：

それでは、それぞれに様々細かいところの角度もありますし、一括した質問もありますが、まず細かいところで、細かいと言ってもひとつひとつの質問がかなりクリティカルでして、なかなか扱いづらいところもありますが、南風原先生にこのような質問がきております。新テストに向けていかなる力を育てていくか、出口の部分でたしかに迷走している状況だというふうに理解をしていますが、そのうえで、先生がお考えになる、いわゆる中高生たち、受験生たちに育てほしい力を、すでにいくつか答えを示していただいたかもしれませんが、少し教えていただけたらと思います。

南風原朝和教授：

私の考えはオーソドックスなもので、「本物の理解」「本わかり」ということに尽きると思います。これは要するにどういうことなのか、他の事柄とどういうふうに関係付けられるのかという深い理解。これも最終的には知識と言っていると思うんですけども。私は統計学をやっていますが、統計学の細かな技法を覚えるだけでなく、それがなぜそうなるのか、他の技法とどう関連付けられるのかということを理解して応用できる力を育てていくということで、特に変わったことをやる必要はないと思います。そういう意味ではテストがどう変わってもそういった本物の理解があれば突破できると思いますので、テストの動向で求められる力が変わるとい

うようには考えていないわけです。学校でやること、生徒がやることなんてそう変わらないことだというふうに考えています。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございます。実はこの質問は倉元先生にも入っておりまして、大学が期待する高校の教育というものについてどうお考えになるのかという、これもかなり大きな質問だと思いますが、試験、テストという観点から見ると先生はどのように考えますか。

倉元直樹教授：

高校関係者の間ではあまりにも当たり前すぎて、当たり前すぎるがゆえに、文献を探すと出てこないのですが、それは何かというと、入試問題がその大学からのメッセージである、ということです。入試問題が高校の大事な教材の一つであるということです。私が期待する受験生像を、抽象的な言葉ではなく一言で言うのであれば、・・・身もふたもない言い方ですが・・・東北大学の立場からは「東北大学の個別試験をきちんと解けるような生徒を育ててください」ということになります。それが東北大学からのメッセージだ、ということになると思います。

今回の高大接続改革の議論の中で、個別試験を全廃する、というような話も最初の頃は出ていました。これはもう大変なことになったな、と思ったのですが、今は、おそらくそういう議論はなくなったのではないかと思います。ということは、逆に、これから、実は、作題、出題能力というのが、大学に求められてくるのではないかと感じています。そこをしっかりとっておけば、新しいテストがどういう形になったとしても乗り切ることができると思います。一つの考えられる、大学の、あるいは、国立大学としての対応策だと思います。

少し質問を踏み越えた答だったかもしれませんが、

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございました。今の点と関連しまして、試験問題、良問は学習教材としては非常に有効であるというようなコメントが寄せられています。そこで大塚先生に伺いたいと思うんですが、センター試験の過去問を教材として使うということをどのようにみられていますか。またそのことを想定することがあるでしょうか。

大塚雄作試験・研究統括官：

大学入試センターが有しているもののなかで今まで積み重ねてきた過去問という財産は、他に類を見ないと思えるほど貴重なものと思っています。過去問というのは、手前味噌的に聞こえてしまうかもしれませんが、私は大学入試センター独自の財産だと思うんですけども、残念なことにセンターのホームページを見てみると3年分しか載っていないんです。著作権の処理などの問題もあるようでして、試験問題自体に利用することは前もって了解を取らなくても、一応著作権法上で保証されているのですけれど、それをホームページで公開する場合には、著作権の問題が絡んでくるということとして、一応3年間公開しますという形で処理をしているということです。

私は個人的に、例えば今の時代でしたら英語のリスニングの問題というのは、CBTなどにも適的な小問の構成となっていますし、センター試験で50万人オーダーの受験生に基づく統計量も得られていますので、その種の過去問の項目プールをベースに、項目反応理論に基づく適応型テストをWeb上で誰もがアクセスできて試せるようなCBT形式で提供すれば、非常に多くのアクセスが得られることが予想されますし、一石二鳥じゃないかと思いつきました。センター内でそういう提案をしたこともありますが、著作権の問題があるということ、それからセンターから発信するということは、センター試験でそういう試験をやるというメ

ッセージになって伝わってしまうという危険もあって、それから先にはなかなか進められないということがあります。

ただ、センター試験の過去問は、いわゆる赤本には3年より前のものもずっと掲載されておりますので、おそらくそういった中から適宜問題を取り出して、各高校、あるいは大学の初年次教育といったところで利用されているのだろーと思います。その使い方は、利用される先生方に工夫の余地もあるはずでありまして、マークシート問題の批判に「選択肢がヒントになる」ということが挙げられることがあります。私は、それこそある学力レベルや、ある教育の文脈においては、選択肢はある種の思考を助けるいいプロンプトにもなり得ると思いますが、もしそれが教育的に支障になるというのであれば、問題から選択肢から削って記述式の問題として提示するということもできるでしょう。そうした利用において、生徒たちがどのような反応を見せてくれるのか、その辺をまたフィードバックしていただけると、新たに作る問題にも活かしていけると思いますし、是非、過去問は大いに活用していただけて、そしてまた、その活用の結果を発信していただけるとありがたいと思います。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございました。それでは駒形先生への質問です。センター試験のデータ等が各社から水曜日にリリースされているというお話が先ほどあったかと思いますが、それを受けて子どもたちが面談前に自身の志望をある意味では下げてしてしまう場合がある。データは実力でチャレンジできる大学を簡単に諦めてしまうきっかけにもなっているのではないかと。そういう場合があるということですが、静岡ではどのような状況かということについて、具体的にお話いただきたいというご質問です。

駒形一路教諭：

学校の特性にもよると思うんですけども、それこそ一昨日第一回目が行われた静岡の連絡会で今年度の入試の総括が行われたんですが、やっぱり高校によって「今年は受かりすぎた、現役で行かせすぎた」という発言があったり、「男子は半分以上浪人してしまった」という学校があったり、それは学校それぞれの特徴だと思います。私が一昨年から、この掛川西に来て、一番驚いたことは、それはそれは浪人生が少ない、浪人する子が少ない、ということでした。今どきの高校生には、顔を知っている先輩の影響というのはとても大きくて、「先輩の行っている大学だから何が何でも」ということがあったり、「あの先輩は高い希望を貫こうと、1年予備校に行っている」ということもあるでしょうし。それは、現役で行けるのが一番だというふうに思いますけれども、それぞれの学校の特性によって、最後まで受けさせるという指導を、私はしたいと思っています。本当にそれは学校によって様々なので、リサーチによって動くことが一概にいいことだとも思いませんし、もう一年やってもそれは本当に本人の事情もありますし、家庭の事情もありますから、なかなか言えないことではないかと思いますが、基本的に大学進学というのはチャレンジだと思っていますので、ちょうどいい背伸びをする経験は何物にも代えがたいと考えています。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございます。それと、また大塚先生に戻りたいと思うんですが、入試センターの改革、今回の入試改革の件で、具体的にお答えできる範囲でということなんですけど、現実的に改革を伴うとした場合、入試改革は、入試センターの方でやはり主導していくような形になるのかどうかという点を伺いたいと思います。

大塚雄作試験・研究統括官：

入試改革は、入試センターだけでは回らない

というのが私の認識です。それこそ、国大協をはじめとして、個々の大学、また、高校をも含めた形で進めていく必要があると思います。

私は前任の京大で、アメフト部の顧問をやっていたしまして、入試改革の最初の頃には取り上げられていた「複数回受験」という事項がありましたが、私が入試センターに異動が決まった際に、アメフト部のエースクォーターバックのお母さんから「それだけは絶対にやめてください」と言われたことがあります。高校でもクラブ活動に精一杯打ち込んでいる生徒はたくさんいるわけで、それはただ遊んでいるわけではなくて、特に親御さんに自分の子どもがそれで成長しているという実感をもたらすことができているんだと思います。高校の3年間というのはある意味では短い期間であって、それこそ答申の理念に基づけば、高校時代に入試の準備に割ける時間というのは、今より長くするのは得策ではないだろうというのが私の中にはあるんですね。ですから、記述式問題にしても、人が採点しなければいけないとなると、1ヶ月以上、試験時期を前倒ししなければいけないということが出てきた時に、そういう影響が同じように出てくるだろうと思います。というように、高校教育のあり方をどう考えていくべきかという問題も非常に重要なことだと思いますから、入試センターだけとか、文科省だけとか、どこかひとつだけ先走ってもうまくいかないと思いますので、高校や大学なども含めて、それぞれが持っている課題を調整することを通して持続可能な新しい入試制度というものができていくんだろうと思っています。

南風原朝和教授：

今のことと関係して、どこが主体となって改革を進めるかということについてですけども、先ほど大学入試センター試験は大学「が」行うという話がありました。専門家会議や文科省の結論をただ待っているのではなく、大学が主体的に考えて、責任を持ってやっていくとい

う姿勢が重要だと思います。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございました。すみません、大塚先生にもう1点、議論になっているこの新しい試験では、いわゆる既存の「知識」ではない新しい能力を測ろうとしています。しかしこの部分が本当に試験で測れるのかどうかという疑問がかなり寄せられています。先生のご報告の中で高大接続改革の議論の中ではセンター試験イコール既存の「知識」のみを測ってきたというような評価がありつつも、センター試験の択一問題でも、実はこの思考力のような新しい能力は、今までも測れてきたのではないかという見方もできるわけですね。このあたりについて先生の考えをお聞かせいただきたいと思います。

大塚雄作試験・研究統括官：

現在のセンター試験の問題作成の基本方針の中にも、思考力、応用力という言葉ですけれども、それらを測定できるように工夫すると書かれておりまして、問題作成の先生方はその点で苦労されていると思います。ただ、それぞれの科目の特殊性がありますので、一律にこれが思考力を測る問題というようなことは簡単に言えることではないということは、問題作成の先生方と接する中で出てくることです。思考力等を問う問題ということでは、例えば資料を読み込んでとか、現実の問題に照らしながらとかいった文言が、どうしても多く出てくるかと思うんですけれども、資料を読み込んで、そこから考えて解答を導くというような問題を歴史の問題で作ると、これは国語の問題ではないかというような意見が点検委員会の先生方から出てきたりもするんですね。歴史の問題である以上、その歴史的事実というのがそこにうまく組み込まれていないといけないという難しさが実はあるわけです。

これは、南風原先生の基調講演でも触れられ

ていました「妥当性」の問題に関わることになります。ただ、妥当性の検証というのは、測定論的にもなかなか厄介な話で、測りたいものが測れているかどうか、必ずしも明確に証拠を示すことは容易ではないということがあります。

「思考力」と一口に言っても、歴史的思考力の例のように、領域によって考え方が違ってくる可能性がありますし、また、ある種の思考に関する理論的モデルに基づいた汎用的なテストも開発されていると思いますが、その種の思考力テストの得点と、問題にしている当該テストの得点との相関関係を、どう検出してどう解釈するかというのも簡単ではありません。どうということかと申しますと、通常は、理論的なモデルに基づいた思考力を測定しているとされているテストと、例えば、思考力を測定しようと意図して作られたセンター試験などのテストを、同一人の被験者に実施して、その二つのテストの相関係数を求めるといったことで妥当性の検討をすることが多く見受けられるということがあります。そこで高い相関が得られれば、その当該テストの得点は、思考力テストの背景にある理論的モデルに関わる思考力を測定できていると判断していくことになるわけですが、観測される相関は、ほとんどの場合、ある程度の大きさ以上にはなりません。その種のテストは、いずれにしても個人が持っているある種の知識の多寡が効いてきますので、それだけでもそれなりの相関が出てくることは出てきますので、少なくとも思考力を測っていないとは言えないといった結果が得られたりもするだろうと思います。一方、テストなどの測定値は、誤差を含んでいますから、いわゆるテスト得点の「信頼性」があまり高くない場合にはそれによって、観測される相関係数が低めになるということもあります。観測される相関があまり高い値が得られなければ、思考力を測っているとは言えないとせざるを得ないこともあるわけです。記述式などの問題は、採点者の信頼性の問題なども含まれることもあって、そ

ういう妥当性検証の場合に高い相関が得られにくいということがあり得ますので、思考力を測るために導入された問題でありながら、思考力テストなどとはそれほど大きな関係性はないといった結果が出てくるかもしれません。もちろんそれで思考力を測っていないとは言えないんですけども、逆に実証的データからは思考力を測っているとも言えないという結論しか出てこないということはあるかもしれないわけです。

そういう難しさはあるわけですが、入試研究自体をしっかり積み重ねていくことはとても大切なことだと思っています。入試研究をしっかりと確立していきませんか、倉元先生の話がありましたけれども、臨教審の頃から何度も同じように入試改革の話が繰り返されて、今後もまた10年後、20年後に同じ入試改革議論が繰り返し出てくることになってしまうのではないかと思います。今回の改革時に、入試研究をしっかりと導入し、普及させて、その結果を広く共有していくことで、同じところを繰り返すことなく、新しい課題を浮き彫りにして、次の入試改革ではこういう点を新たに改善していきましょうというように前進していけるのではないかと思います。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございました、南風原先生。

南風原朝和教授：

ちょっと関連して、先ほどもちょっと出たと思うんですけども、数ヵ月勉強して伸びるような学力は、本物の学力ではないという話は、結構文科省の方も言っていますけれども、全然そんなことはないと思うんですね。変化しないのが本当の学力というのも変な話です。だったら何を努力したらいいのかっていうことになってくるわけです。個別の知識ではなくて思考力というときには、いわば知能検査に近いようなものも想定していると思うのですが、これは

戦後の入試改革で大失敗した経験があります。入試の歴史的研究も、倉元先生やその共同研究者の方たちがなさっていますが、教科的なことから外れた知能検査のようなものは結局どの大学も採用しないでつぶれていったという歴史があるわけですね。それと同じことが近々、また見られるような気がしないでもないというか。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございます。入試研究を進めてきたという点では倉元先生はまさに入試研究者だと思うのですが、倉元先生にこういう質問があります。これまでの様々な入試試験の改革の中で、受験生の視点というのが実はなかったように思える。この点について先生が最後、受験生の視点から未来を考えるというふうに書いてありましたが、この点についてもう少し具体的に教えていただきたいというご質問があります。

倉元直樹教授：

講演の中の最後の話は単純で、大きな改革が起きたときに混乱はあるのだけでも、しばらくたつと収まるだろう、ということです。ただ、混乱の時に当たってしまった受験生は、やっぱりそれを一生引きずるわけですよ。それが何を起こすかっていうと、例えば、いくつになっても、「やはり入試というのは良くない制度だから変えなければいけない」と考える。この悪循環です。

先生の視点で言えば、前の学年にはこういうふうに教えていたけれども、次の学年には全く別のことを教えなければいけない。日本の歴史の中で大きな出来事を1回経験していると思うのです。戦争に負けた時に教科書に墨を塗った、という話を私の年代の親の世代からは伝え聞いているわけですが、教育としてあって良いことか考えたいと思うのです。変えるべきことがあるなら、変えていきましょう。しかし、急

にやるのではなくて、少しずつ。

同じことの繰り返しになってしまいますけれども、そういう意味です。受験生の視点から、という意味でいえば、・・・共通試験についてはよく分からないのですが、・・・我々、東北大学に関していえば、結構、データを取って、いろいろなところに、少しずつ手を入れてきました。東北大学の、特に AO 入試には反映されています。総長も最初の挨拶でお話してくださったように、私どもは改革をずっとやってきたし、今後もそれを続けていく。受験生の立場からの改革という意味では、そういうやり方もあるかな、と考えています。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございます。まだ少しだけ残り時間がありますが、おそらく寄せられた質問の中で一番多くいただいていたまだ扱っていないのは、本当に新共通試験は実施されるのですかという点です。この質問が実は一番多かった。おそらくここにいらっしゃる高校の関係者の視点を考えると、あるいは受験生の視点を考えるとこの答えを今日は聞きに来ている。こういうことなのかもしれません。今日先生方のお話を聞いた上で、新共通試験の導入は、やはり少し問題があるのではないかと。ここで少し、ブレーキをかけてみてはどうか。また改めてセンター試験というものを見直してみてもどうかというメッセージを少なくとも受け取られたのではないのでしょうか。もしかしたら参加者の中では、本日の議論は意外な内容であったと受け止められている方もいるかもしれません。ただ、今日の報告を聞いても、この新テストが本当に実際にやるのかどうかは分からなかった。この不安はぬぐえなかった。新テストが実施されるのかされないのか全く不透明な現状があり、まさに混乱している。この状況をどうにかしてほしいと。やるならやって、やらないならやらないで答えを出していただきたいということがこの会場に御集りの方の多くの声なんだと思

います。この点について、先生方のお考え、話せる範囲で構いません。教えていただけたらというふうに思います。では、南風原先生からお願いしてよいでしょうか。ざっくばらんをお願いします。

南風原朝和教授：

終始ざっくばらんにやっていますけれども、現状を見ていると先ほど言いましたように、議論ではなかなか変わらない。最初に言ったことは少しでも残すという、全く国民が望んでいない努力をするわけですね。そうこうしているうちに事務方の担当者は異動してしまって、新しい人が入ってくる。一時的にその部署にいた人たちがそれなりの仕事をして引き継いでいく仕組み見て、全く傍観者的に言えば、やる方向は変わらないのだろうというふうに、非常に悲観的に思うわけです。しかし、今日ここで、本当にやるんですかという声がたくさん出たということが重要な事実じゃないかなと思うのです。そういったことを伝えて共有していくということが、この何人かの人が言うだけでは全然力にはならないので、広く疑問は疑問として、良いことは良いこととして広げていく。そのためにも何度も繰り返しますけれども、議論が見えないということは非常に怖いんですね。このように水面下で進めてはいけないというふうに思います。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございます。倉元先生。

倉元直樹教授：

個別の大学に立場から言えば、実施するかしないかは、私たちが決めることではない。私たちは決められた条件の中で最善を尽くした時、何ができるのかを考えることになります。その時に、・・・南風原先生のご講演の中でご発言があったかと思いますが、・・・大学の主体性が非常に大事だと思います。実施された試験が

教育に良くない、自分たちのために良くないと思えば、使わない自由があることです。この点は非常に大事なことはないかと思います。

ただ、東北大学だけがそういう判断をしてもあまり意味がない。隣におられます南風原先生の東京大学。それから、名古屋大学や北海道大学からも参加者がお見えになっていることを知っています。受験生の立場から見た時、受験行動を決める上で、志望が変わっていくケースもありますよね。最初に思った大学と違う大学を受ける時、全く違う苦勞をさせられるのでは、受験生にとっては大変な不利益になる。個別の大学がそれぞれの自分たちのことを考えながら、ゆるやかに連携を取っていくこと、状況によって判断していくことが大事なのではないかと思います。

最後に余計なことを云えば、例えば、記述式テストを導入して、採点が見事にシステム化されて期待通りに採点できたとしても、共通1次のことを考えると、どんな批判を受けるか分からない。そういう覚悟をしていただきたいと思います。もし、うまく行くとすれば、人数を絞ることではないかなと思うのです。共通試験で記述式が必要だという受験層がいるとすれば、50万人の試験という形で実現をするのは不可能だと思います。1万人とか、数千人いう単位であれば、個人的には現実的な処理も可能かもしれないと思う次第です。以上です。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございました。大塚先生お話あれば。

大塚雄作試験・研究統括官：

私の立場からですと、今の時点では、記述式は「やる」としか言いようがないですね。1年半前の暮れに出された中教審答申でも、あるいはその前の高大接続特別部会の議論の時から、私にとっては、難しい課題が次々に出されてきていて、ある所で、かぐや姫に貴公子たちが

次々に求婚した際に、かぐや姫が無理難題を突きつけてそれを断った話がありますが、その貴公子の心境ということをやったことがあります。その頃は、例えば、複数回の受験と言うことが言われておりまして、その場合、複数回の試験を同程度の難易度にするために、1科目について何万題かの問題を収集して、しかもそれらは予備テストして、項目反応理論（IRT）を適用するのであれば、事前にいわゆる項目パラメータを収集しておく必要があるわけです。それを、日本の試験風土のなかでどうやったら実行できるのか、つまり、試験問題の内容が漏洩することなく、そういったことを実現するのはどうしたらよいのか、途方に暮れる部分がありました。

その点で、南風原先生が高大接続改革システム会議の委員としていろいろと意見を言ってくれたおかげで、無理難題の部分に「検討する」という言葉が入ってくれたなと思います。国際的にも、入試の複数回受験や CBT（computer based testing）などの動きも増えてきているのは現実です。先日も、テレビを通じて、今の子供達は鉛筆を持つ機会が減って筆圧が弱く、4Bの鉛筆を使うことが増えているということを知りましたが、センター試験のマークシートはHBかFやHといった鉛筆で塗るように求めたりもするなか、文房具屋でそのレベルの鉛筆は置いてないところも出てきているということもあるらしく、これはそのうち、子どもたちはスマホのようなイメージと言ったらいいのでしょうか、いずれにしてもコンピュータで入出力をやるようになる時代はそこまで来ていて、入試でも早晚 CBT をやらざるを得ないだろうと私も認識しています。しかし、そのための研究開発はどうしても必要になるわけで、時間を決められて、それまでにそういうシステムを導入するということが求められるのはかなり厳しい話です。50万人受験生がいた時にどういうトラブルが起こるのかということもきちんと踏まえて、それに対するリス

クマネジメントも見越した上で提案していく必要があります。

CBT が入ってくれば、記述式についても、デジタル的に自由記述の回答を処理することも容易になりますので、記述式を含めたパフォーマンス型の試験も必然的に導入されていくことになるでしょう。デジタル化されたテキストの自動採点に関する研究者は、入試センターにも現におりますし、我々もそういう方向性はしっかりと見ているのですが、2020 年度から開始するというように期限を付けられると、それはかなりしんどい所があります。

そういう意味で、今進んでいる入試改革もいろいろな問題を抱えているという認識が私にありますので、先ほどもお願いしましたように、皆様方のそれぞれのお立場からのご助言、あるいはご理解、ご協力がいただけるとありがたいなと思っている次第です。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございました。駒形先生、高校という立場から、何かお話がございしますか。

駒形一路教諭：

倉元先生のお話にもありましたが、受験者の立場になってというか、この先、その試験が導入された後にどうなのかっていうことは考えていないといけない。村上春樹の小説にあったと思うのですが、「想像力が働かない所に責任は生じない」ので、やっぱりこのテストが導入された時に世の中どういう混乱が起るのかっていうことにきちっと思いをいたすことが大事なことなんじゃないかなと思います。そうしてほしいなと思います。個別の大学の自由さ、自由度っていうお話もありましたけども、高校としては、いい入試問題を出してくれる、しっかり作って出題してくれる、そういう大学を受験することを勧めたいと思います。受験者の保護者の立場というの、先ほど言った次第で、私は国語の教員ですが、うちのは二人とも、国

語の良問を出してくれる大学を受験してくれた、そのことは本当に国語の教員をやっているお父さんとしては、指導のやり甲斐もありましたし、よくぞそういう大学を選んでくれたなと思っています。本当に大学の入試問題は、受験者に送る最良のメッセージですので、高校の教員としては、新テストを使う使わないは置いて、良問を作り続けてくれる大学を、個別試験で良い出題をしてくれる大学を勧めようと思います。

田中光晴講師（討議司会）：

ありがとうございます。大変申し訳ないですが時間となってしまいました。ここでどうしてもというフロアに投げかける時間もほとんどなくなってきたことをお詫び申し上げますが、ここでどうしてもという方、もしよければご質問等お願いしたいと思うのですがいかがでしょうか。それでは終了後、個別で先生方を捕まえて聞いていただくという形にさせていただきます。先生方よろしく願いいたします。

石井光夫教授（討議司会）：

それでは予定した時間になりましたので、この辺で討議を終えたいと思います。今日は、新テスト。特に学力とかセンター試験に絡む新テストに焦点をあてて、まだ課題があるなどあらためて先生方に教えていただきました。今日ご教壇の中で全部とは言いませんけれども、いくつかこれからクリアにするべき問題、課題というのが浮かび上がってきたかと思います。これから問題提起としていろんなところに届いていくといいなというふうに主催者としては願っているところです。それでは今日は長時間お付き合いくださいまして、ありがとうございました。今一度パネリストの先生方に拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

（拍手）

閉 会 の 辞

東北大学理事

花輪 公雄

宮本友弘准教授（司会）：

これから閉会の辞に移らせていただきます。
主催者を代表して、東北大学理事花輪公雄より
閉会のごあいさつを申し上げます。

花輪公雄理事：

みなさん、長時間のご議論ありがとうございました。
特に講演をなさってくださった東京大学南風原先生、本学倉元先生、それから現状報告ということで報告していただきました大塚先生、駒形先生、どうもありがとうございます。
最後のごあいさつということで何か総括めいたことをお話しできればいいんですけども、とても力が足りませんので、感じたことをふたつお話しさせていただきます。

ひとつは、これは南風原先生もご指摘したことですけれども、共通にやるテストと個別にやるテストを我々持っているわけです。その関係を議論しないままに、共通テストだけ議論してもしようがないんじゃないかというのを、非常に強く感じます。共通テストを議論して、終わってからじゃあ個別テストはというのでは遅いんですね。最近文部科学省から通知がきたのですが、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー、各大学きっちりと議論して作って、来年4月まで公表してくださいというものです。各大学に求めたということは、各大学のポリシーがそれぞれ特性があっていいんだと。当たり前ですね。これは本当に当たりの前のことなんですけれども、しっかりそこを学内で議論して公表してください。アドミッションポリシーというのは、まさに入試と密接に関係しているわけですね。ということは各大学に個別学力試験、個別の試験を各大学で制度設計する。であれば、必ず共通試験と絡んでくるはずですね。そのところが、何か私は見えないな、ということでまどろっこしく思い



ます。先ほどもパネルディスカッションの方でありましたように、個別試験と共通試験との調和を考えて議論すべきかというのがひとつです。

ふたつ目は、これも先ほどと同じなんですが、昨年の中学1年生、今新学期に入りましたから、今中学2年生が最初の受験者になるんですね。もうその中学2年生、それから、保護者の方々、さらには中学校の先生、高校の先生も、今後どういうふうになるのかということを見ているわけですね。さらに南風原先生の方から議論をオープンにして、皆に見える形でやっていくべきだという発言がありましたけれども、やはりそういう人たちが、変な考えにならないように、疑心暗鬼にならないようにきちんと我々は情報を開示して、一步一步進んでいく姿を見せるべきであると。本当に今の中学2年生が高校3年になった時に、できるかどうかというのはいちばん怪しいのではないかと。個人的な意見ですけど、もうその約束ははずして、充分議論を成立させてからもう一度、タイミングを提案すべきではないかなというふうに思いました。

以上、お聞きしていて感じたことをふたつ申し上げました。今日のこの議論の今後、少しでも役に立てるのであれば我々主催者側としては非常に嬉しいことであります。ということでこのフォーラムを締めさせていただきます。本日はご参加どうもありがとうございました。

(拍手)

宮本友弘准教授（司会）：

以上を持ちまして本日のフォーラムを終了いたします。最後までご参加いただきありがとうございました。アンケートへのご協力をよろしくお願い申し上げます。お忘れ物ないようお確かめの上お気をつけてお帰りください。ありがとうございました。

講評

講評 1：第 24 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

山形県立東桜学館高等学校

教諭 延沢 恵理子

1. はじめに

本フォーラムでは、「大学入試の共通試験」について、「センター試験の来し方」を振り返り、「新テストの行く末」を展望する基調講演があり、センター試験を運営する側と受験する側の現状報告があった。認識不足を痛感させられることも多く、ともすれば、自分の持ち場で精一杯になりがちな多忙な日常の中で、私たち自身が主体的に考え、交流し、より良い発信をしていくことの重要性を再確認する機会となった。

本講評では、それぞれの発表のまとめは最小限に留め、お話を受けての個人的な気づきや考えについて、知識や認識の不足もあるかと思うが、思うところを正直に記す。

2. 基調講演

2.1 基調講演 1 「共通試験と個別試験に求められるもの—測定論の観点から—」

南風原朝和氏（東京大学）

（1）波及効果への配慮

南風原氏によると、共通試験の意義は、①「個々の大学の人的負担を減らして効率化するとともに高品質の評価を実現すること」、②「共通に適用される評価軸を示すことで、良い波及効果をもたらすこと」にあるという。この発言から、共通試験に関する現在の議論には、「波及効果」という観点が欠けているのではないかと考えさせられた。大学入試が変われば、当然高校現場に激震が走る。特に共通試験は進学校ではほとんどの生徒のニーズとなるため、授業は共通試験に対応できることを想定して実施されることになる。共通試験の内容は、高校の授業に対して「良い波及効果」のあるものであるべきだ。

「共通試験への対応」と書くと、高校教師を

やったことがない人は「マークシート対応のための薄っぺらい学習」（そういうものが実在するのかは別として）を想像するようだが、少なくとも現在のセンター試験は「丸暗記」や「テクニック」では対応できないし、「薄っぺらい学習」で解けるような問題は出題されていない。もちろん「完璧な問題」など存在するはずもなく、指摘されるべき内容も含んではいる。しかし、試験内容は、20 年以上もさまざまな意見に晒されて研磨されてきており、内容全体を批判するには当たらない。良問はそれだけで生徒に深い思考をさせる。私自身、センター試験の問題はもちろん、ここ数年で東京大学をはじめとする難関個別大学の入試問題を 800 題以上繰り返し解いており、入試問題が生徒のみならず自分の思考を深めてくれる体験をした。「波及効果」という観点で考えたとき、現行の共通試験である「センター試験」の問題自体には少なくとも「生徒を思考に向かわせる」良い波及効果があると考えられる。

新共通試験では①「思考力・判断力・表現力を中心に評価する問題」②「記述式問題」が導入される見込みだが、例えば極端な話ではあるが、①で「短時間の発想力勝負のような問題で差のつく入試になったら真面目な努力が評価されなくなるので、真面目に勉強するのが馬鹿馬鹿しくなる」とか、②で「記述式に対応するのはきついから、最初から捨て問題にする」というような「負の波及効果」がないように考慮する必要がある。

（2）新テスト設計についての共通認識の欠如

南風原氏の指摘する、今回の入試改革の大きな問題点は、「共通試験の設計についての共通認識」が欠如したまま議論された点である。氏は測定論の観点から、大学入学希望者等学力評価テストは受験者の学力範囲が広いため、広範

囲で学力を識別できるだけの「情報」が必要であり、その「情報」を得るために、難易度の高い項目から低い項目まで万遍なく含み、できるだけ多くの項目でテストを構成する必要があると指摘している。しかし、「思考力・判断力・表現力」を評価する問題や「複数の情報を組み合わせる等」のマークシート式問題を出題すれば難易度が上がり、記述式を導入すれば解答時間確保のため項目数が減少し、共に十分な情報が得られない可能性があるという。全てを測る万能なテストは存在せず、新テストの設計にあたっては、何を優先して測るべきなのかの議論が前提となるとのことだった。

私は「明治以来の大改革」の名の下に、「文科省」で行われている「高大接続システム会議」の議論なのだから、各々の専門を生かした当代の頭脳が集結し、適正に意見交換されているものと思っていた。一番大きな影響を受ける高校を知るメンバーは3人だけという会議もどうかと思うが、料理をつくるのに、料理の仕方が分かっていない状況で何を「最終まとめ」したのだろう。分業化・専門化の進んだ社会において、「専門家に丸投げすること」の危険性を図らずも痛感させられた。今の日本社会で、教育を経験しない人間はほとんどいない。したがって、専門家でもないのに、教育については誰もが一家言持っている。そのため、現実に着地しない理想、時に被害妄想、印象で語られた言葉が一人歩きしやすい。しかし、一方で、専門家に閉じられた世界ではなく、一般に対話の場が創出される可能性をもっているとも言える。

「知識偏重の『1点刻み』の弊害を改善し」という文言自体は、最終報告前に削除されているものの、「1点刻みの評価」は当初かなり悪者にされた。しかし、南風原氏は測定論の観点から「1点刻みの方が、段階別評価よりも情報量が多い」ことを指摘している。段階ではなく素点の情報を保持しないと情報量が減少し、段階の分け方に恣意性が生じるため、個別大学での利用はできないという。

南風原氏のお話は、「机上の空論」的な議論に、専門家の力を借りて、エビデンスベースで判断することの重要性を感じさせてくれると共に、専門家への過度な信用をせずに、自らも現場を知る者として主体的に発言をしていくことの重要性にも気づかせてくれた。

2.2 「大学入試制度改革の論理に迫る—センター試験『廃止』の理由—」

倉元直樹氏（東北大学）

（1）制度の複雑さを生んだもの

倉元氏は、センター試験の歴史を振り返ることで、新テストのありようを俯瞰する視点を与えてくれた。「共通一次」から「センター試験」への制度設計上の大きな転換が、受験者の多様化に対応する「ア・ラ・カルト方式」の導入であったという。それまで、国公立大学志願者に限定されていた共通試験受験者が、私大・短大に拡大された。思うに、平成25年の第四次教育再生実行会議で問題視された「制度の複雑さ」は、この「多様化への対応」に端を発している。では、なぜ多くの私大・短大が参入したのかと言えば、優秀な学生確保のための受験機会を増やす目的に加え、大学側が作題の負担を軽減するためだったのではないか。自力での作題能力のない大学の入試を維持するために複雑化したのに、中教審の議論の中で、「制度の複雑さ」から潜在的なマークシート批判を背景に「センター試験の測定内容」へと論点がすり替わり、センター試験廃止が提言されたとしたら、作題能力のある大学も大学入試センターもとんだ「とぼっちり」である。「共通試験」はそもそも「共通＝最大公約数」であり、その範囲における限定的な試験であるはずだ。「限定的・画一的なもの」から「多様なもの」への志向は、一見、より自由な個人尊重の方向への潮流であり、普遍的な「正解」に見える。しかし、現行のように配慮を要する受験生への対応もなされ、受験機会が均等な状況であれば十分に個を「尊重」していると言えるのではないか。大学

は国立大学だけではないのだから、志願者のための「共通」試験を「科目を減らして受験したい多様な個人」に合わせる必要はないのではないか。多様性を測るものさしは各大学のアドミッションポリシーに応じて個別試験で準備すればよいのではないかと。そうすれば、我々高校教員も生徒の個性に応じた進路指導をし、大学でのミスマッチを防ぐこともできるように思う。中には、ある教科に特別に秀でた生徒もいないのではないだろうが、20年以上高校教師をやってきて感じるのは、それはかなりの特殊ケースだということだ。「とんがった人材」づくりに邁進するあまり、日本社会を形成する優秀な分厚い中間層をないがしろにしては、日本社会に未来はない。「変化の激しい社会への対応」を言うのなら、5教科7科目をしっかりと勉強して力をつけることがもっと重要視されなければならないのではないかと。その上にある個性にしか、世界を相手に活躍できる人材とはならないと思うのだが。

（２）小・中の教育は改善しているのか

高大接続答申の立脚点である「小・中の教育は改善。高校・大学は知識の暗記・再生に終始。高大教育を変えろ。」という現状認識は果たして正しいのかという問いには、同感である。高校では、思ったことはすぐ口にするが内容が伴わない生徒の増加に苦慮しており、少なくとも進学校にいる限り、小・中の教育改善の実感はない。意見を交流させるとよくしゃべるが、作文させると基礎的な漢字も書けず、文章も書き慣れていない。活動型の学習は、下位の生徒が学びからこぼれ落ちない良さはあるが、上位者伸長には不向きだと感じる。上位者は下位者を教えれば定着するとの意見もあるようだが、その根拠とされがちな「ラーニングピラミッド」自体に明確な根拠は存在しない。私自身は、自分の分かっていることを他人に教えることよりも、新しいことをもっと知りたいと思うし、その方がワクワクする。年々上位者が減少しているデータを見ると、単に入学者全体の数の減

少のみならず、義務教育段階では上位者を育成する場がないのだと思われる。昨年、小・中・高連携の国語の研究会があり、長年の誤解が氷解した。私はこれまで、小中学校ではなぜ読解の技術を教えないのかと不満に思ってきたが、小学2年生の授業を見て、経験の少ない子どもでも腑に落ちるようにする工夫が必要であることを知った。興味を持たせ、達成感を持てるよう導き、懇切丁寧な指導であった。だから、読解の技術にまで到達できなかったのだ。小中の先生方が、丁寧に経験を積みさせてくれているおかげで、何とか高校で読解指導ができるのかもしれない。それを考えると、高校や大学でも「興味・関心」を持たせることを重視していたら、「習得」や「思考の深化」に向かう時間が持てないようにも思う。小中は対象が幼いから、そうしないと学習が成り立たないのだ。発達段階が異なるのに、更には、志望する未来も多様化するのに、高校・大学も同様と考えること自体に疑問を感じる。時間は有限である。何かを重点化すれば、何かを削らなければならない。「学力観自体が変わるのだ」と言われれば、きっとそうなのだろうが、「古い学力観」で育った私たち自身も30年前にはなかったものに溢れた世界で何とか自己修正しながら生きている。その「新しい学力観」自体もいずれ古くなるときが来る。いつでも自己修正しながら生きられる力は、自分の中に蓄積されたものからしか生じないはずだ。暗記・再生もできなくて、活用・創造はできるものなのだろうか。

（３）結果からの影響を出発点に

「理念からの議論は収束しにくい。結果からの影響を出発点として議論すべき。」という倉元氏のご発言は、現場不在のままの議論を地に足をつけたものにして欲しいという我々高校教員の願いを代弁したものだ。2.1（１）でも書いたが、南風原氏のいう「波及効果」に充分配慮が必要だ。現役の公立高校教員であり、中教審生涯学習分科会学校地域協働部会の浦崎太郎委員が、ある講演の中で、「地域の教育力

の低下によって、子ども達の経験が不足し、学校教育が学習の動機付けを担う必要が生じ、学習を深める時間が不足したまま活用を求められている。」と述べた。現状でさえ、そうなのだから、問題の難度が上がれば「習得」自体が疎かになりかねない。センター試験については、確かに理想を言えば不十分な点はあるだろうが、生徒に良質な思考をさせる良問が多いと思う。これを批判する人たちは、全ての問題を解いて発言しているのだろうか。解いた上でも「知識しか測っていない」と言えるのだろうか。センター試験問題も進化し続けている。会議に出るのは、有識者と呼ばれる方々である。共通試験の多大な影響に思いを馳せることなく、自分の受験した古い問題についての印象批評と選択式のマークシートへの偏見で発言したりはしていないと信じたい。我々にとっては毎年のことだが、受験生にとっては人生にたった一度の18歳での受験である。そして、少なからず受験の設計によって高校3年間で学ぶ内容が変わってしまう。昨年度のセンター試験志願者数は約56万人である。18歳人口の約半数に影響するのみならず、2, 30年後の日本社会を牽引する層への影響として適当であるかを考えるべきなのではないか。「答えのない問題について考えること」は今に始まったことではない。「答えのある問題」についてさえ十分に思考できない人間が「答えのない問題」に太刀打ちできるとは到底思えない。昨年の東京大学の国語の第一問は「反知性主義」についての評論が出題された。東大が、このメッセージを本当に届けたいのは受験生ではないのかもしれない。

3. 現状報告

3.1 「センター試験運営の実際と課題」

大塚雄作氏（大学入試センター）

（1）実施主体は「大学」

大塚氏は、センター試験にあたっては問題作成 OB 委員会や高校教育関係者等の多くの目

をくぐり抜けた「良問」だけが出題され、配慮を要する受験生への対応も検討され、ミスが許されない状況の中、本試・追試・緊急対応試験と3セット準備されていると述べた。私は今回初めて、大学入試センターの仕事内容に踏み込んだお話を伺ったが、理想が語られることの多い教育の場で、「現実における最適解」を探し続けてきた、入試センターのご苦労と並々ならぬ努力に敬意を表したいと心から思った。そもそも各大学が適正な選抜のできる状況にあれば、センター試験は必要ないのではないか。実施を複雑にしているのは選抜力のない大学の存在が大きいのではないか。「実施主体は大学」という意識を持っている大学はどの程度あるのか。こういう目で大学や入試を眺めたことはなかったが、「既存のもの」という固定観念を外すと、生徒に勧めるべき大学の姿が見えてくるように思われた。

（2）思考力の測定

お話を伺いながら、「なぜマークシートではダメなのか」という問いが沸々と湧いた。思考力の測定を言うなら、CBTも同様の問題が生じることは容易に想像できる。また、一問にかける時間も、マークシートよりも短時間で解答を求められることになるのではないか。受験生にとって、時間を短くされることは間違いなく不利である。時間短縮による、センター試験のボリュームゾーンの生徒達への影響は測り知れない。それこそ「心理的圧迫」は増大するはずだ。そして、その時間内に瞬発力で解答する力を「思考力」と呼ぶのかどうか。私には分からない。記述式は採点可能な文字数に制限され、採点者の負担もコストも増加する。記述には時間を要するため、下手をすると、白紙答案も大いに考えられ、選抜に必要な情報量も妥当性も担保できない可能性もある。共通テストで測る力と個別テストで測る力を分け、その大学が求める人材を得られる方法で思考力を問う現在の方法と比べて、受験生にとって、大学にとって、日本社会にとって、より良い方法にな

り得るのだろうか. 新しさは正しさを纏って近づいてくるが, 「新しさ=正しさ」ではない. 続いてきたことの価値にも目を向け, 多くの専門家たちの継続的な努力を水泡に帰すことのないよう, 変えるべき点と維持すべき点を熟考する必要があるのではないか.

3.2 「センター試験を受け止めて」

駒形一路氏 (静岡県立掛川西高等学校)

(1) 一発勝負? 1 点刻み? 生徒はわかっている

同じ高校教員として, 共感するところが多かった. 生徒たちは, 部活動や友人関係同様に, センター試験に対応するための模試や演習を通じて, 学習面においても, 自分の思考の偏向性や性格, 癖に気づき, 自己理解を深めていく.

「一発勝負の心理的圧迫」もなくはないだろうが, それ以上に得られるものの方が大きい. 現代の日本社会では, 人生において自分と本気で向き合うチャンスはそうない. 進学校の教師は, 高校生が受験を通して, 自分の弱点と向き合い, 仲間刺激を受け, 教師や保護者の支援によって感謝を知り, 人間的に大きく成長を遂げることを実感として知っている. 思えば, 我々が高校生の頃は高校の先生は良い意味で何もしてくれなかった. だからこそ, 自分で考え, 自分で失敗し, 自己修正してきたように思える. 実際に, 教師になってみると, 当時の先生方が「意図的に」そういう指導をしてくださったことが痛いほど分かる. 世間では, 子どもに肉体的・精神的負荷をかけることを良しとしない風潮があるが, 適度な負荷が子どもを成長させることは教師であれば誰もが経験的に知っていることだ. 「部活動をやっていれば大丈夫」という言説も目立つが, 部活動は自分の好きなことなので, 頑張れて当然である. 好きではないことを含む受験勉強を頑張って乗り越える経験が, 先の見えない世の中を渡っていく人間的な下地になる. 大学生になった卒業生が「あのとき, あれだけ頑張れたんだから」と言うのを聞

く度に, 全力での受験は現代日本の大人になるための通過儀礼のようにも思ってきた. 一生懸命自分と向き合う経験をしないで社会に出てしまうことで, 自己理解が先送りされ, 適応できないままの者もいる. 中には, 学校というものの恩恵を受ける機会が少なく, 自力で何でもできたという人もいるのかもしれないが, 多くの生徒は他者と関わることで得られる刺激を力に変えて学習に励み, 一人では越えられない山に挑んでいく. 「学力よりも人間力」という言説が巷に溢れているが, 私たちが目指すのは, 「学力も人間力も」である. 受験による自己理解を可能にし, 受験生を成長させる「共通試験」であってほしい.

(2) 段階的な変化を

駒形氏は一保護者として, 二人のお子さんの大学入試を振り返り, 一部の入試変更でも不安だったことを明かした. メディアを制するものは「政治」を制する時代である. メディア映える派手なパフォーマンスが流行りである. 「センター試験廃止」「明治以来の大改革」「CBT」. 刺激的な言葉が並ぶが, 改革の過渡期で受験を迎える受験生たちはどうなるのだろう.

グローバル化が進むにつれて, 日本文化の中で育つ日本人の若者を頼りないものと感じる企業人の声が大ききようであるが, 中身の無い英語を使って空気を読まずに主張できる人材を輩出することに躍起になるよりも, グローバル化の中で日本人としてどう生きるかを熟慮する必要性を感じる. 日本人が科学分野でノーベル賞を受賞できる背景には, 日本語で科学的思考ができる翻訳の力と, 基礎研究分野での細やかで粘り強い取組がある. 母語で思考する以上の思考を他言語でできるレベルに達するのは全体の何%程度であろうか. 日本人の多くが英語で思考するのと, 自動翻訳機が開発されるのとどちらが先だろう.

4. 討議

南風原氏の「審議会は意見を言い合う会では

ないので、言って終わり。何か言えば、人が変わるだけ。」という発言には衝撃を受けた。『失敗の本質』と全く同類型である。誰も責任を取らないのに、都合の悪い意見は聞かず、先に結論ありきで暴走する。個々人は誠実に仕事をしているのかもしれないが、「ダイバーシティの世の中を生き抜くために」と掲げるその場が、多様な意見を排除する場であるとしたら極めて遺憾である。その中で、良問を教材化し、入試研究を更に進める立場にある大塚氏の「質の担保に努めたい」という発言は心強かった。その仕事に少しでも協力するために、私たち高校教員は、生徒の実態を踏まえ、作問研究に努め、入試センターやワーキンググループ、大学に発信していく必要があるとも感じた。そのために、私たち自身も、学び続けなければならない。倉元氏の「入試問題は大学からのメッセージ。大学の作題能力が求められている。」「大学が主体性を発揮すべき。共通試験を使わない自由はある。」「受験生の視点から考えるべき」「変えるべきところがあれば変えるべきだが、急激に変えるべきではない」との発言は、高校現場と大学をよく知る立場からのエールに聞こえた。私たちには、倉本氏のような気概のある大学人のサポートが必要である。高校現場の状況を伝え、入試問題や指導についても意見交換し、一緒により良い生徒・学生の育成を目指すことができれば、本当の意味での高大接続が実現できる。駒形氏の「良問を出してくれる大学を受験させたい」という一言は、全国の高校教員の思いに一致するはずだ。

5. おわりに

思うに、共通試験の役割は、「大学の求める最大公約数の能力」と「高校で育成する能力」を繋ぐ評価軸を明瞭にすることにある。最大公約数なのだから、試験内容には限界がある。それを踏まえて、無理のない設計をし、高校現場に良い教育効果をもたらすよう議論を尽くすべきと考える。「多面的な評価は、個別大学の

アドミッションポリシーに任せることで、結果的に実現される形が望ましい」という南風原氏の発言には深く共感した。多面的評価の名の下に、推薦枠拡大が話題になるが、より楽に入れる入試になるなら私は生徒に薦めない。大学入学後の学力が担保されている上で、自己と向き合い、自己理解を深め、成長できる入試でなければ、本当の意味でその子のためにはならない。大学側には、「学力不問」や「推薦全入」の易きに流れることのないようくれぐれもお願いしたい。そういう大学には、大事な生徒を私は決して送らない。

以前、「教育改革の理念に目を向けるべきで、テスト理論の話は瑣末なことだ」という発言を聞いた。確かに、現在存在しない未来を、既存のルールで考えることはできない。壮大な理念の前には、現実には瑣末なものに見えることもある。しかし、私たちは現実に着地せずには生きられない。理論的に設計できない試験をどうやって実現するのだろうか。実施可能性があるだけの話は、技術的な開発が済んで十分に試されたところで実施すればよいはずだ。拙速な改革の一番の被害者は、受験生である。抜本的な改革を、というなら、入試制度を変える前に、保護者を含めた受験やキャリアに関する意識改革が必要だということも申し添えたい。

本フォーラムに参加し、大学人、入試センター、高校現場それぞれの困惑と苦悩が感じられた。以前、倉元氏が「間違っただけを殴らないようにしましょう」と言っていた意味がよく分かった。こうして対話を続け、相互理解に努めることで、それぞれにできることが見えてくるということもある。私たちは、権威や専門家に弱く、つい無批判に甘受してしまいがちだ。しかし、分からないなりに、思いを語り、歩み寄ることで、見えてくる地平がある。私たち自身が、多様な他者の中での発信力をもつことが第一歩なのかもしれない。

講評 2：第 24 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

秋田県立秋田高等学校
教諭 金岡 直人

1. はじめに

地方の一高校教員に過ぎない私のような者にとっても、平成 28 年 3 月 31 日に発表された高大接続システム改革会議「最終報告」、とりわけその中の「大学入学者選抜改革（個別大学における入学者選抜改革，「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の導入）」がどのような形になるかは大きな関心事であった。しかし「最終報告」を読んでも、参考資料を読んでも、私の読解力に問題があることが原因であろうが、どうにも「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」（以下「新テスト」と呼称する）の“姿”が見えてこなかった……

今回のフォーラムに参加した高校の教員の中には私と同様の「新テスト」に対する“ぼんやりとした不安”を抱き、その解消を期して参加された方も少なくなかったのではないかと拝察する。フォーラムを通してその“不安”がどうなったかは、この雑文の最後に記すこととするが、このような時期に本フォーラムに参加させていただくことができたのは、私にとって大きな経験であった。関係者の方々に感謝申し上げます。

2. 基調講演

2.1 共通試験と個別試験に求められるもの—測定論の観点から—

東京大学理事・副学長 南風原 朝和 氏

講演の内容は本冊子に詳細が掲載されているはずなので、感想を述べる。

正直に言って、私はこれまで「試験」というものの意義や目的等についてきちんと考えたことがなかった（にも関わらず、様々な種類の「試験」を作り、実施してきたのだから、恥ずべきことだが、事実なので仕方ない）。なので、

今回の南風原先生の講演はとても新鮮で、本当に勉強になった。フォーラム参加以前からわだかまりのように心中にあった「段階別表示」への違和感、「条件付記述式」や「思考力・判断力・表現力を中心に評価する問題」への疑問等が詳しく解説され、さらに共通試験の意義や測定精度、情報量についてのお話も聞くことができた。いずれもテスト理論の専門的な観点からの科学的知見に基づいたもので、とても参考になった。と同時に、南風原先生が指摘された様々な「懸念」がある中で「新テスト」実施へ向けて動き出している現状に対する私の不安はフォーラム参加前よりもさらに大きくなってしまったと言える。

2.2 大学入試制度改革の論理に迫る—センター試験「廃止」の理由—

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

倉元 直樹 氏

倉元先生のお話は以前にも何度かお聴きし、そのたびに様々な情報を得、勉強させて頂いていたが、今回も大変参考になるお話であった。

特に今回の副題である「センター試験「廃止」の理由」について順を追って丁寧に解説していただけたのは、良かった。

制度というものは変わっていくものであることは確かなので、センター試験がなくなること自体はいずれ起こり得ることなのだが、倉元先生のお話にあった、共通 1 次試験の導入は約 8 年をかけて検討した、というようなことと比べると今回の「入学者選抜改革」のスピードの早さが際立っているように思えてならない。また、センター試験「廃止」議論のきっかけが平成 24 年度入試の混乱にあり、複雑化するセンター試験の制度上の限界が確かにあったのだ

が、それが試験に対する潜在的不満に火をつける形となって、制度の複雑さが問題だったはずなのに測定内容の問題へとすり替えが行われたというまとめは、大変分かりやすく、記憶しておかねばならない事柄であると感じた。

また、高大接続答申の根拠としてよく言われる「小中学校の教育は改善されているのに、高校、大学は知識の暗記・再生が中心だから大学入学者選抜を改善する必要がある」という考えに対する倉元先生の疑問、すなわち小中学校の教育が改善されているという主張の根拠である PISA の国別順位の上昇の原因は PISA 型テストの受験技術の向上(全国学力調査が同タイプ)にあるのではないかというお話も興味深く聞いた。ある自治体の教育委員会が過去問題を利用して全国学力調査対策をするように指示していた事に対し、文部科学省から本来の趣旨を踏まえるよう教委へ通知があったという件を、倉元先生は「衝撃的な報道」と表現したが、何を隠そう、私の子が小学 6 年生のときは、4 月は毎日のように学校で全国学力調査の「過去問」を解くことを課されていた。(あくまでも私の子供について、ということでこれが広く行われていると主張するものではありません)。このことは本フォーラムの趣旨とは少し話しが逸れると思うが、敢えて記した。

倉元先生の講演の最後にあった「大改革による最大の被害者はその年の受験生であり、受験生の視点から、未来の解決策を考えなければいけない」という言葉は大変印象に残った。

3. 現状報告

3.1 センター試験運営の実際と課題

大学入試センター試験・研究統括官

大塚 雄作 氏

大学入試センターの視点から、現状の大学入試センター試験が、大変な労力をかけて、思考力や応用力も見ることができる、公平な、良問と言える、ものであるかを丁寧にお話頂いた。頷ける面が多かった。さらに「入試改革に対す

る留意点」も示して頂いた。センター試験の「廃止」は既定路線なので、お話いただいた点が少しでも「新テスト」に活かされるようになってもらいたいと強く感じた。

3.2 センター試験を「受けとめて」－高校の教員として受験者の保護者として－

静岡県立掛川西高等学校教諭

駒形 一路 氏

駒形先生のお話は、同じ高校教員として、共感しながら聞いた。

それぞれの高校で在籍する生徒のタイプや進路志望が異なることはあっても、大学入試センター試験の受験指導という点では、大きく異なることはないのだとあらためて感じた。

本フォーラムは高校教員の参加も多いと思うが、大学関係者の参加も多いはずなので、高校現場の様子をこういった形で「現状報告」することも重要だと思う。

また、現行のセンター試験が廃止になると、これまで蓄積した経験やデータが使えなくなり、特に始めの何年かは生徒への指導が難しくなることが予想される。制度変更も必要なのだろうが、東北大学の AO 入試のように少しずつ少しずつ改善されるのが望ましい。制度激変期の受験生が「被害者」となってしまわないように、十分な周知や事前の情報が欲しい、というのが現場の高校教員の共通の思いであろう。

4. 討議

フロアーから休憩時間に寄せられた質問に、講演、発表された 4 名の先生が回答するという形式であった。司会の方から最後に紹介された質問が最も多い質問だったようだが、やはり参加された方々の一番の疑問は「本当に新テストは実施されるのか？できるのか？」というものだろう。それに対する南風原先生の「実施する方向は変わらないだろうが、不安が多いことを広く共有したい、また議論を大いにして、それを公開してほしい」という回答が印象に残った。

また同じく南風原先生の発言の中に「(大学入学者選抜改革や新テストの実施にあたっては)大学が主体的に責任を持って取り組むべきだ」という内容があった。また、倉元先生からは「混乱の時にたまたま受験期となる受験生にとって悲劇である。東北大の入試では混乱が起きないように少しずつ手を加えている」という内容の発言もあった。

これらを聞いて、先に国大協と東京大学がそれぞれ出した「高大接続システム改革会議「最終報告」を受けて」や、「高大接続システム改革についての意見」の内容を思い出し、そこで述べられた大学入学者選抜に対する大学側の強い責任感と、これまでの取り組みに対する自負をあらためて強く感じた。

時間がもう少しあれば、回答に対する意見や更なる質問等もフロアーから出ていたのではないかと思う。その点は少し残念であった。

5. おわりに

「今回のフォーラムに参加して、いろいろなことが腑に落ちて高大接続システム改革、特に新テストについての理解が深まり安心した」と感じた参加者は極めて少数だろうと思う。講演や報告、討議を通じて、様々なことが明らかになればなるほど、新テストに対する不安が大きくなる一方のような気がするのは私だけではないと思う。「大学入試における共通試験の役割」という今回のテーマについては多くのことを勉強させていただき、何とか理解することができた。その一方で昨年の第22回の本フォーラムのテーマ「大学入試改革にどう向き合うか」を再び大きな課題として突きつけられたような気がする。待ったなしの改革が進む中、高校の現場も「変えるもの」「変えないもの」をしっかりと考えながら対応していかなければいけないとあらためて感じた。

講評3：第24回東北大学高等教育フォーラムに参加して

岩手県立黒沢尻北高等学校
教諭 佐藤 禎信

1. はじめに

今年度のスタート時点の私の推測は「昨年の段階では不透明な部分が多かった「共通試験」も、今年度に入ったならば、高大接続システム改革会議「最終報告」を受け、共通試験の方向性はある程度定まり、今回のフォーラムでは、実施するにあたっての細かい部分の課題を掘り下げていくことがテーマになっていくであろう」というものであった。

しかし、最終報告を見ても、依然として不透明な部分が多く、そもそも実施可能なのかという疑問さえ湧いてくる。今回のテーマも、「センター試験の評価と新制度の課題」というサブタイトルがついており、「そもそもセンター試験は言うほど悪くなかったのではないか。」というニュアンスが伝わってくる。

2. 基調講演1

共通試験と個別試験に求められるものー測定論の観点からー

東京大学理事・副学長、大学院教育学研究科教授（高大接続システム改革会議委員）

南風原朝和氏

高大接続システム改革会議の委員として、内部の状況をどの程度オープンにするのか、期待しての講演であった。

結果は期待通り。高大接続システム改革会議の反省として、測定論の立場から重要な点について、しっかりとまとめて下さった。

特に記述式問題の導入について、私は否定的な立場である。コンピュータを用いたとしても、採点が無理であろうという考え方があったからだ。南風原先生の懸念まとめには8つの項目があるが、3項目にわたり、記述式問題に関わる懸念が載せられている。

<以下資料から抜粋>

(2)記述式を導入すると、解答に時間がかかるため項目数が減少し、十分な情報が得られない可能性がある。

(5)記述式を導入すると、明確な採点基準を設定するのが難しく、かつ採点に時間がかかる。

(6)記述式の採点を容易にするために、提案のような「条件付き記述式」を採用すると、信頼性（採点者間の一致度）は向上しても、最も重要な妥当性が低下する可能性がある

南風原先生も、記述式の導入については、困難であると認識しているようである。特に私が感じている懸念について、データや、理論を基に説明して頂いたのはありがたかった。

高大システム改革会議のような、新しい仕組みを模索するような会議においては、自由な発言からアイデアを出しつつ、実現に向けて修正を加え、実務的な部分に落とし込んでいくような手法がとられるであろうと推測する。やはり南風原先生の言うとおおり、共通試験の設計という点で、十分な検討がもっと必要であったろうと深く感じたところである。

3. 基調講演2

大学入試制度改革の論理に迫る。ーセンター試験「廃止」の理由ー

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

倉元直樹氏

校務の関係もあり、5月のフォーラムには3年連続で出ている。倉本先生の話は毎回楽しみだ。理由は簡単、本音で明快に語ってくれるからだ。

講演の構成は次の通りである。

1 はじめに	2 センター試験の実像
3 センター試験の誕生	4 センター試験の変容
5 センター試験の評判	6 大学入試改革論議と センター試験
7 センター試験批判の 構図	8 共通 1 次とマークシ ート批判
9 センター試験廃止論	10 新しい入試制度の運 命
11 高大接続答申の根拠	12 おわりに

どんな試験であっても「最高」ということはない。センター試験のような全国何十万人も受けるような試験でしかも受験料が安く設定されているような試験であればなおさらである。

センター試験は最高ではないが、悪くはない。これが私の感想である。過去を振り返ってみて、受験生に混乱をきたした回もあったし、得点調整等で、「それは・・・」と思った回もあったが、大きな枠組みとしてのセンター試験には文句はなかった。実際、絶賛された時期もあったわけである。

倉元先生の講演ではセンター試験の誕生から現在までを振り返りながら、「廃止の理由」について述べられ、非常にわかりやすく、そして、これからの問題点にも踏み込んだものであった。（受験システムの）改革による「最大の被害者は誰か？」「受験生の視点から未来の解決策を」という言葉は正論である。

4. 現状報告 1

センター試験運営の実際と課題

大学入試センター試験・研究統括官（副所長）

大塚 雄作氏

センター試験の問題作成部分に深く関わってきた方の話であった。自分が作った訳ではないが、その作成に携わったからこそ、一つ一つの問題が、まるで「自分の子ども」のようにいとおしく語られていたように感じられた。誇張しすぎであろうか。

私は共通テストに対して反対の立場をとっている。したがって、共通テストの作成に携わるであろうお方は、私にとって反対の立場にい

る方という思いで考えていた。今回の報告も「どう揚げ足をとってやろうか」くらいに聞くつもりでいたが、それは間違いだった。大塚先生は、これまでの仕事に対してプライドを持って臨まれ、マークシート型という制約がある中で、生徒の「生きた学力」を測るために、よい問題を作ろうと毎日奮闘されてきた様子が容易に想像できた。

であればこそ、「共通テスト」に向けての課題は、私よりも、大塚先生ご自身が一番わかっているということを感じることができた。

大塚先生の資料にも

<以下資料から抜粋>

- 共通テストのコストと労力負担の課題
 - 共通テスト実施に至る必要なスケジュール
 - 緊急対応試験（本試験と同規模）の作成のコストと労力
- 記述式問題の課題
 - 記述式の得点は何を反映するのか？＝妥当性の問題
 - 採点に時間がかかる→時間＋労力等の負担→コスト
 - 採点者信頼性の問題
 - 試験の前倒しは高校教育に影響・採点作業は大学教員に負担
 - 受験料のアップは社会から受け入れられるか？

のように、「共通テスト」についての課題が載せられている。追試験問題はよく知られているが、緊急対応試験の準備までというのは、あまり意識したことがなかった。本当にセンター試験規模の試験を実施するというのは大変なことだと再認識させられた。課題山積みの中、奮闘されている大塚先生は立派である。

5. 現状報告 2

センター試験を「受け止めて」－高校の教員として 受験者の保護者として－

静岡県立掛川西高等学校教諭

駒形一路氏

駒形先生は「共通テスト」が与える現場への影響を懸念され、全国でもいち早く反応された

先生である。所属校だけでなく、静岡県内の先生が方にアンケートをとってまとめたり、全国に向けて発信したり。私も、ちょっとした出会いから、先生の生徒に対する情熱と、その行動力のすごさを感じさせて頂いている。

今回の講演では、これまでの教員生活を振り返りながら、国語教師として、進路指導担当として、親として、センター試験をどのように「受け止めてきたか」を発表なさっていた。

駒形先生は、受験を通して、生徒は人間的にしっかりと成長していくと感じられており、受験の大きな柱であるセンター試験を、それほど悪いものと捉えていないと、私は感じた。3年の10月以降から過去問演習をするのも、過去問に慣れるという要素はもちろんあると思うが、良い問題だから扱うのだろう。

部活動も熱心に指導されている先生なので、新テストが部活動に与える影響についても懸念されているところと思われる。

私も現場の教師として、思うところは同じである。

6. 討議

全体討議では、多くの質問が寄せられた割には、時間がなかったようである。参加した皆さんの関心の高さが伺われる。私が印象に残っている質問は「本当に共通試験は実施できるのか？」だ。

それぞれの先生のコメントは、それぞれに味があり、心境を察することができた。倉元先生の「・・・やれと言われたことをやる。ただ記述式問題は苦しいでしょうね」。センターの大塚先生が「・・・やるとしか言えない、でも、課題が多い、気が遠くなる・・・」というコメントを残された。倉元先生はずっと、そういう立場でコメントされてきたので、こちらの期待通り。大塚先生の言葉には、プランを実行に移す側の人としての苦悩が感じられた。

7. おわりに

大学が変わり、高校も変わり、その接続を担う入試が変わるのは、ある意味自然なことであろうし、議論は必要である。

共通試験ということに焦点をあててみて、私は複数回実施について反対の立場である。特に地方の高校生は、公教育にたよる部分も多く、部活動も盛んである。生徒に複数回のチャンスを与えることが、高校生活全体のバランスを崩すことにつながり兼ねない。極端に言えば、高校2年生までに教科書と部活動を終え、3年生は試験対策の年とするという形が増えることも予想される。豊かな人間力を持つ生徒の育成を目指すのであれば、これは、いかがなものか。

また、記述式問題については、その処理にかかわっての大幅なスケジュール変更が起こりえるため、その点で賛成できない。逆に言うと、センター試験並みのスケジュールで動いてくれるなら、別に問題はない。ただし、相当困難な話であろう。

今回のフォーラムでは、様々な立場の先生から、その立場からの率直な意見を聞くことができた。参加者それぞれに、感じることは違ったと思うが、私は、現在の「センター試験+個別学力試験」のシステム自体悪くないシステムだと振り返ることができた。

毎回思うが、これだけの先生をキャスティングするセンスのよさと、本音を引き出すような雰囲気作りは、さすが東北大である。今回も自分自身新たな発見もあり、充実した時間を過ごすことができた。この機会を頂いたことに感謝したい。

講評 4：第 24 回東北大学高等教育フォーラムに参加して

福島県立安積黎明高等学校
教諭 大河内 孝志

1. はじめに

平成 28 年 3 月 31 日に高大接続システム改革会議の最終報告が発表され、改革の方向性が示された。それに基づいて平成 29 年度初頭には「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の実施方針が策定・公表されることになった。高校側では、いわゆる新テストの内容や実施時期に合わせて、平成 30 年度に高校に入学する生徒のためのカリキュラムを作る必要があるが、本校では情報が不足していて動き出せない状況にある。このフォーラムで新テストに関する正確な情報を収集し、高校 3 年間を見据えたカリキュラム開発の参考にしたいと考え、また個人的には、新テスト 2 年目の受験生にあたる予定の中学 1 年生の子どものためになればと考え、参加させていただいた。

2. 基調講演

2.1 共通試験と個別試験に求められるもの—測定論の観点から—

東京大学理事・副学長、大学院教育学研究科教授（高大接続システム改革会議委員）

南風原 朝和 氏

まずは、高大接続システム改革会議の様子のお話から想像すると、議論が深まったというよりはますます混乱しているとの印象を受けた。さらに、「1 回の共通テストによる教科の知識に偏重した 1 点刻みの評価の枠組みを改革することを狙い」とする新テストの理念は確かに評価できるものの、測定論の観点から検討するとその実現にはさまざまな懸念があることがわかった。「思考力・判断力・表現力」を評価する問題を導入すれば、問題の難易度が上がり幅広い学力層を対象として学力を評価するには適さなくなること、記述式問題を導入すれば難易度が上がるだけでなく、問題数の減少に

より図るべき十分な情報が得られなくなること、また明確な採点基準の設定が難しく、採点にも時間がかかることなど。

新テストの具体的な内容だけでなく、実施そのものについても関心が高まっているが、平成 29 年度初頭に策定される「実施方針」では、さまざまな懸念に対してどのような改善がなされているのかについて注目して公表を待ちたい。

2.2 大学入試制度改革の論理に迫る —センター試験「廃止」の理由—

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

倉元 直樹 氏

マークシート方式では記述力・創造力・考察力は測れない等、共通一次の時代からこの方式に対する不満や批判はあった。センター試験になって私大専願者も受験できるようになり、弾力的な科目選択ができるようになったため、実施方法は複雑化した。このような中で起きたのが、地理歴史・公民で自由に 2 科目選択可能になったことで、試験監督の指示誤りや配付トラブルが続出した平成 24 年度入試の混乱であった。これは手続き上の問題であったが、潜在的な不満に火をつけ、中教審の議論の中でマークシート方式を含む測定内容の問題へと論点がすり替わり、結果的にセンター試験廃止という流れができたことがよく分かった。

共通一次からセンター試験へと代わるときにも検討されたが実施不可能とされた記述式問題が、新テストでは導入される方向で検討されている。平成 20 年の中教審学士課程答申のセンター試験評価では、「我が国の全体として、入試の改善を推進する上で、大きな貢献をしてきたと言える」と大絶賛されていたが、数年後には批判され、廃止へと向かうことになった。

とすれば、新テストも同じような運命を辿るかもしれないし、記述式問題も最初から批判の嵐にさらされるかもしれない。南風原先生は、改革会議の中で「どの層におけるどのような利用のための共通試験かについて共通認識がないまま、試験の設計の話が進められた」ことを反省しておられた。入試改革の理念からの議論が盛んに行われているが、テストでできることの限界を考えておく必要があることについては、同感である。

3. 現状報告

3.1 センター試験運営の実際と課題

大学入試センター試験・研究統括官（副所長）

大塚 雄作 氏

センター試験問題作成の基本方針は、学習指導要領解説及び教科書に基づき、思考力や応用力を見る問題を出題すること、不公平が生じないように配慮するだけでなく、教育的に公平であることにも留意すること、正解の一意性に注意して作問し、各教科の平均点は60点程度を目標とすること、極端な難問は回避し、問題数は試験時間内に適切な分量となるように配慮すること等である。この方針に基づいて、大学の教員が大学の視点から問題を作成しているので、受験生が一つのメッセージとして受け取ることや、高校や大学が教材の一つとして利用することを期待しているということであった。センター試験の課題としては、マークシート方式では知識しか測れないという偏見があることや、大量の受験生・多様な教育ニーズに応じて複雑化し、受験者層の変化・多様化にどのように対応するのかということ、また問題作成には4年を費やして3セット作るというコストと労力負担の課題もあることを知り、共通試験を作る側の苦労の一端を垣間見た気がした。

新テストに記述式問題が導入されると、記述式の得点は何を反映するのかという妥当性の問題や、採点に時間がかかり労力も増えるのでコストがかかることや採点者信頼性の問題が

あること等、さらに課題が積み上がることが予想される。試験でできることには限界があることを踏まえて、作問者の側からの視点も大学入試改革の中に反映されるべきだと感じた。

3.2 センター試験を「受け止めて」 —高校の教員として受験者の保護者として—

静岡県立掛川西高等学校教諭

駒形 一路 氏

高校の教員として、20年にわたって進路指導に携わってきた経験から作り上げた一連の大学受験指導の流れがほぼ完成し、センター試験を迎え撃つための過年度データも蓄積されているので、今のシステムは捨てがたいというお考えには同感である。

また、受験者の保護者としては、倫理・政経の4単科目新設や理科基礎2科目の初年度という変更の年を経験した二人のお子さんの不安な体験のお話をされた。900点の内の100点分でも不安が大きかったにもかかわらず、大きな制度変更となればさらに不安は高まることが容易に想像できる。このような経験から、入試制度の大きな変更をやめて段階的变化へという提言を出されたが、これは受験生にも保護者にも受容されるものだった。

4. 討議

さまざまな観点から質問が出されたが、その中でも新テストは本当に予定通り実施されるのかに多くの関係者が関心を持っていることが分かった。南風原先生や大塚先生の回答からは、決められた時間までに課題を解決して間に合うよう運用を始めることの難しさを感じた。倉元先生からは、最善を尽くすだけであるが、大学が主体的に取り組む中で場合によっては新テストを使わないという自由があってもよいとの回答があり、東北大学としては求める学生像を見失うことなく対応したいとの強い意志を感じた。駒形先生は、高校側には変化や混乱に対する想像力が必要となるが、良い試験問

題を出す大学を受験させたいとも述べられ、新テストに振り回されることなく、大学からのメッセージである入試問題をきちんと受け取ることのできる生徒を育てたいとの意欲を感じた。

5. 終わりに

このフォーラムに参加した翌日、元京都市立堀川高等学校長荒瀬克己先生による「高校教育はどう変わるか」という講演を聴いた。学校を変えるためにはどのような生徒を育てるのか、そのためにはどのような3年間のカリキュラムを用意するのかということを校内で話し合い、実践し、改善しながら現在の堀川高校に生まれ変わったことを知った。私は、新テストの実施が困難な状況にあることを知り、それが実施されるかどうかの方に関心を持っていたが、荒瀬先生の講演を聴いてからは、先を予見できない時代を主体的に生きていかなければならない生徒にどのような教育を用意し、どのような力を身につけさせようかということを考えることの方が大事なのではと思うようになった。新テストが実施されればその対策に関する研究が始まるのは当然のことであるが、それを始めるよりもまずは、さまざまなことを学ぶための基礎作りをどのようなカリキュラム・授業のもとで行うのかについて考えるべきだと思った。新テストの内容に振り回されることなく、どのようなテストにも柔軟に対応できる生徒を育てることを、まずは考えるべきだと思った。

このフォーラムに参加して、大学入試改革にはさまざまな立場の人たちがそれぞれの視点から真剣に向き合っていることが分かり、だからこそ、高校の側でもカリキュラムや授業の改善について真剣に考え始めなければならないと思った。個人的には、自分の子どもを入学させたいと思う学校にするという視点を大事にしたいと思った。

講評5：第24回東北大学高等教育フォーラムに参加して

宮城県立石巻高等学校
教諭 友永 能久

1. はじめに

平成28年3月「高大接続システム改革会議」が最終報告をまとめた。もはや高大接続改革は「検討」の段階を超えて「実現・実行」の期に入ったことになる。高等学校でも来たる実施に向けて「検討」と「実行」を進めていくべき時期なのにも関わらず、依然不透明な部分が多く進むべき道も定まらない状況で情報収集に明け暮れる毎日である。「新テスト」を受験する生徒たちは現在中学2年生、高校入学目前であり入学前の準備や入学後の指導の指針づくり等、やるべきことは山ほどある。

今回のフォーラムでは、大学入試における「共通試験」に絞った議論が展開される。改革の全体像が不透明であるからこそ、一旦立ち止まり個々の事象を丹念に観ることで全体像を少しでも浮かび上がらせることができるのではないかと思います。このフォーラムに参加させていただいた。

私が勤務する宮城県立石巻高等学校は石巻湾の北側にある「鰯山（わにやま）」と呼ばれる丘の上にある。石巻は先の東日本大震災で、地震・津波により甚大な被害を被った。学校は直接津波の被害を受けなかったものの生徒の多くが被災し、学校も長期間避難所としての機能を有した。「安心・安全な場」としての学校の存在を大切に生徒の進路実現に向けて取り組みを進めてきて5年が経過している。教育における復興は、少なくとも震災を経験した子供が成人になるまで続く。現在在学する生徒は小学校4～6年という多感な時期に震災を経験しており、これからも長いスパンでの対応が求められている。

東日本大震災と併せて、大都市への人口流出・高齢化、過疎化、地域経済の脆弱性などの社会問題を抱えながら、これからの教育改革が

地方の子供たち、教育活動にどのような影響を及ぼしていくのか、我々は地域教育に従事する立場でこの改革を注視する責を負っていると考えている。

基調講演 1 共通試験と個別試験に求められるもの～測定論の観点から～

東京大学理事・副学長 大学院教育学研究科教授（高大接続システム改革会議委員）

南風原 朝和 氏

高大接続システム改革会議の委員を務められた南風原先生から、測定論の観点から共通試験の意義や妥当性についての見解及び高大接続システム改革会議の雰囲気などを通して、新共通試験に求められるもの、懸念されることなどを詳しくお話しいただいた。

共通試験の在り方によって、共通試験の使い方と個別試験に求められるものが規定されること、さらにどの部分集合（大学群）に対応する共通試験を作成するかで共通試験に求められるものが規定されることを聞き、改めて共通試験が大学入試全体に大きな影響を及ぼすことを実感することができた。また「1点刻み」から「段階別」の情報表示の変更については特に情報量の減少という観点から懸念を示しているが、高校現場としても段階による大学の序列化や「段階境界受験生」への指導などに苦慮することが容易に予想されることから、十分注視していく必要があると感じた。

共通試験の設計・実施に向けては情報をオープンにして関係者や関係機関（この場合「大学側」と「高等学校側」となるだろうが）の意見を広く聴取し、納得と協力を得られるかたちで進めるべきとの南風原先生の言葉は強く印象に残り、我々高等学校現場もまた、このようなフォーラム等への参加を通じて情報を収集・共

有し常に問題意識をもちながら、生徒の実情を踏まえたメッセージを送り続けることが必要だと感じた。

基調講演 2

大学入試制度改革の論理に迫る-センター試験「廃止」の理由-

東北大学高度教養教育・学生支援機構

倉元 直樹 氏

共通一次試験導入の経緯からその問題点および大学入試センター試験の誕生、現状の課題から新テスト移行に向けての留意点等についてお話をいただいた。

共通一次試験からの大学入試制度改革の変遷を振り返り、まさにそれが時代や社会に大きく影響されていることが分かった。

共通一次の導入には約8年をかけてもなお、激しい批判の連続だったという。今回はさらに大きな変革を謳っているが、その準備期間としては短いと言わざるを得ない。また、目玉である記述式導入については、基調講演1でも話題となったが、受験生を指導する立場としても、共通試験として適切であるのか、正しく評価できるのかという不安をどうしてももってしまう。そこには「知識・技能」を問う問題であれば、問題をみることで我々(受験生を含む)は一定の理解が得られる、あるいは得やすいのに対して、「これが『思考力・判断力・表現力』を問う問題だ」と規定されることの戸惑い・疑念があると思う。

「現状を見据えて(現行の入試制度の検証を行い)、先入観に捉われず、時間をかけながら可能な限り変えるべきところを変えていくべき」という倉元先生の主張は非常に納得のいくものであった。

平成24年度問題の総括にあるように大きな制度変更にはそれに見合う準備期間が必要である。高大接続改革・新テストが大きな変革であればあるほど、受験生には中学・小学時代にさかのぼった教育の積み重ねが前提となるべ

きであろう。倉元先生の言う「受験生が最大の被害者にならないように出口から見た議論、結果からの影響を出発点とした議論」が活発にかつ継続的に行われることを望みたい。

現状報告 1

センター試験運営の実際と課題

大学入試センター試験・研究統括官(副所長)

大塚 雄作 氏

毎年10,000にも及ぶ試験場で統一にかつ遅滞なく実施される大学入試センター試験。学習指導要領に基づき、何より公平性を重視してかつ平均点を60点程度になる問題を複数の眼によるチェックを経て作成され、実施後も評価委員会での評価を積み重ねることで提供されていること。作成に携わる方々の苦勞に心より敬意を表したい。

進学校では、3学年後半になると決まってセンター試験対策を実施することになる。「センター試験が知識しか測っていない」との言説は根強いが、担当する理科(物理)の問題をみると、深い「思考力」「判断力」を求める良問が多く、あてずっぽうであたるような問題にはなかなか会えない。やはり、大学入試問題はセンター試験・個別試験ともに「大学からのメッセージ」であり、我々高校教員はそのメッセージを的確に理解し生徒への指導に活かす責がある。

記述式を導入することで、大学がどのようなメッセージを新たに受験生(高校側)へ発するのか、そのメッセージにどのように応えていくべきなのか、そのために高校の教育活動をどのように変革していくべきなのかまだまだ調査・研究すべきことは多いと感じた。

大学入試センター試験の問題が高校教育における良質な教材を提供していることを考えると、新テストでは今までの蓄積・経験をもとにさらに発展した良好なものになることを期待していると同時に、問題の公開は是非継続実施を願いたい。

現状報告 2

センター試験を受け止めて

静岡県立掛川西高等学校 駒形 一路 氏

高校の教員として大学入試センターを生徒と共に迎え撃っていた毎日の報告と一保護者として子供と向かい合った毎日を振り返った話をいただいた。

進路指導部に6年、部長として3年間進路特に大学進学指導を担当してきて、毎年繰り返される「センター試験の迎え撃ち」は、その手法は学校それぞれではあるが共感できることが多かった。

中高一貫校の広がり、SSHやSGHなど魅力ある学校づくりを通じて他校との差別化が進んでいる中、地方の普通高校から難関大学への進学はますます困難になるだろう。難関大学を目指すには中学あるいは小学校といった早期、かつ明確で変更の難しい進路決定・意識付けが求められている。子供の希望や能力にあった細分化された選択肢をもつ都市部の優位性は高い一方で、いわゆる「遅咲き型」の子供にはその挽回の機会が失われつつあり、それもまた人材発掘の大きな妨げになると思われる。

大学入試改革が「社会からの送り出し」からの逆算で「ディプロマポリシー」、「カリキュラムポリシー」「アドミッションポリシー」に基づき実施され、その変革が「高校教育改革」になるならば、社会からの要請、時代の認識把握や将来展望が今まで以上に、大きく教育に影響する時代になっているともいえる。いま「ゆとり世代」と呼ばれる大人たちが社会の中心に入りつつあり、「ゆとり教育」の是非（適否）は今から評価されることだろう。また時を経て「新テスト世代」が社会を牽引していく時代がやってくるわけで、教育の評価には膨大な時間を要する。教育に従事する我々の責は重大であることを自覚したい。

また、駒形先生は倉元先生同様、大学入試制度の急激な変化へのリスクを訴えていた。新しい制度改革では「生徒の目線」にも十分目を配

り、是非十分な情報の開示と段階的な実施による共通理解を高揚させられるよう望みたい。

終わりに

このような大きな制度改革に主人公である受験生の声は聞かれない。倉元先生は「大改革による混乱は最終的に収束する」としながらも受験生が被る被害が最小限であることが大切であると話された。急激な変革ではなく緩やかな変更であること、そして我々教育に携わる大人が常に受験生（高校生）の視点を持ち合わせながらこれからの教育改革に接していくべきであると感じた。

基調講演、現状報告ともに重要なテーマであった。時間の関係もあり、なかなか中樞まで議論が及ばず歯がゆい部分もあったが、多くの関係者が新テストにいろいろな側面から注視、検討を加えて内外へ発信していくことの大切さを知ることができた。

今フォーラムに参加させていただき、東北大学をはじめ関係の方々に深く感謝いたします。

講評6：第24回東北大学高等教育フォーラムに参加して

青森県立青森高等学校
教諭 齋藤 郁子

1. はじめに

平成28年3月31日、高大接続システム改革会議から最終報告が出された。最終報告では、大学入学者選抜の方向性、大学入学希望者学力評価テスト（仮）の導入が報告書で示され、「平成32年度に実施される入学者選抜から適用する」というスケジュールが示され実施に向けて準備が進んでいる。しかし、実施方針の策定は29年度初頭に持ち越され、サンプル問題が一部示されたものの、記述式試験の実施日程などを含め具体的な実施形態、科目がわからないままである。

共通テストの役割について、大学・大学入試センターの立場での意見を伺い、高等学校として滞りなく新テストへの対応が進められるよう勉強したいと思い、このフォーラムに参加した。

2. 基調講演1

共通試験と個別試験に求められるもの ～測定論の観点から～

東京大学理事・副学長、大学院教育学研究科教授（高大接続システム改革会議委員）

南風原 朝和氏

最初に共通試験の意義と設計について、個別試験と組み合わせて設計する必要がある点が示された。また、情報の開示について、昨年度中は審議・議事録の公開により問題点が広く共有されてきたことを踏まえ、今後も情報公開が望まれると指摘された。

「大学入学希望者学力評価テスト」に求められるものと懸念について、次の3点について講演で感じたことを述べたい。

1点目は、「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する問題を多く出題すると難易度の

高い項目が増え、また、問題数も少なくなる傾向があるという点である。

共通テストにおいては難易度の低い項目も満遍なくテストに含めるべきである。現在のセンター試験でも思考力や判断力を評価する問題が出題され、標準的な良問で構成されていると思う。多くの受験生を評価するという目的からも、幅広い難易度の問題を出題して欲しいし、極端に難易度を上げることがないようにして欲しいと思う。

2点目は、記述式問題の導入では段階別表示が検討されているという点である。段階別表示にすることで情報量が減少する、したがって素点をそのまま保持すべきという南風原先生の説明が分かりやすい。高大接続システム改革会議の最終答申ではマーク試験については点数のみでなく、問ごとの回答状況のような詳細な情報を大学に提供するとされ、一方で記述式試験では段階表示とされている。マーク部分と記述部分で異なる評価点を、大学入試でどのように利用していくのか。生徒は少しずつ目標点を設定し努力を重ねていく。素点をそのまま保持していけばよいのではないかと感じる。

3点目は短期間で採点するため条件付き記述式が提案されているが、信頼性（採点者間の一致度）が上がっても、妥当性（何を測定したかが明確に測れるか）の低下が懸念されるという点である。信頼性と妥当性の二つの観点から、試験を考えるべきだということがよくわかった。

高大接続システム改革会議の最終報告においても「記述式の導入には、作問・採点・実施方法等について乗り越えるべき課題も存在している」ことが述べられ「実証的・専門的な検討を丁寧に進める」ことが述べられている。ぜひ、丁寧に実のある試験を実施して欲しい。

3. 基調講演 2

大学入試制度改革の論理に迫る～センター試験「廃止」の理由～

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授
倉元 直樹氏

「大学入試センター試験の廃止」という観点でこれまでに共通テストの果たした役割について再認識できた。

センター試験の前身である共通一次が国公立大学受験生のみを対象とした 5 教科 7 科目のテストであり、各大学の二次試験との組み合わせであったのに対し、センター試験は基礎的達成度を測定する、アラカルト方式をとり 1 教科 1 科目の利用ができるように変遷した時点で理念の変化があったとの説明は興味深かった。センター試験の試験科目の増加、選択の幅が増えたことによる試験の混乱、複雑な時間割など長い間にセンター試験を見直すことが必要なのだろうと思う。高大接続システム会議最終答申では「大学入学希望者学力評価テスト」の出題科目数の簡素化にのみ言及している。共通一次のようなすべてをパッケージとする試験になるのか、アラカルトなのかによって、方向が大きく変わると思う。

「小中学校の教育は改善されているが、高校、大学は知識の暗記再生に終始している。それに対応するために大学入学者選抜を改善する」という高大接続答申の基本図式と「小中学校の教育改善」についても問題提起があった。以前から「小中学校と大学の教育改革は進んでおり高等学校だけが取り残されている」「高等学校の教育を変えるには大学入試を変えなければならない」という論を見聞きする。高等学校教育が暗記再生に終始している、知識偏重で考える力を育てていないという指摘には、真摯に対応していかなければならないし、真の学力を伸ばしていくよう高等学校は考える必要があると思う。また、大学入試では、高等学校で培った力が評価される入試をという思いも持っている。

理念の先にある、受験生の混乱を考えると、丁寧なゆっくり進めて欲しい。これほど大きな変更を加えるためには、丁寧な検証が大切であるというお話に全く同感である。

4. 現状報告 1

センター試験運営の実際と課題

大学入試センター試験・研究統括官

(副所長) 大塚 雄作氏

平成 28 年度のセンター試験は受験者が 54 万人で実施された。大塚先生のお話からは、大学入試センターのご苦労や出題者、高校、大学の現場の先生方への配慮が感じられた。

センター試験は「難問奇問を排除」し、学習指導要領に基づいた良問を提供してきた。また、思考力や応用力を判断する問題を出題する公平性の高い試験であると感じている。出題者の先生方のご努力により、長年にわたり共通一次・センター試験が安定して続けられてきたことを今回再確認させていただいた。

新制度実施の際の記述式問題に関して「妥当性」「採点の時間・労力」「採点者信頼性」「受験料」について言及された。

今後、試験の実施時期や、採点の問題に加え、受験料のアップなども広く社会に周知を図っていただきたいと思う。

5. 現状報告 2

センター試験を受け止めて

静岡県立掛川西高等学校教諭

駒形 一路氏

高校の教員の目から見た、センター試験について共感する点が多かった。

センター試験までの指導から「センター試験」を迎え撃ち受験生に寄り添う現場の教師の代表として述べていただいたと感じている。急激な変化は受験生・保護者にとっても大きな不安であるという点に同感である。

6. 討議

多くの質問が出されたが、全体を通じて感じたことは「本当に平成 32 年度から実施するのか」ということであり、多くの方の「受験生の視点」を大切にすべきであるという考えに共感する。討議の中では、次の 3 つのことを感じた。

(1) センター試験廃止の必要性

今までのセンター試験でも思考力を測定していたのではないか、という質問に対し、私も、センター試験はよい試験であると思う。しかし、教科間の得点差の調整など、長い時間で制度的にはほころびた点もあり、よりよいテストを作る方向への変換であるという面も理解することができた。「出題科目をできるだけ簡素化する」という最終答申がどのように実現されるのか見守りたいと思う。

(2) 本当に新テストは実施されるのか。

「やるかやらないかはっきりして欲しい」という質問は我々高校現場からの切実な声である。しかし、倉元先生から「大学には試験を使わない自由がある」という説明があり、共通テストの枠組みが決まった後、各大学がどのようにテストを利用するかを検討し、講評していくことに今更ながら気づいた。このままでは平成 32 年度入試の受験生が混乱することは必至であると感じる。南風原先生から「やる方向は変わらないが、このフォーラムでその声が出されたことが大切である」と発言があった。このフォーラムから高校の切実さが伝わればよいと思う。

高等学校の教育課程は 1 年前の届け出が必要であり、中学 3 年生の時点で少なくとも入試制度が明確になっていることを関係者には強く望む。

(3) 個別試験との関係

「入試問題は大学からのメッセージである。東北大学の個別試験が解ける生徒を育ててほしい」という倉元先生の発言、「よい入試問題を作る大学を受験させたい」という駒形先生からの発言に、全く同感である。個別試験の廃止

論はなくなったようである。個別試験で、より細やかな選抜が実施されることで共通試験の役割も明確化するのではないか。

7. おわりに

「現在の中学 2 年生が高校 3 年生になったときの試験」である。閉会の挨拶で花輪公雄東北大学理事が話された「高大接続システム会議の最終答申が出され、その後の情報が全く出てこなくなってしまった。議論の行方を随時情報開示し、共通テストと個別テストの調和を交えての議論が大切だ」というご意見には全く同感である。試験の内容、記述試験の実施時期など、具体的なことが提案されておらず「本当に、実施できるのだろうか」という不安を感じている。今後の早い時期に情報を公開してほしい。

高大接続システム会議最終答申にもあるように大学入試は高校教育に大きな影響を与える。受験に真剣に向き合うことで人間的に大きく成長するチャンスでもある。受験生が全力で受験に臨むことができるように準備することが大人としての責務ではないかと感じている。いたずらな混乱をうまないような制度設計とスケジュール設定、情報公開をぜひお願いしたいと感じている。

最後に今回のフォーラムに参加させていただく機会をいただいたことに感謝申し上げる。高大接続システム会議最終答申を見ると、初期の案に対し多くの方々の知見が組み込まれ修正が進んできたと感じている。東北大のフォーラムに参加されている先生をはじめ、多くの先生方のご努力に敬意を表すると共に、さらに検討修正を進めて欲しい。

私は現行学習指導要領下における枠組みに関することを理解するだけで精一杯であるが、平成 36 年度以降の試験については科目の枠組みなど大きく変化していくようである。

今後とも入試改革に強い関心を持って注意深く勉強していかなければならないと感じるフォーラムであった。

アンケート・参加者統計

第 24 回東北大学高等教育フォーラムアンケート
(回収数 168, 回収率 %) ¹

1. 御所属

(1) 高校 : 113 名 (67.3%) (2) 大学 : 40 名 (23.8%) (3) その他 : 15 名 (8.9%)

2. フォーラムのテーマは如何でしたか.

(1) よかった : 148 名 (91.4%) (2) どちらとも言えない : 11 名 (6.8%)
(3) 改善すべき : 3 名 (1.9%)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 147 名 (88.1%) (2) どちらとも言えない : 16 名 (9.6%)
(3) 改善すべき : 3 名 (1.9%)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 126 名 (76.4%) (2) どちらとも言えない : 35 名 (21.2%)
(3) 改善すべき : 4 名 (2.4%)

5. ディスカッションは如何でしたか.

(1) よかった : 107 名 (77.0%) (2) どちらとも言えない : 26 名 (18.7%)
(3) 改善すべき : 19 名 (13.5%)

6. 時間は如何でしたか.

(1) 短すぎた : 11 名 (6.8%) (2) ちょうど良い : 140 名 (87.0%)
(3) 長すぎた : 10 名 (6.2%)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば、どのような形式、テーマを望まれますか.

(後述)

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください.

(後述)

ご協力ありがとうございました.

¹ ダブルマーク、無回答は個別の集計から除く.

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマは如何でしたか.²

- タイミングとして適っている。(高校, よかった)
- プログラム構成が魅力的で参加したが期待以上のものでした。(高校, よかった)
- 少しぼやけている部分だったので。(高校, よかった)
- 情報不足の中で現実的なテーマでした。(高校, よかった)
- タイムリーでした。(高校, よかった)
- 大学入試センター試験の評価にテーマをしたこと。(高校, よかった)
- 主体的に考えるきっかけとなった。(高校, よかった)
- 大学入試のこれからを意識できた。(高校, よかった)
- タイムリーです。皆が知りたい議論したいことでした。(高校, よかった)
- 時宜に適切とても良かったです。(高校, よかった)
- 高校が最も高い関心をもっていること。(高校, よかった)
- 高校教育(中等教育)との関係性(つながり)の重要性, つまり求める生徒像が入試に直結するから重要である。(高校, よかった)
- 新制度の課題がよくわかった。(高校, よかった)
- タイムリーだと思います。(高校, よかった)
- 今の時期に考えるべきテーマであるから。(高校, よかった)
- センターの評価, テスト学の視点が示されることは参考になる。(高校, よかった)
- 高校現場としては一番気になるテーマだった。(高校, よかった)
- センター廃止までの道のり, 今後について。(高校, よかった)
- 出口の見えない大学入試について担当されている先生方の本音が聞けたから。(高校, よかった)
- 高校現場(当校は私立中高一貫)。(高校, よかった)
- センター試験の評価は広く知られてよい。(高校, よかった)
- 今, 検討が必要な時期にあるから。(高校, よかった)
- 共通試験の歴史的な流れが分かった点が良かった。(高校, よかった)
- 共通一次～センター試験とふり返り(評価)は必要です。(高校, よかった)
- 現在のトレンドをとらえている。(高校, よかった)
- 現時点では適切。(高校, よかった)
- いろいろな視点でセンター試験の話が聞けたこと。(高校, よかった)
- 新テストにはやや疑問を持っていたため, タイムリー。(高校, よかった)
- 現状の流れを冷静に見直すテーマで良かったです。(高校, よかった)
- 今後どうなっていくか, まだ見えてこない。新入試についての話が聞けてとてもよかった。(高校, よかった)
- 時宜を得ていると思います。(高校, よかった)
- 高大接続の問題点, 今後どのようになるのか興味深かったが, いろいろ共感できるものであった。(高校, よかった)

² 末尾の括弧内は所属, 選択された御意見。

- 新テストに対する大学側のスタンスもわかった。(高校, よかった)
- 今, 高校の現場でもどう対応していけばよいのか図っていた問題である。(高校, よかった)
- 興味をそそられる。(高校, よかった)
- 時節柄。(高校, よかった)
- これからのあるべき共通試験について考えるととてもいいフォーラムである。(高校, よかった)
- 大学入試改革を求めているのは, 本当は誰なのかを知りたいと思って参加いたしました。(高校, よかった)
- 現場で疑問に思っていたことを扱ってもらえたので。(高校, よかった)
- 大学入試改革～高大接続。(高校, よかった)
- 多くの人が気になっていることだと思う。(高校, よかった)
- 興味をひくテーマ。(高校, よかった)
- 先生方の本音が聞けた。(高校, よかった)
- 今回の内容に合っていた。(高校, よかった)
- 興味深い内容であった。(高校, よかった)
- 私も含めて多くの先生が興味を持っていることなので良いと思います。(高校, よかった)
- 問題について観点が具体的でよかった。(高校, よかった)
- 高校にとっての喫緊のテーマである。(高校, よかった)
- 新テストの課題について考える機会となった。(高校, よかった)
- 現中 2 生が高校に入学するまでに新入試対応を具体的に提示しなければなりません。最も情報収集したいテーマでした。(高校, よかった)
- 新入試の情報がなかなか入ってこない状況なので, ぜひ継続して頂きたいと思います。(高校, よかった)
- とにかく情報を知りたい段階なので, 貴重な機会でした。(高校, よかった)
- 気になっている所があったので, しかし, 新テストはどうか?。(高校, よかった)
- 急な変化は生徒にとってあまりよくないという方向に話が向いていた所。(高校, よかった)
- 新制度の課題が分かった。(高校, よかった)
- 新課程に特化した内容が知りたかった。(高校, どちらとも言えない)
- 新テストについては具体的に知りたかった。(高校, どちらとも言えない)
- センター試験が制度疲労ということはよく分かった。(高校, どちらとも言えない)
- 既知の制度の説明, 批判だけでは…我々高校現場はこれからの展望さらに具体的な予想図を知りたい。(高校, 改善すべき)
- 「センター試験を守る」など恣意的な趣旨が伝わるテーマの方が良いのでは?。(高校, 改善すべき)
- こういう新テストが効果を得られるものとして実施できるか, 考えさせられた。H31・32 導入を前に内容の整理と現状での問題点を確認し, 自大学(私学)の入試改革をイメージ(遅すぎるか)。(大学, よかった)
- 旬なテーマであり, 様々な立場の角度からの話を伺えたから。(大学, よかった)
- 一貫してバイアスがかかっているように感じます。(大学, よかった)

- 全体の理解度アップ。(大学, よかった)
- 将来の入試, 学力観を考える上で大切だから。(大学, よかった)
- テーマ自体は興味を引いた。(大学, よかった)
- 社会的関心の高いテーマ。(大学, よかった)
- 高大接続入試改革が話題性がある。(大学, よかった)
- これからどう変わって行くのかどうか?それなりの指針が話されることを期待していたので, 時期的にまとを得ている。(大学, よかった)
- 関心の高いテーマだった。(大学, よかった)
- 共通と個別試験の意味を再考できたので。(大学, よかった)
- 時宜に合っていた。(大学, よかった)
- 今後の個別試験のあり方を考えるに当って, 共通試験の課題整理ができた。(大学, よかった)
- 高校やセンターの方の生の声が聞けた。(大学, よかった)
- 高校, 大学それぞれの教育機関において, 関心の高いテーマ設定であった。(大学, よかった)
- 時事的な観点から, 丁度よかったのではないかな。(大学, よかった)
- まさに旬な話題だったから。(大学, よかった)
- まさに知りたいテーマだったので。(大学, よかった)
- 実際に業務に当る立場として, 様々な情報が得られ有意義でした。(大学, よかった)
- それぞれの立場にある人からの意見が聞けた。(大学, よかった)
- up date の話題だから。(大学, よかった)
- 入試改革に対する冷静な批判が聞ける設定になっていた。(大学, よかった)
- 大学の入試担当として適切なテーマであった。(大学, よかった)
- 国への「うらみ節」を聞いても仕方ない。(大学, どちらとも言えない)
- 「共通試験の役割」としながら, その目的論, 議論がない。(大学, 改善すべき)
- タイムリーな話題であった。(その他, よかった)
- 注目されている話題である。(その他, よかった)
- 関心があるテーマだった。(その他, よかった)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか.

- 特に倉元先生の内容はおもしろかった。(高校, よかった)
- 高大システム会議の中身がみえるようで生々しい。(高校, よかった)
- 今までの流れ(歴史)を知ることができました。(高校, よかった)
- 「テスト」が機能するためにどうあるべきかを聴けた。(高校, よかった)
- 違った角度でセンター試験を考えることができた。(高校, よかった)
- たてまえではなく, 本音が聴けました。(高校, よかった)
- 普段聞く事の出来ない, 内容で勉強になりました. 特に倉元先生の講演は良かったです. ありがとうございました。(高校, よかった)
- センターの経歴などがわかってよかった。(高校, よかった)
- テストの制度設計について知ることができた。(高校, よかった)

- センター試験に対する見方，考え方を知ることができた．（高校，よかった）
- 否定的に見解がきけて安心しました．（高校，よかった）
- 基本的な課題が何なのか，整理できた．（高校，よかった）
- 南風原先生の内容が思っていたものを明確に示してくれていたから（視点が整理できました）．（高校，よかった）
- 今後の方向についての客観的な視点を得ることができた．大学関係者の考え方的一端が見られることはありがたい．（高校，よかった）
- テストスタンダード（テスト学会）の存在．（高校，よかった）
- テスト設計，センター試験廃止の影響などがわかって良かった．（高校，よかった）
- 個別，具体的なスピーチであったのでよかったのでは．（高校，よかった）
- 本音で話していた．（高校，よかった）
- 資料もデータ，論拠に基づき，本音の説明が伺えたため．（高校，よかった）
- 新テストの現状が未だに不透明であるということを大学側も感じていることを知れたこと．（高校，よかった）
- 制度の設計についてわかりやすく説明されていた．（高校，よかった）
- 率直に発表されていたから．（高校，よかった）
- 前述の通りの内容と，客観的な分析と考察が非常に良かった．（高校，よかった）
- センター試験の検証．（高校，よかった）
- やはり本音&ユーモアは必要ですヨネ．もう少し時間が長くてもよろしかったのではないかと思います．（高校，よかった）
- 南風原先生の講演，基本の積み重ねで説得力があった．（高校，よかった）
- 課題とその根拠が明示され理解しやすかった．（高校，よかった）
- それぞれの立場の考えを知ることができた．（高校，よかった）
- 共通一次からセンター試験への歴史と現状が知れたこと．（高校，よかった）
- 高大接続テストの問題点が理念的制度史的にも問題があることが明確になった．（高校，よかった）
- 「測定論」と「歴史」の両方がよくわかりました．（高校，よかった）
- 新入試の懸念についてやセンター試験について．（高校，よかった）
- 理論的にご説明いただき，とてもわかりやすかった．（高校，よかった）
- テスト学的に考えることがなかったので，入試について考えることができた点．（高校，よかった）
- 新共通テストの問題点がよく理解できた．（高校，よかった）
- 来たる新テストに向けて予想される問題が明確に示された．（高校，よかった）
- やや大学側に偏った内容であったように感じるので，高校側からの観点の内容もお聞きしたかった．（高校，よかった）
- センターの考え方，新テストの課題が様々な角度からわかった．．（高校，よかった）
- テストが作られる過程，工程，統計的見地からのお話しは，興味深いものであった．（高校，よかった）
- いつも現場で思う不満（不安）を理論的に聞くことができた．（高校，よかった）
- 試験が目指すべきことや共通一次からセンターへの流れがよく分かった．（高校，よかった）

- テスト研究の専門者の発表である内容なので。(高校, よかった)
- 高校現場も求めている改革を行うのは大学の要望かと思っていましたが, 大学でもないことが分かりました。(高校, よかった)
- 新制度の課題がよく分かりました。(高校, よかった)
- 公的な動向把握。(高校, よかった)
- 現段階での情報不足を補えた。(高校, よかった)
- 率直なお考えを話してもらえました。ただし, それをどう新テストにかかわれるかには触れておらず残念でした。(高校, よかった)
- 新制度の課題が確認できた。(高校, よかった)
- 大学入試の昔と今が見えてよかった。(高校, よかった)
- 新入試に関して勉強する良い機会となった。(高校, よかった)
- それぞれの立場における問題が明白になった。(高校, よかった)
- 倉元氏の説明が, 明確で整理された(自分の頭の中が)。(高校, よかった)
- これからの改革に不安があるという観点が含まれていた。(高校, よかった)
- 共通試験に対する技術的な指導を要求される現場から離れ, 功罪から展望について知る機会となった。(高校, よかった)
- 高大接続改革が改革ありきにならず, 受験生の将来に有益な改革になっているのか, 十分に考えさせる内容であった。(高校, よかった)
- 風刺がきいていた点, 今後慎重導入を。(高校, よかった)
- センターの導入の仕組みがわかった。課題とは何かなど。(高校, よかった)
- 新共通試験に求められるものが具体的にイメージすることが出来た。(高校, よかった)
- 大学入試制度の中が少しみえた。(高校, よかった)
- 非常にわかりやすかった。(高校, よかった)
- 共通試験と個別試験に求められるものはわかりやすかった。(高校, よかった)
- 測定論からの視点での分析は興味深い。(高校, よかった)
- 内容的には制度の確認だったため。(高校, どちらとも言えない)
- ①どうしても懸念中心になる。 ②一人でよい。(高校, どちらとも言えない)
- 40分程度では短いのではないか。(高校, どちらとも言えない)
- 両論が提示さえるような演題(者)がよかったのではと思ひまして。(高校, どちらとも言えない)
- 新テストに向けた情報がもう少し欲しい。(高校, どちらとも言えない)
- 話者の意見がみなさん同じ方向をむいている。反対の立場で話す方がいても良いのでは?。(高校, どちらとも言えない)
- 結局どう制度を支えても踏襲しても批判のような空虚感を覚える。今後の展望や具体案や, その評価を中心にしてほしかった。(高校, 改善すべき)
- 持ち時間が不足していたようだ。(高校, 改善すべき)
- 問題点・課題をコンパクトに提示していた。ただ, 課題 etc.が多過ぎたので, 時間が不足していたのでは。(高校,)
- よく共通試験について整理されていた。(大学, よかった)
- センター試験に替わるテストの難しさが具体的で明確だったため。(大学, よかった)

- 南風原先生がよかった。(大学, よかった)
- 問題点を整理できました。(大学, よかった)
- 人選がよかったです。(大学, よかった)
- 現状が理解できた。(大学, よかった)
- 新テストの問題・課題が見えた。(大学, よかった)
- 本音, 裏話, 生の声が聞かれた。(大学, よかった)
- 上記2と同様に現行制度の問題が良く理解できた。(大学, よかった)
- IIの講演をもっと詳しく聞きたかった。(大学, よかった)
- 「テスト」に関する学術的な裏付けを知ることができた。(大学, よかった)
- 問題点がよく理解できた。(大学, よかった)
- 説得力があった。(大学, よかった)
- テストの認識とセンターの歴史を知れた。(大学, よかった)
- 内容は良いですが, やはりバイアスが。(大学, どちらとも言えない)
- 改革を求められている現在過去を振り返っても仕方ないのでは?(大学, どちらとも言えない)
- 出てこない!! 答えが(無い)。(大学, どちらとも言えない)
- 今後どうなるのかが理解できなかった。(大学, どちらとも言えない)
- 問題提起はもっともです。共通テストにかかる問題が批判的に説明された点は理解できたが現実には進んでからののではないか。(大学, どちらとも言えない)
- 不満・愚痴を言っても始まらない。自らを改むべき当事者が不安を煽ってどうする。(大学, 改善すべき)
- 南風原先生 試験問題作成設計を再確認→新制度の時代の個別入試準備 倉元先生 結論やや強引(説明不足)。(大学, 無回答)
- 評価テストの課題について明確になった。(その他, よかった)
- 共通試験のあり方という新しい視点をいただきました。(その他, よかった)
- 理論的な話が聞けて参考になった。(その他, よかった)
- 南風原先生。(その他, よかった)
- 具体的でわかりやすかった。(その他, よかった)
- 講演の内容的に順番が逆の方が良かった。(その他, どちらとも言えない)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

- 生の声が出ていた。(高校, よかった)
- センター試験のこと, 良く分かりました。(高校, よかった)
- センター試験にむけての高校現場の共通の取り組みを報告していただきよかった。→センターは知識だけで点が取れるだけではない。思考力, 判断力を育てていないわけではない。(高校, よかった)
- 具体的で身近な内容であった。(高校, よかった)
- センター, 学校双方の立場がすごくよくわかりました。(高校, よかった)
- 作問に関する情報が得られたこと。(高校, よかった)
- 作成の立場, 高校現場の声→指導参考になります。(高校, よかった)
- 掛川西高校の先生の話は共感できた。(高校, よかった)

- 普段話を聞くことができない作題についても聞くことができ良かった。大学の先生の声だけでなく高校の先生の話も聞けて良かった。(高校、よかった)
- コンパクトに要点がまとまっていて、わかりやすかった。(高校、よかった)
- 現場からの声も出していく機会が必要です。(高校、よかった)
- それぞれのご立場から発表が分かりやすかったから。(高校、よかった)
- 大塚先生、ごくろうさます。(高校、よかった)
- 同じ高校教員として駒形先生の話はとても参考になった。(高校、よかった)
- 分かりやすい、現実を踏まえたものだった。(高校、よかった)
- 大塚先生のお話は明快でした。(高校、よかった)
- 同じ高校教員としてとても参考になった(駒形先生)。(高校、よかった)
- 他校の取り組みはとても参考になります。(高校、よかった)
- センター試験の準備について、どれだけつかしているか具体的に知ることが出来た点。(高校、よかった)
- 運営、高校の立場の異なる方の発表は興味深く聞いた。参考になった。(高校、よかった)
- 静岡県内の現状報告が刺激になった。(高校、よかった)
- 今年度の指導の参考になった。(高校、よかった)
- 進路通信。参考にさせて(盗用させて)頂ます。(高校、よかった)
- センターの指標(作成者)、高校側の率直な話が参考になりました。(高校、よかった)
- 現行の作問担当者、それを受験する高校側の立場での報告であった点。(高校、よかった)
- 率直な報告でよく分かりました。(高校、よかった)
- センター試験運営側の主張。(高校、よかった)
- 高校側からの発表があったこと。(高校、よかった)
- センター試験の作る側、受ける側双方の見方。(高校、よかった)
- センター副所長大塚先生からは本当にいいお話を聞くことができました。(高校、よかった)
- センター試験運営の実際や高校現場の実践を知ることができた。(高校、よかった)
- センター試験の作成などが聞けて新鮮だった。(高校、よかった)
- 新入試に関して勉強する良い機会となった。(高校、よかった)
- 明日からの高校現場で役に立つ。(高校、よかった)
- 多面的な人選である。(高校、よかった)
- 駒形先生のお話は同じ高校教師として共感できるものが多かった。(高校、よかった)
- センターの意義もあると思います。一概に廃止は…現場にも指針(テストパターン)があれば=対応に時間がかかりそう。(高校、よかった)
- 特に高校の取組については具体的に知ることができた。(高校、よかった)
- 経過が少しみえた。(高校、よかった)
- センターの良い所は残しつつという所が感動的でした。(高校、よかった)
- 問題作成の実際を知ることができた。(高校、よかった)
- 文科省の話が聞きたかった。(高校、どちらとも言えない)

- 特になし。(高校, どちらとも言えない)
- センター側からの自己評価をもう少し聞きたかった(短かった)。(高校, どちらとも言えない)
- センターから現状報告はよかったが, 高校からのはこのフォーラムの趣旨にあっているのか. 共感はあるが経験の話にとどまっており, 示唆が乏しい. 特に親の立場の話はこの場にはふさわしくない。(高校, どちらとも言えない)
- 問題提起が欲しい, 報告だけではつまらない。(高校, どちらとも言えない)
- センター内部の事情や他校の状況が理解できて, とてもよかった。(高校, どちらとも言えない)
- 新テストについてももう少し踏み込んでほしかったが, わかりやすい話でした。(高校, どちらとも言えない)
- 事例のみではなく, 本テーマに沿った話も聞きたかった。(高校, どちらとも言えない)
- 目新しいことがなく, あまりおもしろさを感じませんでした. スミマセン。(高校, どちらとも言えない)
- 結局のところ何が言いたかったのか。(高校, どちらとも言えない)
- 大塚氏の内容が速くておいつかない. 時間をみあやまっていたのでは?。(高校, どちらとも言えない)
- 基調講演とのずれが気になった。(高校, どちらとも言えない)
- これまでの経験(成功体験)を基にした教員の体験談であったため少々もの足りなく感じました。(高校, どちらとも言えない)
- 前半はまあまあ良かったが, 後半はよく聞く内容だった。(高校, どちらとも言えない)
- 現場の報告については, もっと問題を提示していただきたいかった。(高校, どちらとも言えない)
- 高校側の報告は主張点が不明瞭で何を伝えたいのかわからなかった。(高校, 改善すべき)
- 大塚先生には「共通テストとしてのセンターの課題」「記述式問題の課題」について具体的な話をしていただきたいかった. 駒形先生にも, 現場教員としてセンターをどうとらえ, 変更に対する疑問を述べていただきたいかった。(高校, 改善すべき)
- 高校教員の話はありきたりでいらぬと思います。(高校, 改善すべき)
- センターにこだわりが見られたが, 新入試についての個人の考えが聞きたかった気がします。(高校,)
- わかりやすかった, もう少し時間をとってほしかった。(大学, よかった)
- やや内容と無関係でした。(大学, よかった)
- 作問側の立場の意見を聞ける貴重な機会だった。(大学, よかった)
- DNC の作題の裏話が聞けたので。(大学, よかった)
- 高校現場の気持ちがわかった。(大学, よかった)
- 大塚副所長は非常に良かった. 前向きな対応が可能な方だった. この話を聞けただけで出席した価値があった. 高校教諭の話は時間の無駄. 何を言うべきか全く心得ていない, 企画者が伝えてない(?) 全く不要。(大学, よかった)
- 生の声が聞かれた。(大学, よかった)
- 高校側の観点から, 入試改革に向けての参考になった。(大学, よかった)
- 上述のとおり。(大学, よかった)
- 複数の視点が用意されていたこと。(大学, よかった)

- 大学入試センターの現状，高校の現場についてよく解った。（大学，よかった）
- 大学入試センター，高校現場のセンター試験と入試教育の現状がわかった。（大学，よかった）
- 現場の立場での苦勞が理解できた。（大学，よかった）
- 執行の現場を知ることができた。（大学，よかった）
- 2 つとも現状報告の「声」としては分かるが，発展性がない．別々な切り口を期待した。（大学，どちらとも言えない）
- 現状のまとめになっているが，おもしろみがない。（大学，どちらとも言えない）
- 現状報告だから。（大学，どちらとも言えない）
- 現状の説明がはっきりしなかった。（大学，どちらとも言えない）
- 高校の方が物足りない。（大学，どちらとも言えない）
- センター，高校の実情が理解できた。（その他，よかった）
- 具体的でよかった。（その他，よかった）
- 参考となった。（その他，よかった）
- 興味深い話ではあったが，学びはもっとあっていい．できれば，文科省の人に報告してもらえれば良かったかも。（その他，どちらとも言えない）

5. ディスカッションは如何でしたか.

- 質問が的確だったので，面白く伺いました。（高校，よかった）
- 本音が出ていた。（高校，よかった）
- 本音がかいま見えて良かったです。（高校，よかった）
- 大学—高校—入試センター3 つの視点からセンター試験についての評価ができた。（高校，よかった）
- 活発であった。（高校，よかった）
- 講演で疑問だったことがクリアになりました。（高校，よかった）
- 各質問に対してパネリストの回答がとてもよかった。（高校，よかった）
- 話は参考になった．ただ壇上の相互の意見交換も聞きたかった ※開始時と総括の司会の話はもっと簡潔であってほしい。（高校，よかった）
- 講演で触れなかった所が再度まとめて知ることができた。（高校，よかった）
- 中身のあるディスカッションであった。（高校，よかった）
- 本フォーラムで「一番知りたいこと」←高大接続システム改革の方向性（新テストの実施の有無等）が確認できました。（高校，よかった）
- 現状を理解するのに役立ったから。（高校，よかった）
- 各々の立場で明瞭にご回答されていて良かった．ニュアンス的な部分もよく分かった。（高校，よかった）
- 時間が短い。（高校，よかった）
- 時間をもっと取ってもらいたい。（高校，よかった）
- ある程度，本音が聞けたこと。（高校，よかった）
- 南風原先生から，全体を通してだが接続会議の様子が知れてよかった。（高校，よかった）
- 昨年に比べて意見のやりとりがありました。（高校，よかった）
- 違った立場からの新入試のあるべき姿やセンターについての評価などについての考えが聞けてよかった。（高校，よかった）

- それぞれのお立場の生の声が聞けて有意義だった。(高校, よかった)
- 具体的な話でよく理解できた。(高校, よかった)
- 新テストに多くの問題・課題があることを共有できた。(高校, よかった)
- 質問に対して1つ1つ丁寧に答えていただけたので。(高校, よかった)
- 審議会の内実(雰囲気)などが少し見えてきた。(高校, よかった)
- 質問用紙を回収し, パネラーによる討議のスタイルは, とてもよい。(高校, よかった)
- 率直な話を聞けたので参考になった。(高校, よかった)
- 講演で話すことができなかった部分まで聞けたこと。(高校, よかった)
- 新テストは本当に実施されるのか。(高校, よかった)
- 「新テストはやる」それを前提としてこれからは対応していこうと思います。(高校, よかった)
- 本音を聞くことができた。(高校, よかった)
- 疑問点がかなり明確になりました。(高校, よかった)
- 接続会議について内情が。(高校, よかった)
- もっと時間をとれば良かった。(高校, よかった)
- 共通試験が本当に実施されるのか, という点について, 同感でした。(高校, よかった)
- 高大接続会議の裏話し等興味有。(高校, よかった)
- 生の声が聞けてよかった。(高校, よかった)
- 中教審, センター主導でなく, 大学が新入試を作っていくということが分かった。(高校, よかった)
- 課題は多いと思われるが, 理想と具体性のギャップをどう埋めていくかだと思う。学校でやること＝受験と考えがちなので…生徒に求める力と受験がつながってしまうのが残念なのですが…。でもシステム的なものにつながってしまいますよね。(高校, どちらとも言えない)
- 帰りの時間もありません。(高校, どちらとも言えない)
- 新しい方式の方向性(CBT など)で, 可能なこと, 是非などについてもくわしく聞きたかった。(高校, どちらとも言えない)
- 論点がしぼりづらかったのではないかと。(高校, どちらとも言えない)
- 様々な観点からの議論であったので, 半端な質疑応答の感が否めない。(高校, どちらとも言えない)
- 各々が本音で話して下さり, 首肯できる点が多かった。(高校, どちらとも言えない)
- 時間をのばすことは難しいとは思いますが…。(高校, どちらとも言えない)
- 明確な回答がしづらい問いが多かった。(高校, どちらとも言えない)
- 大学入試改革を推進している立場の方も話者として入れるべき。例えば文科省など。(高校, どちらとも言えない)
- 司会者の前置きが長すぎると思います。せっかくの機会なので, カットすべきことはカットして, できるだけ多くの質問をシェアした方がよいのではと感じました。(高校, どちらとも言えない)
- 司会の方の進め方が今ひとつ。(高校, 改善すべき)
- 時間配分的に討議・討論までに至らない。パネルディスカッションとはなっていないが, フォーラムよりは講演会と質疑応答という感じである。(高校, 改善すべき)

- 共通テストの採点基準がなかなかクリアにならない。(高校,)
 - 新テストの内容の危うさ, 制度の問題がさらに深く理解できた(具体的なイメージ)。(大学, よかった)
 - 各人が話せる範囲で率直に意見をのべてくれた。(大学, よかった)
 - 最後に多少はっきりしたから。(大学, よかった)
 - パネリストの人選がよかったです。(大学, よかった)
 - 具体的な話(本音)が聞けて良かった。(大学, よかった)
 - それぞれの意見は聞くべきものあった。(大学, よかった)
 - 新試験への不安が出た。(大学, よかった)
 - 現場のリアルな質問が参考になった。(大学, よかった)
 - 放談という感じだった。もう少しまとめて欲しかった。(大学, どちらとも言えない)
 - ありがちだが, 質問と回答の会。発言の長い方も。最後は良かったです。(大学, どちらとも言えない)
 - 時間が不足していた。会場側にも振るべきだと思う。(大学, どちらとも言えない)
 - 討議がもっとできたら良かった(が, 時間には限りがあるので…)。(大学, どちらとも言えない)
 - 最初の司会の方の話が長い, 本質をズバズバ討議すべき, 内容は良かったです…。(大学, 改善すべき)
 - 司会が下手, 余計なことしゃべりすぎ。(大学, 改善すべき)
 - 時間が短い。(大学, 改善すべき)
 - 話しにくいことが多いと思いますが, 本音が聞けてとても勉強になりました。(その他, よかった)
 - やや時間が短かった。(その他, どちらとも言えない)
 - もっと反対意見のやり取りが聞きたかった。「ディスカッション」というより「追加コメント」だった。(その他, どちらとも言えない)
 - 南風原先生の鋭い意見やツッコミがよかった。(その他,)
7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば, どのような形式, テーマを望まれますか。
- 高校教員としては流行の「アクティブ・ラーニング」など取り上げて欲しいテーマです。入試では新テストの方向性が定まったら, 「基礎テスト」も取り上げて欲しい。(高校)
 - 大学・高校側だけでなく文科省の担当者(行政側)を入れたディスカッションが盛り上がるのではないのでしょうか。(高校)
 - 高大接続改革については, 進展があれば追跡的にとり上げて実施していただきたいと思います。(高校)
 - アクティブラーニング総括。(高校)
 - 今回のような形で, 勉強になりました。(高校)
 - 高校生(大学生)育むべき力は?。(高校)
 - 今後も「大学入試改革」についてさまざまな角度から取り上げてほしい。(高校)
 - ここ数年進んでいない AL の実情と問題点を学問的にしっかり考えていければと思います。(高校)
 - 直近に問題(課題)となっている対象に止まらず, 創造力を生む各種の取り組みなど

の紹介や、報告などを取り挙げて頂ければ嬉しいです。(高校)

- 高大接続の具体的内容。(高校)
- 現在の大学教育と今後の大学教育のあり方について。(高校)
- ここ数年は同様のテーマで良いと思います。(高校)
- この形でよいと思います。(高校)
- やはり高大接続のメディアたる入試に関心があります。(高校)
- 高校の教科書の内容中に、すでに必要のない内容があると思われる(すでに大学ではまったくつかわない知識の暗記など(化学では沈殿の暗記, 系統分離)) 分野の精選について(新しく入れるべきことと, 減らすべきこと)。(高校)
- テスト学の立場からの新テストの持つ課題について継続的に取り上げてほしい。加えて高等教育にかかわる部分で教育産業の問題を取り上げてほしい。(高校)
- 新テストに向けての検討と公開できる情報がある程度まとまった段階で第2弾を。(高校)
- 現在のままがよい。(高校)
- 新テスト(センター), 小論文。(高校)
- 文科省の方を読んでディスカッションしてほしい。(高校)
- 高大接続の今後の具体的な入試像を教えていただきたい。もし、分からなくとも、こうあるべきという提示でもいいと思う。過去の検証は大切だが、今後が高校教育側としては興味がある。(高校)
- 今回のように現場の高校・大学、当該分野の専門の方々が参集し、それぞれの立場からの話を伺える企画が有難い。加えて、受験産業、マスコミの代表者も加えてディスカッションだと一層興味深い。文科省の担当者も呼んで、頂けると、更に興味深い。(高校)
- テーマを継続して下さい。(高校)
- 今回に続く形で、高大接続改革の現状と課題について話題にしていきたいと思います。(高校)
- この1年で大きな変化があると思います。今年のテーマを継続するのが良いと思います。(高校)
- また改革の最前線の情報を取り上げていただきたいです。(高校)
- 今後とも宜しくお願い致します。(高校)
- 大学入試の改革を引き続き取り上げてほしい。大学関係者、高校関係者、文科省などでディスカッションをして欲しい。(高校)
- 今回テーマを継続。(高校)
- 「大学教育はどのようにあるべきか」。(高校)
- 文科省中心にトップダウンで進められる大学改革や、日本学術会議が見直そうとしている軍事検討協力への道など、検討していただければ。(高校)
- しばらくは入試改革をしっかりと検討してほしい。(高校)
- 大学が要求する学力とは?。(高校)
- 新入試の導入の”真”の目的。(高校)
- 新しい制度が具体的にになってきた段階で、前向きな形式で取り扱ってほしい。(高校)
- 大学改革と個別試験および高校教育改革について。(高校)
- 高校改革, 大学改革, 入試改革を個々の立場と連携の立場から論じてほしい。(高校)

- 今後の大学入試改革の方向性を知りたいと思います。(高校)
- 現役性に向けて、「入試を突破するために3年間で何をすべきか」を具体的にしてほしい。理想論で大学に入学できるわけではない。この制度が3年生で適用される新入生に1年生時に話ができるようにしたい。(高校)
- 定期的に高大接続の問題を開催して頂きたい(今後とも)。(高校)
- また大塚先生のお話を伺いたい！。(高校)
- 大学入試の時期や秋入学について。(高校)
- 生徒たちを不幸にさせないために、高校教員はどうアクションすべきか。(高校)
- 現状のように高大連携(接続)の観点から、高校側も参加できるテーマを残してほしい。(高校)
- 大学入試も含めて、「評価」についてテーマとして扱ってほしい。(高校)
- 議論が盛り上がるような場設定により、課題点もうかび上がるのではないのでしょうか。(高校)
- 新テストの仕組、内容など。(高校)
- 大学入試改革を推進している立場の方も話者として入れるべき。例えば文科省など。(高校)
- 具体的な入試問題や、高校でどのような目標を持った取り組みをしていくべきなのか、個人的には見えていないので知りたいです。(高校)
- 同じ意見の傾向の方だけでなく、対立意見も聞きたかったと思います。(大学)
- 同一テーマ(今年度の進んだ点を踏まえて)がよい。(大学)
- この問題を継続してほしい。(大学)
- 高大連携の多様なありかた。(大学)
- 入試改革、高校教育と大学教育の改革。(大学)
- 高大接続、入試改革の具体化に向けた情報提供となるテーマをお願いしたい。(大学)
- 早期入学について。(大学)
- なかなかお聞きできないお話を聞かせていただき、勉強になりました。今後も期待します。(大学)
- 引き続き、入試改革に関するテーマを希望します。(大学)
- 大学内の授業形式のあり方、評価の方法について。(大学)
- ぜひ今後も「新テストについての動向」を取り上げていただきたい。(大学)
- 大学改革と予算。(大学)
- 入試は高校の教育改善、大学を求める学生の選別として。(大学)
- キャリア教育について。(大学)
- 時代にそった入学者(受験者)の変容。(大学)
- 大学入試改革の第3弾。(その他)
- 日本の大学の世界における位置付け。(その他)
- 小・中・高・大と長いスパンでの理想の教育(学力の向上)の追及について。(その他)
- 今回の課題がどのように改善されつつあるか、伺いたいです。(その他)
- 講演者の意見の不一致を前提とした討議。(その他)

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください。

- 高校生以下は公立なら学習指導要領で私学なら建学の精神に基づいて将来のあるべき人物像を育成していく視点をもつが、大学の場合は各大学の建学の精神を超えた「日本人像」をどう育成していくのか、議論があっても良いのでは？！→「大学教育における求められる日本人の将来像」。(高校)
- 有意義な時間であつという間に終会した印象があります。(高校)
- 勉強になりました。ありがとうございました。(高校)
- 新テストの情報が少ない中で、勉強になりました。新テストをやらない、延期という選択肢がまだあるのかと悩ましい気持ちです。(高校)
- 久しぶりに参加しました。とても良かったです。ありがとうございました。(高校)
- とても勉強になりました。自分の頭でしっかり考えて進んでいこうと思います。(高校)
- 特になし。(高校)
- (事前に関心を聞く方法(Webをつかうなど)はないでしょうか。) センターテストの基本的認識が、自分とズレてはいないことが分かり、その点は良かったと思います。今後についての方向性についての話し合いが今後にあると良いかと思いました。(高校)
- 高校現場の教員が登壇者に質問をしてしまうと、視野の狭い議論になってしまう。そうしない工夫、会場からの質問の整理が必要ではないか。高大の見方が交錯していくことがこのフォーラムとしては重要と考える。(高校)
- 現状の課題を捉えなおすのにずい分参考になった。(高校)
- 未来志向で議論をお願いしたい。(高校)
- 現場の多くの人が不安に思う点をタイムリーに企画していただけると有難いです。特に生徒(高校生)、保護者の大学入試に対する意識は年々高まっていますので、今回のような企画は有難いです。(高校)
- ありがとうございます。(高校)
- 学習現場と新テストが導入されるか否かで、現在の教育活動が振り回されないよう、しっかり足場を固めていく必要があると感じました。ありがとうございました。(高校)
- ディスカッションをもう少し長く取っていただければと思います。(高校)
- この声が届くと良いのですが、新テストの準備が始まっている学校もあることをご理解下さい。(高校)
- 首相が「改革」をアピールする最良の手段、それが教育。その改革の成否は何年たっても検証されることがない。今回は夕暮れ近づく”ニッポン”のあせりを混入して目先の教育いじりに走ってる気がしました。(高校)
- 今回はいい人選だったと思います。(高校)
- とても貴重な機会をありがとうございました。(高校)
- 今日の内容がどういう形で外部に発信されていくのか楽しみ。東北大のHPや報告書になるのだろうか？。(高校)
- センターの問題の内容自体に問題がどれだけあるのか。知識だけで解ける問題があったとして、どこが問題なのか、noisy minorityにおどらされてはいないのか、などと、いろいろ考えさせられるフォーラムでした。(高校)
- 現場にいて、新テストの情報を得るたび、いつも大なり小なり危惧を覚えます。複数回しかり、記述式しかり…なぜ「お上」はそんな単純なことが分からないんだろう、と不思議に思っています。したがって今日のフォーラムは非常に共感を得られました。が、「お上」に提言できる方々に共感できたということを考えると、もうどうしようもない、という悲観的な気分になります。(高校)

- フォーラムで聞けた素直な話が参考になりました。(高校)
- 全体としては盛り沢山、勉強になりました。(高校)
- ありがとうございます。これだけ多くの先生が集まって共通認識をはかれたのは素晴らしいことだと思います。南風原先生の言うように新テストに対してもっともったやかかわってほしいと思います。(高校)
- 討議にもっと時間と、テーマ設定をしていただきたい。(高校)
- できれば土・日に開催していただければ、より参加しやすいと思います。(高校)
- また参加したい。(高校)
- 大講義室のような場所でも良いかも、「机」必ずしも必要ではないが、進路課からの案内で気づきました。今まで 20 回以上フォーラムがあったことを知りませんでした。来年も参加したい。本学 OB です。(高校)
- 新しい高大接続改革について、高校現場が一周遅れにならないか心配しています。それが生徒への不利益につながることを避けたいと考えています。(高校)
- 新テストの導入に伴う、課題の検討を。それより、新テストの細部が見えず指導に苦慮している。(高校)
- 言い回しはともかく、「2020 年度からの新テスト導入！」という話題が学校現場でももちきりになっており、具体案があまり見えない中、一人歩きしている感が否めません。今日のお話を聞く限り、新テスト導入は難しいか？これまでのセンター試験と大差ない印象です。受験生あるいは学校現場が混乱しなくて済むよう対応をお願いしたい。加えて、私も大学入試の選抜方法と大学教育で目標とすることは物理的な面からもわけて考えるべきだと思います。(高校)
- もっと、新制度について踏み込んでいただきたかった。(高校)
- 音響が悪い、声が明確に聞こえない。(大学)
- 大変よかったです。(大学)
- パソコンの段取りをちゃんと。(大学)
- ありがとうございます。(大学)
- 新テストは結局どうなっていくのか？。(大学)
- パネリストの講演をもっとコンパクトに時間厳守にして、討論の時間を確保すべき。司会の手際が悪い(司会の話で時間を取りすぎる)。(大学)
- 基調講演のテーマが、とてもタイムリーで勉強になりました。(大学)
- 「大学が主体となって行っていくべき」テストであることを肝にめいじたい。(大学)
- いつまで、このような議論をしているのでしょうか。現状に対する批判より、そろそろ改善案を皆で考え、提案していく時期ではないでしょうか！。(大学)
- 賛成、反対の代表するヒトの討論。(大学)
- また、このような機会があれば受講したいです。(大学)
- 改革推進派の先生もメンバーに加えて欲しかった。(その他)
- 本日はありがとうございました。(その他)
- ディスカッションが本音が聞けて一番良かった。(その他)
- ありがとうございます。(その他)
- ディスカッションはとくに有意義でした。もっと多めに時間を取ってもいいのではないかと思います。今日は貴重なお話をありがとうございました。(その他)
- 討議の前振りが長い。(その他)

参加者統計

1. 参加者総数: 374 名

(講演者・招待参加者: 13 名, 大学: 120 名, 高校: 183 名, スタッフ等: 17 名, その他: 41 名)

2. 参加者地域別

宮城県内: 149 名

宮城県以外の東北地方: 89 名

(青森県: 15 名, 岩手県: 19 名, 秋田県: 10 名, 山形県: 21 名, 福島県: 24 名)

東北地方以外: 136 名

(北海道: 17 名, 茨城県: 4 名, 栃木県: 8 名, 群馬県: 3 名, 埼玉県: 2 名, 千葉県: 5 名, 東京都: 40 名, 神奈川県: 4 名, 新潟県: 7 名, 富山県: 2 名, 石川県: 2 名, 福井県: 1 名, 山梨県: 1 名, 長野県: 2 名, 静岡県: 8 名, 愛知県: 6 名, 三重県: 2 名, 滋賀県: 1 名,
京都府: 1 名, 大阪府: 5 名, 兵庫県: 2 名, 和歌山県: 1 名, 島根県: 2 名, 岡山県: 2 名, 広島県: 1 名, 香川県: 1 名, 福岡県: 2 名, 長崎県: 1 名, 宮崎県: 1 名, 沖縄県: 2 名)

多くの方々に御参加いただき、ありがとうございました。

第 24 回東北大学高等教育フォーラム運営スタッフ

統括責任者	石井光夫	
企画責任者	倉元直樹	
事務局	宮本友弘	田中光晴

当日スタッフ

石上正敏	葛西未央	鎌田裕子
鎌田佳子	康世玫	熊井弘子
庄司強	鈴木かおる	田中秀樹
筈居文葉	西川真帆	

IEHE TOHOKU Report 68

第 24 回東北大学高等教育フォーラム報告書

新時代の大学教育を考える (13)

大学入試における共通試験の役割
— センター試験の評価と新制度の課題 —

発行：2016 年 11 月

編集：石井 光夫、倉元 直樹、宮本 友弘、田中 光晴

発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

Tel: 022-795-7551

Email: ieheoffice@ihe.tohoku.ac.jp

印刷所：株式会社 ホクトコーポレーション